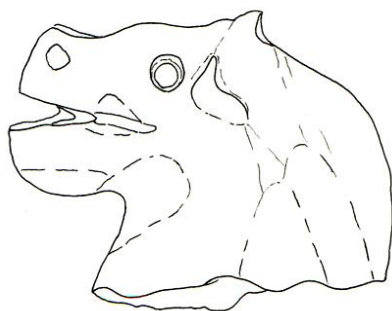


# 明和池遺跡確認調査報告書

吹田操車場跡地地区（仮称）の整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査



平成 21（2009）年 2 月

独立行政法人

鉄道建設・運輸施設整備支援機構

摂津市教育委員会

# 序文

明和池遺跡は、千里丘陵南東部からなだらかに傾斜してきた低地部に位置します。遺跡の大半が吹田操車場跡地内に位置します。吹田操車場跡地は摂津市と吹田市にまたがり、本市では明和池遺跡、吹田市では吹田操車場遺跡として周知の埋蔵文化財包蔵地となっております。

遺跡の北側には山田川、南側には正雀川が流れています。明和池遺跡は山田川が形成する扇状地内に位置します。この山田川により吹田市の蓮間池に源流を発し安威川へと流れ、この土地に肥沃で集落や耕作を営むのに適した景観が形成されました。南下すれば淀川の舟運に伴う江口も位置し、北側には亀岡街道や乙辻街道に接し、山城と難波を結ぶ幹線道路である三嶋路ともつながり多くの人々の往来がありました。まさに水陸の交通の要衝として栄えた場所でした。

この地に大正 12 年に東洋一と言われた吹田操車場が建設され、鉄道貨物輸送の拠点として栄えました。しかしトラック輸送の隆盛とともに、貨物輸送も減少し昭和 59 年にはその機能の大部分が廃止され約 60 年間にわたる役割を終えました。

現在、この地に摂津市では「緑と水につつまれた健康・教育創生拠点」をテーマに都市型居住空間や防災機能を有した公園など新しいまちづくりに取り組んでいます。

明和池遺跡は昭和 8 年、庄屋一丁目にあった明和池の底土から弥生～古墳時代の土器が発見され、知られるようになったものです。これまで平成 10 年の（財）大阪府文化財センターによる試掘調査などは実施されていましたが、まちづくりを計画している範囲については、ほとんど調査所見がなく遺跡の性格や年代など不明な点が多くありました。このような状況から、今後まちづくりを進めていく中で、埋蔵文化財の状況を確認するため鉄道建設・運輸施設整備支援機構が確認・試掘調査を実施することとなりました。市として依頼を受けて教育委員会の文化財担当職員を派遣しました。

今回の調査により、溝の跡や掘立柱建物の跡など遺構と言われる大地に刻まれた痕跡や弥生土器や須恵器と言われる古墳時代の土器、飛鳥時代の土馬など多くの本市の古代を解明する上で貴重な資料を得ることができました。歴史を語る過去の資料として、また現在に活かし将来に伝える資料として活用していきたい所存でございます。

最後になりましたが、調査にあたって多大なるご協力いただきました地元の方々や関係機関に深く謝意を表しますとともに、今後も文化財保護にご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成 21 年 2 月

摂津市教育委員会  
教育長 和島 剛

# 例 言

1. 本書は、平成 19 年（2007）年度・平成 20（2008）年度に「吹田操車場跡地地区（仮称）の整備に関する基本協定書」に基づき独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構が実施した千里丘 7 丁目地先に所在する明和池遺跡の発掘調査報告書である。
2. 確認・試掘調査を実施するにあたっては、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構からの調査協力依頼により、本市は摂津市教育委員会生涯学習スポーツ課伊部貴雄を派遣した。整理作業については、確認・試掘調査期間中は現地に設けた現場事務所で行い、確認・試掘調査終了後は摂津市役所（摂津市三島一丁目 1 番 1 号）において実施し、資料の保管も同所で行っている。
3. 本文の執筆は、伊部が行った。
4. 確認・試掘調査では、当初調査区の上端が 6 m × 6 m、底辺が 4 m × 4 m となるように計画していたが、調査区を設定する場所に架線や通路などがあり、状況に応じて、その規模は各調査区で異なる結果となった。
5. 図中の方位は磁北を示し、標高は T. P.（東京湾標準潮位）を示す。
6. 遺構・遺物・写真図版は今後の電子出版を見越しデジタルデータ化したため、縮尺は任意である。図面に付与しているスケールを参照されたい。
7. 掲載した遺構・遺物図版は遺構台帳の通し番号を付与した。
8. 出土遺物・写真・図面など記録類は、摂津市教育委員会で保管している。広く利用されることを希望する。
9. 確認・試掘調査及び資料整理に際しては、大阪府教育委員会の指導を受けるとともに、次の方々のご指導・ご協力を得た。また本調査と前後して、近接する千里丘駅周辺で都市計画道路千里丘三島線道路改良工事に伴う発掘調査が実施されていた。現地で大阪府教育委員会文化財保護課発掘調査担当職員の方々に千里丘陵の堆積についてなど様々なご指導いただいた。あらためて記して感謝いたします。（五十音順・敬称略）

一瀬和夫、小笠原好彦、岡本圭司、小川裕見子、賀納章雄、亀井聡、小浜成、藤原学  
堀口健二、増田真木、森屋直樹、柳本照男、山上弘

10. 確認・試掘調査及び整理作業には、以下の方々の参加を得た。記して感謝いたします。  
（内外業調査専門員）今村悟 林鉄治  
（内業調査補助員）寺西あゆ子、平川葉子、谷真理子

# 目 次

## 第 1 章 位置と環境

|               |   |
|---------------|---|
| 摂津市の歴史的環境について | 1 |
| 千里丘陵について      | 3 |
| 1 m等高線から見た摂津市 | 4 |
| 周辺地域の条里制について  | 6 |
| 明和池遺跡の位置      | 6 |

## 第 2 章 既往の調査

|                                  |   |
|----------------------------------|---|
| 昭和 62 年明和池遺跡発掘調査について             | 7 |
| 平成 10 年大阪府文化財調査研究センター（当時）による試掘調査 | 7 |

## 第 3 章 調査の経過と方法

|         |    |
|---------|----|
| 調査区配置図  | 9  |
| 基準杭座標一覧 | 10 |

## 第 4 章 遺構と遺物

|         |    |
|---------|----|
| トレンチ 1  | 11 |
| トレンチ 2  | 14 |
| トレンチ 3  | 18 |
| トレンチ 4  | 19 |
| トレンチ 5  | 20 |
| トレンチ 6  | 27 |
| トレンチ 7  | 32 |
| トレンチ 8  | 33 |
| トレンチ 9  | 35 |
| トレンチ 10 | 36 |
| トレンチ 11 | 37 |
| トレンチ 12 | 39 |
| トレンチ 13 | 39 |
| トレンチ 14 | 39 |
| トレンチ 15 | 41 |
| トレンチ 16 | 41 |
| トレンチ 17 | 42 |
| トレンチ 18 | 48 |
| トレンチ 19 | 50 |
| トレンチ 20 | 50 |
| トレンチ 21 | 51 |
| トレンチ 22 | 51 |
| トレンチ 23 | 51 |
| トレンチ 24 | 52 |
| トレンチ 25 | 54 |
| トレンチ 26 | 55 |
| トレンチ 27 | 59 |
| トレンチ 28 | 68 |
| トレンチ 29 | 72 |
| トレンチ 30 | 73 |
| トレンチ 31 | 83 |
| トレンチ 32 | 83 |
| トレンチ 33 | 86 |

## 第 5 章 まとめ

|                       |    |
|-----------------------|----|
| 調査の成果                 | 88 |
| トレンチ 27 から検出された土馬について | 89 |

遺構図版一覧

|    |         |              |    |    |         |              |    |
|----|---------|--------------|----|----|---------|--------------|----|
| 1  | トレンチ 1  | 2 次遺構面平面図    | 12 | 37 | トレンチ 18 | 1 次遺構面平面図    | 48 |
| 2  | トレンチ 1  | 3 次遺構面平面図    | 12 | 38 | トレンチ 18 | 2 次遺構面平面図    | 49 |
| 3  | トレンチ 1  | 西壁断面図        | 13 | 39 | トレンチ 20 | 1 次遺構面平面図    | 50 |
| 4  | トレンチ 2  | 1 次遺構面平面図    | 15 | 40 | トレンチ 24 | 1 次遺構面平面図    | 52 |
| 5  | トレンチ 2  | 2 次遺構面平面図    | 15 | 41 | トレンチ 24 | 2 次遺構面平面図    | 53 |
| 6  | トレンチ 2  | 3 次遺構面平面図    | 16 | 42 | トレンチ 24 | 東壁断面図        | 53 |
| 7  | トレンチ 2  | 東壁断面図        | 16 | 43 | トレンチ 25 | 2 次遺構面平面図    | 54 |
| 8  | トレンチ 3  | 転車台検出状況      | 19 | 44 | トレンチ 25 | 西壁断面図        | 55 |
| 9  | トレンチ 5  | 1 次遺構面平面     | 21 | 45 | トレンチ 26 | 1 次遺構面平面図    | 56 |
| 10 | トレンチ 5  | 遺構内断面図       | 21 | 46 | トレンチ 26 | 3 次遺構面平面図    | 57 |
| 11 | トレンチ 5  | 遺構内断面図       | 21 | 47 | トレンチ 26 | No. 1 井戸検出状況 | 57 |
| 12 | トレンチ 5  | 2 次遺構面平面図    | 22 | 48 | トレンチ 26 | 4 次遺構面平面図    | 58 |
| 13 | トレンチ 5  | 杭列横断面図       | 22 | 49 | トレンチ 27 | 2 次遺構面平面図    | 60 |
| 14 | トレンチ 5  | 3 次遺構面平面図    | 23 | 50 | トレンチ 27 | 3 次遺構面平面図    | 60 |
| 15 | トレンチ 5  | 土器溜検出状況      | 23 | 51 | トレンチ 27 | 4 次遺構面平面図    | 61 |
| 16 | トレンチ 5  | 5・6 次遺構面平面図  | 24 | 52 | トレンチ 27 | No. 2 井戸平面図  | 61 |
| 17 | トレンチ 5  | No. 5 溝内断面図  | 24 | 53 | トレンチ 27 | 北・東壁断面図      | 62 |
| 18 | トレンチ 5  | 南・西壁断面図      | 24 | 54 | トレンチ 28 | 1 次遺構面平面図    | 69 |
| 19 | トレンチ 6  | 1 次遺構面平面図    | 28 | 55 | トレンチ 28 | 2 次遺構面平面図    | 70 |
| 20 | トレンチ 6  | 2 次遺構面平面図    | 28 | 56 | トレンチ 28 | 3 次遺構面平面図    | 70 |
| 21 | トレンチ 6  | 3 次遺構面平面図    | 29 | 57 | トレンチ 28 | 4 次遺構面平面図    | 71 |
| 22 | トレンチ 6  | 4 次遺構面平面図    | 30 | 58 | トレンチ 28 | No. 5 落込み断面図 | 71 |
| 23 | トレンチ 6  | 西・北壁断面図      | 30 | 59 | トレンチ 28 | 東壁断面図        | 71 |
| 24 | トレンチ 8  | 1 次遺構面平面図    | 34 | 60 | トレンチ 29 | 2 次遺構面平面図    | 72 |
| 25 | トレンチ 8  | 2 次遺構面平面図    | 34 | 61 | トレンチ 29 | 西壁断面図        | 73 |
| 26 | トレンチ 8  | 北壁断面図        | 35 | 62 | トレンチ 30 | 1 次遺構面平面図    | 75 |
| 27 | トレンチ 9  | 東壁断面図        | 36 | 63 | トレンチ 30 | 2 次遺構面平面図    | 75 |
| 28 | トレンチ 10 | 1 次遺構面平面図    | 37 | 64 | トレンチ 30 | 3 次遺構面平面図    | 76 |
| 29 | トレンチ 11 | 2 次遺構面平面図    | 38 | 65 | トレンチ 30 | 西壁断面図        | 77 |
| 30 | トレンチ 11 | No. 12 溝内断面図 | 38 | 66 | トレンチ 30 | No. 4 土器溜まり  | 81 |
| 31 | トレンチ 14 | 3 次遺構面平面図    | 40 | 67 | トレンチ 30 | No. 5 土器溜まり  | 81 |
| 32 | トレンチ 14 | 東壁断面図        | 40 | 68 | トレンチ 32 | 1 次遺構面平面図    | 84 |
| 33 | トレンチ 16 | 1 次遺構面平面図    | 42 | 69 | トレンチ 32 | 3 次遺構面平面図    | 84 |
| 34 | トレンチ 17 | 3 次遺構面平面図    | 43 | 70 | トレンチ 32 | 北壁断面図        | 85 |
| 35 | トレンチ 17 | No. 14 溝検出状況 | 44 | 71 | トレンチ 33 | 1 次遺構面平面図    | 86 |
| 36 | トレンチ 17 | 東壁断面図        | 44 | 72 | トレンチ 33 | 西壁断面図        | 87 |

遺物図版一覧

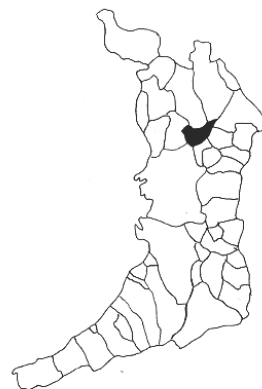
|    |         |                 |    |    |         |                 |     |
|----|---------|-----------------|----|----|---------|-----------------|-----|
| 1  | トレンチ 1  | 出土遺物（図 1～2）     | 13 | 16 | トレンチ 27 | 出土遺物 6（図 56～58） | 67  |
| 2  | トレンチ 2  | 出土遺物（図 3～4）     | 17 | 17 | トレンチ 27 | 出土遺物 7（図 59～60） | 68  |
| 3  | トレンチ 2  | 出土遺物（図 5～8）     | 18 | 18 | トレンチ 30 | 出土遺物 1（図 61）    | 77  |
| 4  | トレンチ 5  | 出土遺物（図 9～11）    | 26 | 19 | トレンチ 30 | 出土遺物 2（図 62～64） | 78  |
| 5  | トレンチ 5  | 出土遺物（図 12～18）   | 27 | 20 | トレンチ 30 | 出土遺物 3（図 65～79） | 82  |
| 6  | トレンチ 6  | 出土遺物（図 19～26）   | 32 | 21 | トレンチ 32 | 出土遺物（図 80～81）   | 85  |
| 7  | トレンチ 17 | 出土遺物（図 27～35）   | 46 |    |         |                 |     |
| 8  | トレンチ 17 | 須恵器壺（図 36）      | 47 |    | 遺物実測一覧表 |                 | 90  |
| 9  | トレンチ 18 | 出土遺物（図 37～40）   | 49 |    | トレンチ一覧表 |                 | 91  |
| 10 | トレンチ 26 | 出土遺物（図 41）      | 58 |    | 参考文献一覧  |                 | 92  |
| 11 | トレンチ 27 | 出土遺物 1（図 42～46） | 63 |    |         |                 |     |
| 12 | トレンチ 27 | 出土遺物 2（図 47～48） | 64 |    |         |                 |     |
| 13 | トレンチ 27 | 出土遺物 3（図 49～51） | 65 |    |         |                 |     |
| 14 | トレンチ 27 | 出土遺物 4（図 52～54） | 66 |    |         |                 |     |
| 15 | トレンチ 27 | 出土遺物 5（図 55）    | 67 |    |         |                 |     |
|    |         |                 |    |    | 遺構写真    |                 | 95  |
|    |         |                 |    |    | 遺物写真    |                 | 148 |

写真図版一覧

# 第1章 位置と環境

## 摂津市の歴史的環境について

大阪平野の北部に位置する摂津市は、淀川の豊かな自然に育まれ、古くから農耕がさかんで、大阪と京都を結ぶ水陸交通の要所として重要な役割を担ってきました。市域は東西 6 km、南北 4.5 km、面積は 14.88K m<sup>2</sup>。東から高槻市、茨木市、吹田市、大阪市に、南は淀川をはさんで寝屋川市と守口市に接しています。市内からは、北西にかけて六甲山や、千里丘陵越しに北摂の山々を、東から南には生駒や金剛の山並みを望むことができます。



**旧石器時代** 旧石器時代の遺跡は、摂津市域が沖積平野という事もあり、現段階で旧石器の検出例はありません。しかし『摂津市史・史料編』の中で「当市域基底部である沖積層下底には、周辺の丘陵上や段丘上とは異なった遺存状況で旧石器時代遺跡が眠っている可能性は十分に推察される。」と記されています。

**縄文時代** 鳥飼西地区淀川河床から若干の縄文土器片が発見されています。昭和 49 年（1974）10 月以降、淀川浚渫工事に関連しての採集資料です。現在、市で保管している縄文土器は 4 点です。縄文時代後期（1 点）と晩期（3 点）に比定される遺物です。縄文晩期の土器はいずれも小片で深鉢形土器の胴部、浅鉢形土器の胴部・口縁部です。色調は黒褐色で器面は研磨されていますが、胴部に条痕を残すものが見られます。滋賀里Ⅰ・Ⅱ式に比定されます。いずれもローリングをあまり受けておらず上流の高槻市柱本遺跡との関係が留意されます。柱本遺跡は高槻市柱本の淀川河床に所在します。この遺跡も昭和 46 年の浚渫工事の際に発見されました。前期から晩期にかけての深鉢を中心とした良好な資料が採集されています。近接する位置に柱本南遺跡があり、その一部が摂津市域の鳥飼上に含まれています。

淀川河床出土縄文土器  
浅鉢形土器口縁部片  
滋賀里Ⅰ式



縄文時代から近世にわたる複合遺跡である JR 千里丘駅西口前に所在する千里丘遺跡の縄文時代の地層から 137 点を越えるサヌカイト製石器の集積が検出されました。近くからは縄文土器破片も出土しました。これらの石器は 16 点が上層で検出されていましたが、この 16 点を取り上げてみるとレンズ状に集積していることが分かりました。堆積の中心部の厚さは約 9.3 cm となります。接合可能なものが数点ありましたが、石器として完成したものはありませんでした。

（参）『千里丘遺跡群発掘調査概要』  
都市計画道路千里丘三島線道路改良事業に伴う調査  
2006 年 3 月 大阪府教育委員会刊行  
※写真・図面は同報告書より引用



**弥生時代** 新在家1丁目の光蓮寺に弥生土器の壺が保存されています。昭和12年（1937）に鳥飼西700番地の水田をブルツウィスラー絹糸株式会社工事で掘削した際、地下3～10mの地点から出土したと伝えられるものです。壺は高さ26cm、最大胴幅27cm、土器表面は茶褐色、内面は灰褐色を呈し、底部は径8cmの平底です。土器の全面に朱を塗布した痕跡があり、胴部中位部に小穿孔をもち、口縁部は一部を欠いています。畿内弥生土器第1様式の時期が想定されます。『摂津市史・史料編（一）』ではこの土器を単なる貯蔵用ではなく、祭祀用・供献用・乳幼児壺棺などの用途の可能性を指摘しています。また土器にはローリング痕が少なく、鳥飼西地区には弥生時代前期の集落跡が遺存している可能性も指摘されています。その他、前述の鳥飼西地区淀川河床からも弥生土器片が採集されています。弥生時代前期の壺頸胴部や中期の壺胴部等です。現在市域で確認される弥生時代の遺物の多くは淀川の採集資料が占めます。しかし、安威川以北の千里丘東1丁目でも表土下1m以内で弥生土器が採集されているとあります。また、昭和62年大阪府教育委員会による明和池遺跡の発掘調査では弥生時代中期の土器、弥生時代末期の自然河川や土器が検出されています。今後、市域で弥生時代の集落跡の発見があるかもしれません。



←光蓮寺所蔵の弥生土器壺

**古墳時代** 蜂前寺跡をはじめ、東正雀遺跡などで古墳時代の遺構、遺物が検出されています。本市では前時代と比べ古墳時代になりますと遺構、遺物が質、量とも増加する傾向にあります。吹田市岸部地区に近接する味舌地区を中心として、須恵器が採集されています。昭和8年、旧味舌村大字庄屋（現在の庄屋1丁目）の共有用水池であった「明和池」の底土を1.3m掘り下げ、この土で隣接する牛屋池を埋め立てる工事中に雑多な土器とともに須恵器が採集されました。発掘調査によるものでなく詳しくは分かりませんが、南北に走る約1mほどの幅をもった帯状の砂層から発見されたようです。完形品としては横瓶（よこへい）、丸底壺、坏（つき）身・蓋が現在でも味舌天満宮に保管されています。これらの採集土器で明和池遺跡は周知されるようになりました。



（左）明和池出土須恵器横瓶（味舌天満宮蔵）

部分的に強い焼成によるヒビ割れが見られます。

（右）西之口出土須恵器高坏（奥田三男氏蔵）

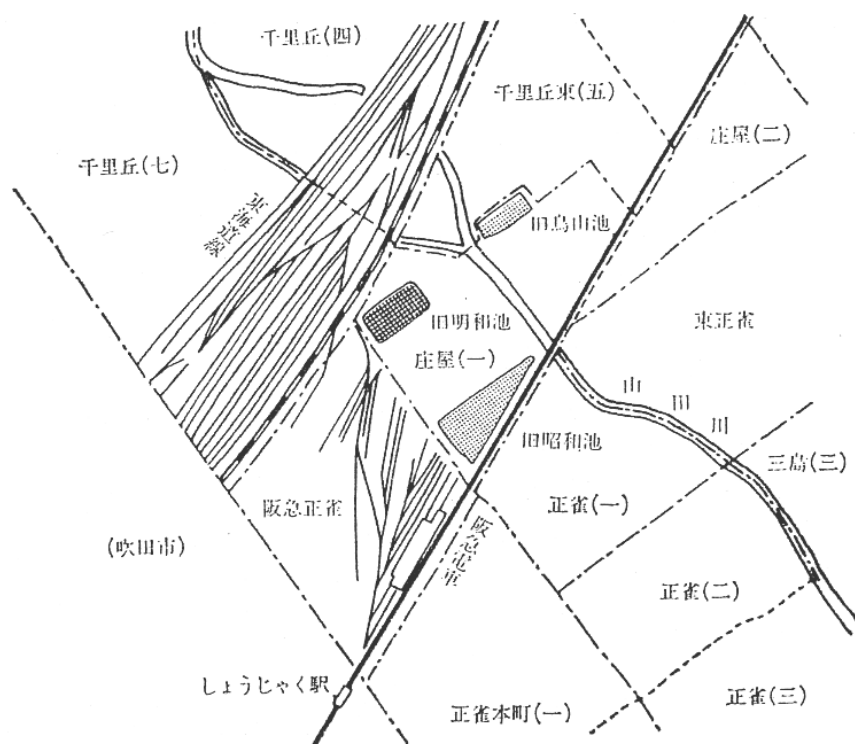
蓋と身が接着しています。

◎明和池遺跡が所在する旧味舌村から採集された須恵器は不良品が多い事が指摘されています。

**奈良・平安時代** それまで三嶋郡と呼ばれてきた北摂地域は、律令制度が施行された頃より、嶋上

郡・嶋下郡・豊嶋郡の三郡に分割されました。市域は嶋下郡に属していました。この時代から市域は歴史に名を残していきます。延暦4年(785)には当時の摂津職和気清麻呂による三国川(神崎川)に通じる分流工事、鳥飼付近の河川氾濫原や、中州では鳥飼牧の設置、「大和物語」に見られる宇多天皇の離宮鳥飼院への行幸などが文献資料等に散見されます。しかし現段階ではこれら歴史的事象について十分な発掘調査による検証が行われているわけではありません。今後の調査に期待がもたれます。

**中近世** この時代は、市域の中央を東西に流れる安威川より北の地域で遺構・遺物の検出が見られます。平成12年の蜂前寺跡発掘調査では14世紀から15世紀にかけての瓦を含む東西の溝が検出されています。また昭和62年明和池遺跡の調査で、鎌倉時代から室町時代にかけての掘立柱建物跡、戦国時代の大溝、各時代の土器、陶磁器が検出されています。千里丘東遺跡からは15世紀前半頃の土師皿7枚を使用しての地鎮が想定される遺構や土坑13、落ち込みなどが検出されました。須恵器、土師器、瓦器などの遺物も検出されました。発掘調査による所見以外にも戦国時代になると、本市域にも織田信長ら武将の陣が張られました。千里丘にある勝久寺は石山合戦の舞台となり、近くの境川には「流れの馬場」と呼ばれる戦場の跡もあります。江戸時代には、畿内、西国を支配するための拠点である大坂城の周縁という政治的、経済的にも重要な位置でした。



## 千里丘陵について

大阪平野は西側を大阪湾、北側を北摂山地や千里丘陵、東側を生駒山地や枚方丘陵、南側を和泉山脈や泉北丘陵で囲まれています。これらの山々に囲まれた大阪平野は現状では陸地化していますが、長い歴史の中では、海であったり湖であったりしました。その中で大阪北部に位置する千里丘陵は古大阪湖・古大阪湾に300万～20万年前に堆積した粘土と砂礫とが幾重にも重なった地層(大



阪層群)が六甲変動と呼ばれる地殻変動によって隆起した地形です。大阪層群そのものは大阪・京都・奈良・播磨の各盆地及び淡路島の丘陵地・台地の基部となるもので、千里丘陵は地質学的には大阪層群の模式地として知られています。北西の鳥熊山をピークに全体的には東に傾斜し市域では千里丘駅周辺に「八町池互層」と呼ばれる層が展開しています。丘陵内には幾筋もの河川による浸蝕作用で開折谷が発達し、小規模な扇状地など中位段丘を形成しますが、摂津市では市域の北西を除き古淀川の形成した沖積地に直接連続しているようです。沖積層の厚さは淀川と安威川の間で20mと最も厚く市域北西部でも1～5m程度です。沖積層の形成は主に古淀川の堆積作用ですが、安威川・山田川など千里丘陵を開折した川の堆積も複雑に入り混じっているものと思われます。

大阪層群は主に湖沼、河成の粘土、シルト、砂、礫層から構成されていて、12層の海成粘土層と35層以上の火山灰層をとまっています。海成粘土層は、下部よりMa-1、Ma0、Ma1…Ma10層と名付けられ、火山灰はその特徴や模式地に基づいてアズキ、ピンク、イエロー、八町池、山田火山灰層などと呼ばれています。これらの海成粘土層や火山灰層は連続性に富んでいて大阪層群の鍵層となっています。最初に大阪層群の層序がたてられたのが千里丘陵です。はじめて同層群で海成粘土と淡水粘土とが識別されました。またはじめて多数の火山灰層がこれら粘土層に挟まれて確認されました。現在千里丘陵は大阪層群の模式地に設定されていますが、宅地化がすすみほとんどその露出を見ることはできません。

## 1m等高線から見た摂津市

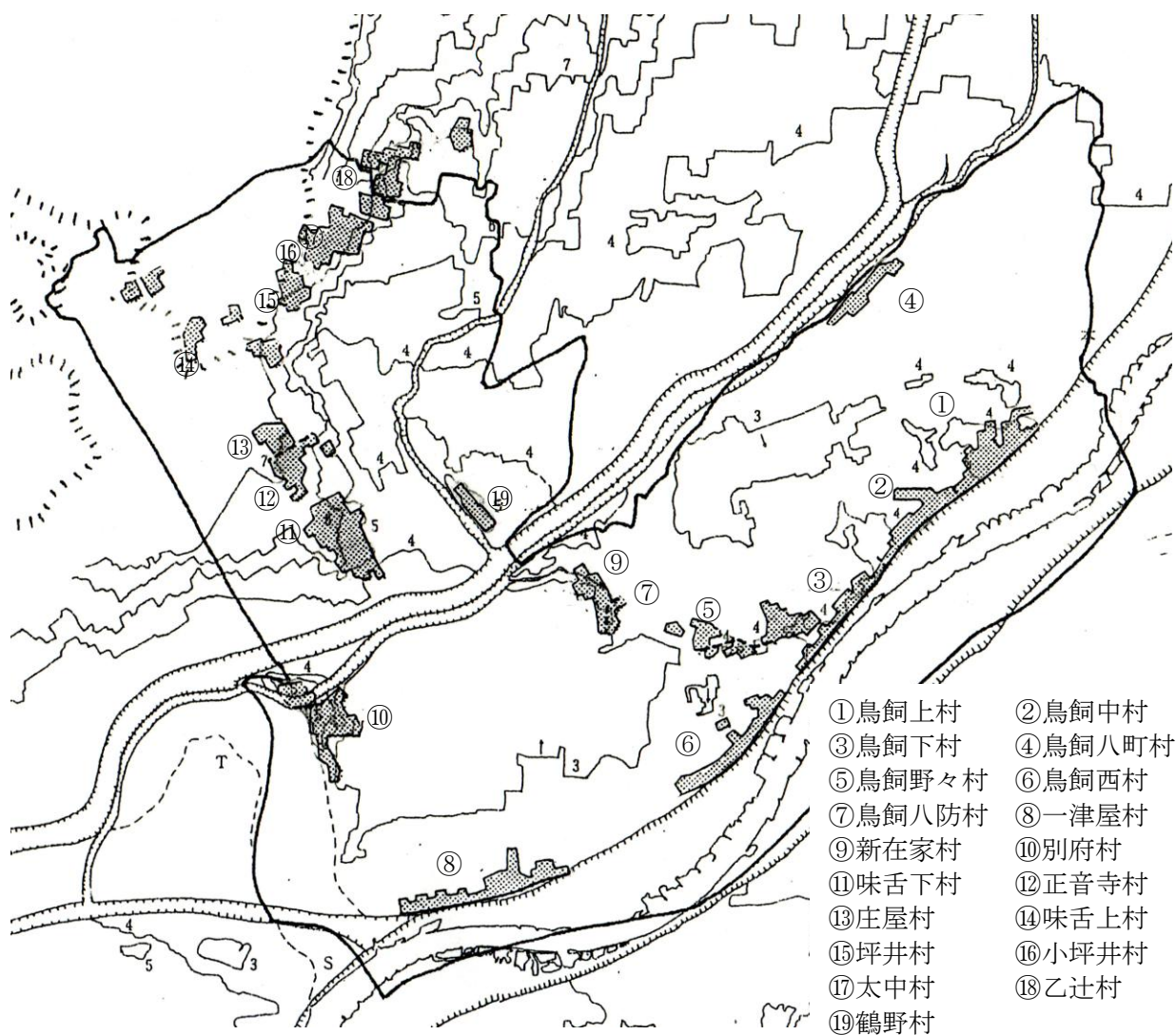
摂津市は千里丘陵と淀川右岸にはさまれた位置に立地します。市域では古代からこれらの立地状況に左右されながら集落が形成されてきました。とくに悠久の昔より泰然と流れる淀川は時には恵みを、時には自然の脅威をもたらし、わたしたちの生活に欠かせないものでした。この淀川と集落の変遷を考える上で、「淀川下流域における地形と河川流路の変遷『大阪文化財論集・大阪府文化財センター・2002』阪田育功」という研究論文があります。この論文では、1m等高線から淀川下流域の微地形を検討し淀川河川の流路、遺跡の変遷について考察を加えています。

昭和36年大阪府作成3,000分の1地形図に摂津市の範囲及び近世集落の位置を加筆した地図を作成しました。この地形図から当事の集落の立地を検討してみます。旧鳥飼村域のうち鳥飼上村・鳥飼下村・鳥飼野々村は標高4mの高まりに立地しています。鳥飼八防村は標高3mの高まりに立地しています。その他鳥飼中村・鳥飼西村は標高3mの堤防上に立地します。いずれにしても淀川の堤防上に上流から下流へと集落が南西に向けて縦長に形成されていることが見てとれます。また鳥飼八防集落が形成される標高3mのラインは輪道と呼ばれ、現在の鳥飼和道の地名にその名残が見られます。

北摂の山系から流れ出る河川のなかで、直接淀川に合流しているのは芥川とこれより上流の河川です。茨木川や安威川は淀川と平行に流れ、下流で神崎川に合流しています。これら河川の流れと淀川右岸の集落が形成される連続堤により一帯の排水を阻害する形となっていました。悪水が停滞して内水氾濫となる状況は江戸時代に至って激しくなります。江戸時代における淀川右岸の水利関係文書の大部分が悪水排除のための井路の開削や、その運営に対する取り決めが多くを占めるという状況からも悪水排除への苦労が伺えます。古代から施行された土地区画制度である条里制もこの地域では見られないという事も排水条件の悪さに起因しているようです。しかし、当事の人々は自らが住む土地の標高を知る事はなかったかも知れませんが、自然と標高が3m以上の高まりや堤防本体上に集落を営んでいました。安定した生活を営む努力を怠らなかったと言えます。現在では、

堅固な堤防が築かれ1 m単位の標高差で生活に変化はありません。しかし当事はこの標高1 m差が生活に安定をもたらす大きな要素であったことが窺えます。

北を北摂山地に西を千里丘陵に南を淀川に挟まれた摂津平野低地部では等高線はおおむね北東から南西に展開します。安威川以南では淀川堤防も同様に北東から南西に展開します。そしてその堤防上の標高4 mを境に集落を形成されてきた事が覗き見えます。標高3 m上にも集落は形成されますが、それ以下1～2 mの範囲には選別して集落を形成しなかったようです。安威川以北は標高4 mラインを基底とします。安威川の境を千里丘陵の段丘の端とするならば山裾は標高4 mからとなります。そしてなだらかに傾斜し市域で一番高いところは、昭和36年当時の地形図では標高7～8 mを測ります。鶴野村は標高5 m、味舌下村は5～6 m、正音寺村は6 m、庄屋村は7 m、味舌上村は7 m以上と、標高1 m単位に集落が丘陵に向けて形成されてきました。また三宅村の坪井、小坪井、太中、乙辻の各集落も5 mラインを超えた6～7 mの高さに北東から南西へ丘陵にそって集落が形成されました。安威川以北でも山田川、境川など大小河川が流れています。これらの河川は現在ではコンクリートで護岸され河川氾濫の心配は軽減されています。しかし当時、これらの河川も氾濫を繰り返したようです。発掘調査でも現在の河道から離れた場所で砂質土やシルト層など河川の影響が想定される堆積が検出される事があります。鳥飼と同様に安威川以北でも少しでも安定した高台に集落を営む努力を惜しまなかったようです。

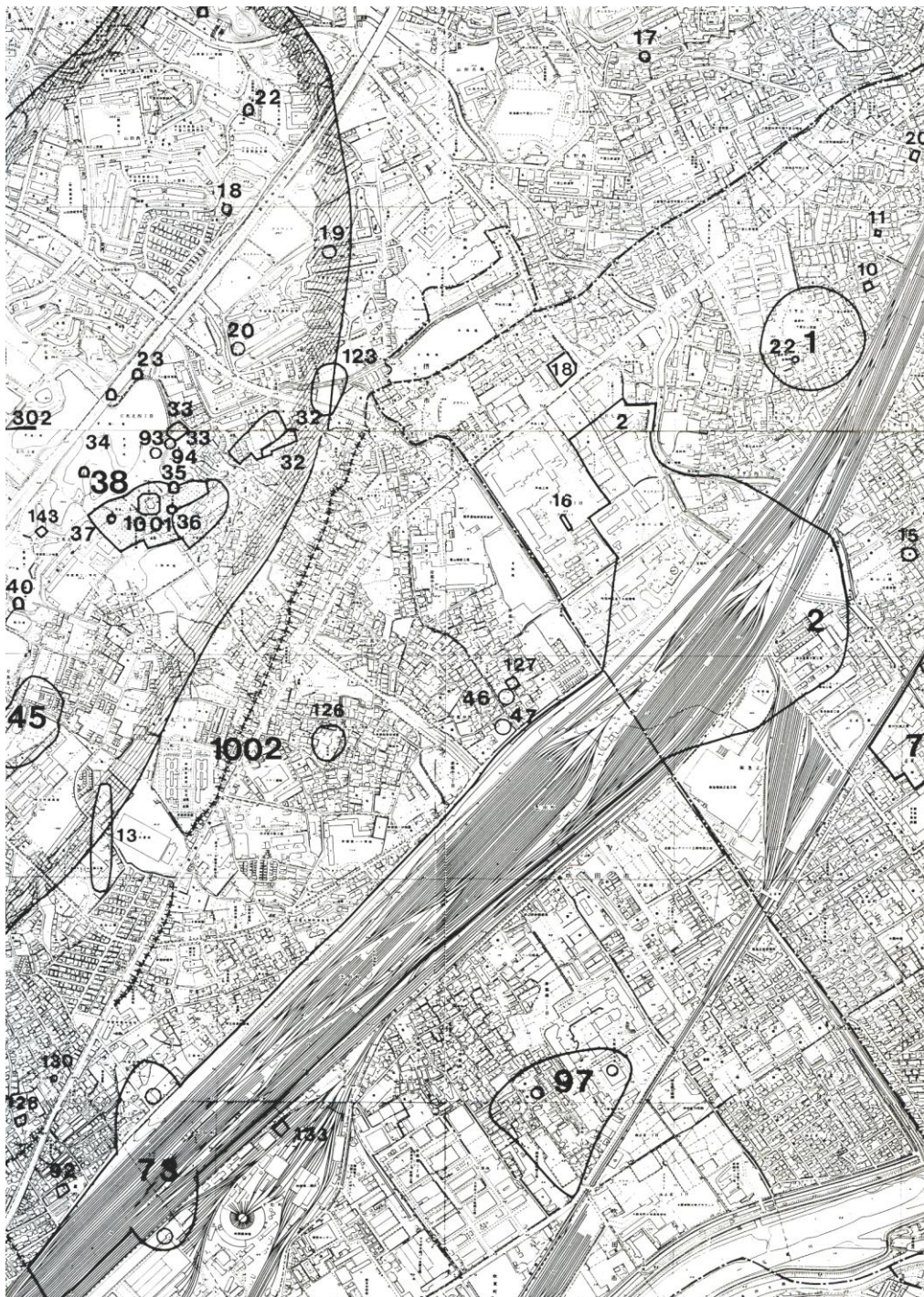




### 周辺地域の条里制について

摂津市を含む三嶋地方の条里は、正東西・南北に展開する嶋上・嶋下郡の条里を主体としながらも摂津・吹田市域では北西へ 33 度方位が転換しているという指摘があります。（服部昌之 人文研究 23－8「淀川右岸地域の条里と水無瀬庄」）実際、摂津市域の境川、正雀川、亀岡街道に囲まれた地域の町並みは現代でも東西軸よりずれています。この町並みの延長は吹田市域までのびています。

今回の調査地は、この条里が北西に 33 度転換している範囲内に位置します。



「大阪府文化財分布図」による明和池遺跡（2番）

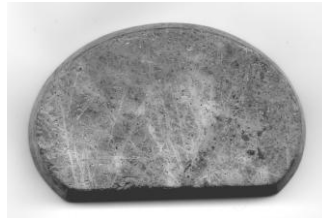
## 第2章 既往の調査

### 昭和 62 年明和池遺跡発掘調査について

昭和 62 年には大阪府教育委員会による大規模な発掘調査が実施され、7つの堆積から多くの遺構（柱穴・溝など）や遺物（土器・石器・木器）などが見つかりました。

明和池遺跡の集落は古墳時代の後期から営まれ、鎌倉時代から戦国時代にかけての中世の時代まで存続します。とくに戦国時代には大きな溝が条里制地割に沿って掘られ、耕地への用排水に使われたようです。

出土した遺物の大半は弥生時代から戦国時代にかけての土器ですが、その一部に当時としては高級品だった中国から輸入された青磁、北宋銭などが出土しています。また特筆すべき遺物は、平安時代のもと思われる石帯の飾り「丸鞆」（まるとも）です。大きさは3×4cm。厚さ8mm。裏面に一對の穴が3ヶ所あけられ革帯につけられるようになっています。



### 平成 10 年度 大阪府文化財調査研究センター(当時)による試掘調査

JR 梅田貨物駅の機能の半分を旧国鉄吹田操車場跡地へ移転することを計画した日本鉄道建設公団(当時)は、同用地内に試掘トレンチ 61 箇所を設定し、遺跡の範囲、遺構の存在、遺構面の枚数、遺構の種類を把握するために、大阪府文化財調査研究センターにより試掘調査が実施されました。摂津市側では2箇所のトレンチで調査が実施されました。以下同報告書より引用（一部抜粋）

#### No.60 トレンチ

5.7×5.7mのトレンチを設定した。地表下3.5mで、旧の耕土・床土層が検出された。その直下に、厚さ50cmの黒色粘土層が検出された。無遺物で泥炭化した固い粘土層であった。その下に、厚さ50cmの灰色粗砂層があり、無遺物だった。両層とも自然河川内堆積層と考えられた。遺構・遺物の有無は不明である。

#### No.61 トレンチ

5.7×5.7mのトレンチを設定した。地表下2.1mで、旧の耕土・床土層が検出された。耕土層中には、近世陶磁器・瓦片と古墳時代中期後半の須恵器高杯・土師器片が包含されていた。耕土・床土層の下には、厚さ60cmからなる中世～近世にかけての堆積層が検出された。上から、厚さ9cmの灰色粘土層、16cmの灰緑色粘質細砂層、6cmの灰色細砂層、17cmの灰茶褐色粘質細砂層、8cmの灰褐色粘質土層、6～20cmの灰茶褐色細砂層であった。上から2層目、3層目、5層目、地山層上には、それぞれの層の上位に酸化鉄・マンガンの沈着層が認められ、それぞれの時期の水田面の存在が明らかとなった。また、下から2層目の灰褐色粘質土層中には、弥生時代後期の甕底部片や須恵器甕、鎌倉時代の瓦器・土師器・青磁碗などの遺物が含まれていた。その灰褐色粘質土層を除去すると、北西から南東にかけての向きのスキ溝が10数本検出された。幅15～20cm、深さ5～7cmの浅いもので、埋土は暗灰色粘質土層であった。中世の畑跡と考えられた。その下には、調査区北西部に、幅1.6m深さ20cmの浅い東西方向の自然河川があり、地山層である暗灰褐色粘土層に達していた。

## 第3章 調査の経過と方法

### 調査の経過

明和池遺跡は、昭和8年、庄屋一丁目にあった明和池の底土から弥生～古墳時代の土器が発見され、知られるようになった。その後昭和62年に民間開発に先立ち、大阪府教育委員会により発掘調査が実施された。平成10年にこれまで未確定な部分が多かった当該地（吹田市側では吹田操車場遺跡、摂津市側では明和池遺跡）について、遺跡の性格や分布状況を確認する調査が実施された。調査の方法は4m×4mの調査区を吹田市側で59か所、摂津市側で2か所設定し行われた。これらの調査を踏まえ、遺跡の範囲は拡大されてきた。

明和池遺跡が所在する吹田操車場跡地のまちづくりについては、平成18年に「吹田操車場跡地まちづくり計画委員会」が開催され、平成20年には吹田操車場跡地まちづくりアイデア募集コンペ入選作品等が決定され、「緑と水につつまれた健康・教育創生拠点の創出」を目指した計画が進められている。

このような状況の中、整備計画を進める上で、埋蔵文化財の状況等を把握しておく必要があるため、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構（以下、「鉄道・運輸機構」とする）と協議の結果、操車場跡地内のまちづくり用地の確認調査を平成19年11月付で締結された「吹田操車場跡地地区（仮称）の整備に関する基本協定書」に基づき、鉄道・運輸機構が実施することとし、鉄道・運輸機構から本市への確認調査の協力依頼により、本市が文化財担当職員を派遣することとした。

### 調査の方法

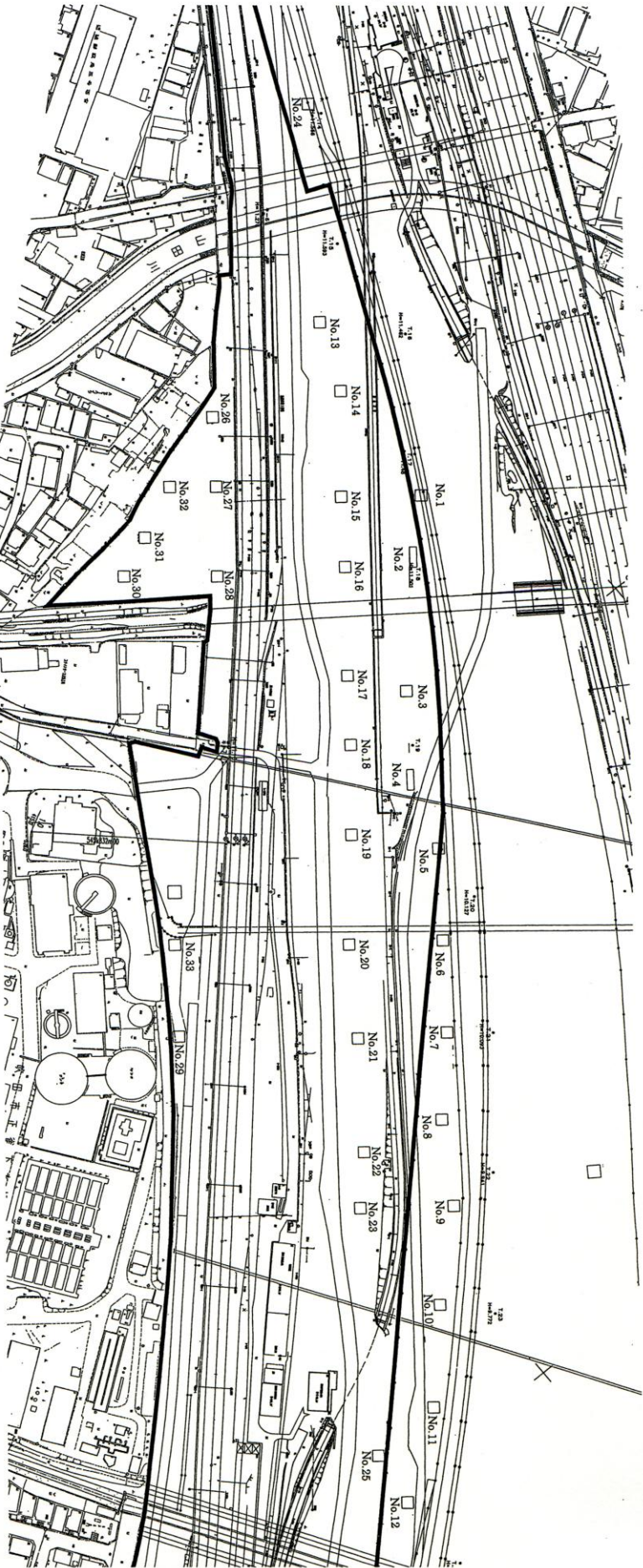
調査の実施については、大阪府教育委員会及び鉄道・運輸機構と協議し、計33箇所の調査区（トレンチ）を設定した。トレンチは原則上端6m×6mで勾配をつけるため下端では4m×4m程度になる。しかし現地の状況により、面積や掘削深度は各トレンチにより異なる。調査は平成19年12月26日から開始し、平成20年6月25日に完了した。その後、引き続いて遺物の整理作業及び報告書刊行のための作業を行った。

現地での外業調査は、上層の近現代の整地層はバックホーにより機械掘削を行った。下層は人力掘削を行い、中世や古代の遺構面が検出された時は、各面で必要に応じ、精査、記録写真撮影、平面図・断面図作成、遺物の取り上げなどを行った。

内業調査は、出土した遺物の洗浄、遺物への注記、遺物の復元、遺物の実測、図面のトレース、遺物写真撮影、報告書文章作成などを行った。



調査区配置図



# 調査区基準杭座標一覧表

| No. | X           | Y          | H (G L) |
|-----|-------------|------------|---------|
| 1   | —134914.902 | —41538.750 | 11.27   |
| 2   | —134935.035 | —41561.082 | 11.30   |
| 3   | —134979.057 | —41600.330 | 11.25   |
| 4   | —135011.652 | —41626.289 | 11.52   |
| 5   | —135041.345 | —41634.510 | 10.44   |
| 6   | —135073.621 | —41658.988 | 10.32   |
| 7   | —135107.364 | —41684.435 | 10.06   |
| 8   | —135135.472 | —41711.045 | 9.91    |
| 9   | —135135.472 | —41731.983 | 10.00   |
| 10  | —135198.943 | —41765.060 | 10.67   |
| 11  | —135232.037 | —41796.415 | 10.40   |
| 12  | —134750.259 | —41830.449 | 9.95    |
| 13  | —134827.836 | —41523.674 | 11.42   |
| 14  | —134857.070 | —41536.324 | 11.47   |
| 15  | —134893.662 | —41566.073 | 11.45   |
| 16  | —134918.942 | —41584.902 | 11.42   |
| 17  | —134957.723 | —41615.699 | 11.35   |
| 18  | —134983.431 | —41635.327 | 11.53   |
| 19  | —135013.170 | —41659.806 | 11.45   |
| 20  | —135050.227 | —41692.110 | 11.40   |
| 21  | —135085.289 | —41716.124 | 11.54   |
| 22  | —135125.852 | —41746.596 | 11.54   |
| 23  | —135143.999 | —41763.926 | 11.83   |
| 24  | —134750.259 | —41466.052 | 11.61   |
| 25  | —134830.162 | —41587.225 | 10.03   |
| 26  | —134831.342 | —41586.804 | 10.55   |
| 27  | —134854.351 | —41605.562 | 10.54   |
| 28  | —134885.902 | —41630.549 | 10.63   |
| 29  | —135029.255 | —41767.373 | 10.80   |
| 30  | —134880.982 | —41661.703 | 10.29   |
| 31  | —134852.259 | —41661.703 | 10.71   |
| 32  | —134842.811 | —41621.552 | 10.77   |
| 33  | —135007.256 | —41750.597 | 11.09   |

## 第4章 遺構と遺物

### トレンチ1

---

上端で6.7m×6.7mを測り面積は44.89㎡。下端で2.8m×2.8mを測り面積は7.84㎡。現状地盤TP+11.27m。

### 基本層序

---

整地層TP+11.27mから9.13mで厚さ214cm。旧耕作土TP+9.1mから9.02mで厚さ8cm。オリーブ灰色砂質土(10Y5/2)TP+9.02mから8.68mで厚さ34cm。灰黄褐色砂質土TP+8.68mから8.62mで厚さ6cm。にぶい赤褐色砂質土(2.5YR3/6)TP+8.62mから8.48mで厚さ14cm。暗赤灰色砂質土(10R4/1)TP+8.48mから7.92mで厚さ56cm。

### 検出された遺構

---

1次遺構面としてオリーブ灰色砂質土上面で精査を行ったが中世の耕作土層のみで遺構は確認されなかった。下層には明褐色砂質土が酸化した床土を呈する状態で8cm堆積していた。

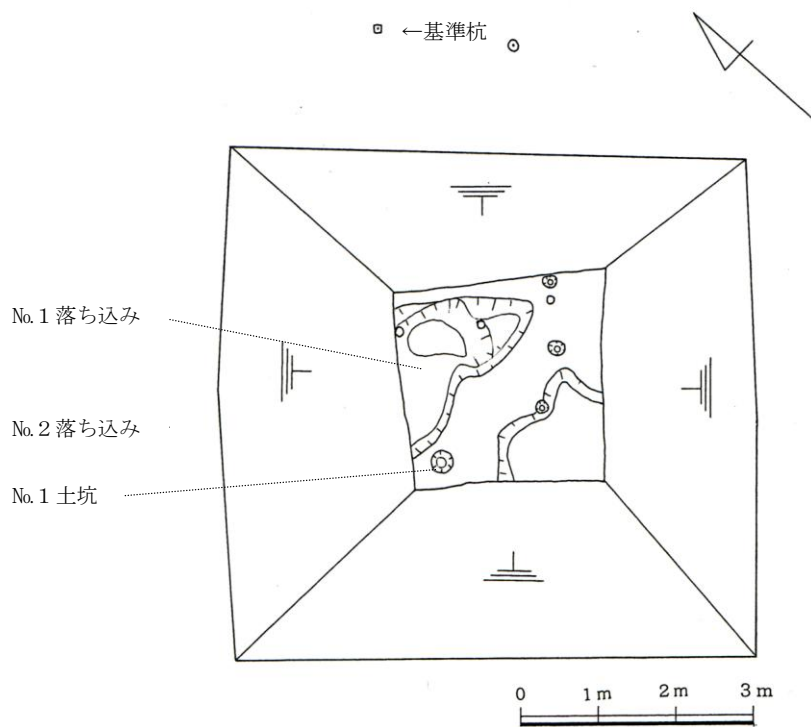
2次遺構面としてにぶい赤褐色砂質土上面で精査を行った。この堆積は礫、小礫、粗砂を含み極めてゆるい堆積だったが精査の結果、落ち込み2と土坑1と3つの杭列が想定される土坑が検出された。No.1落ち込みの南側東西のラインの肩は明確でほぼ正方位を呈し東肩はゆるやかに傾斜し終わっている。また一部角度が急になり最下部でテラス状に平坦になっている。No.2落ち込みはNo.1落ち込みと比べ南側に向けての傾斜が均一でかつ角度も急である。人為的に掘り込んでいる様相が強い。

No.1土坑はトレンチ西端に位置し最大径36cmを測りほぼ中心に直径5cm程度の木芯が残存していた。掘肩はしっかりしておりほぼ直角に掘削している。この土坑はNo.1・2落ち込みが形成する東西平坦面のほぼ中央に位置するが、限られたトレンチの範囲では同種の土坑は検出されなかったのが建物跡の柱穴とは限定できない状況だった。

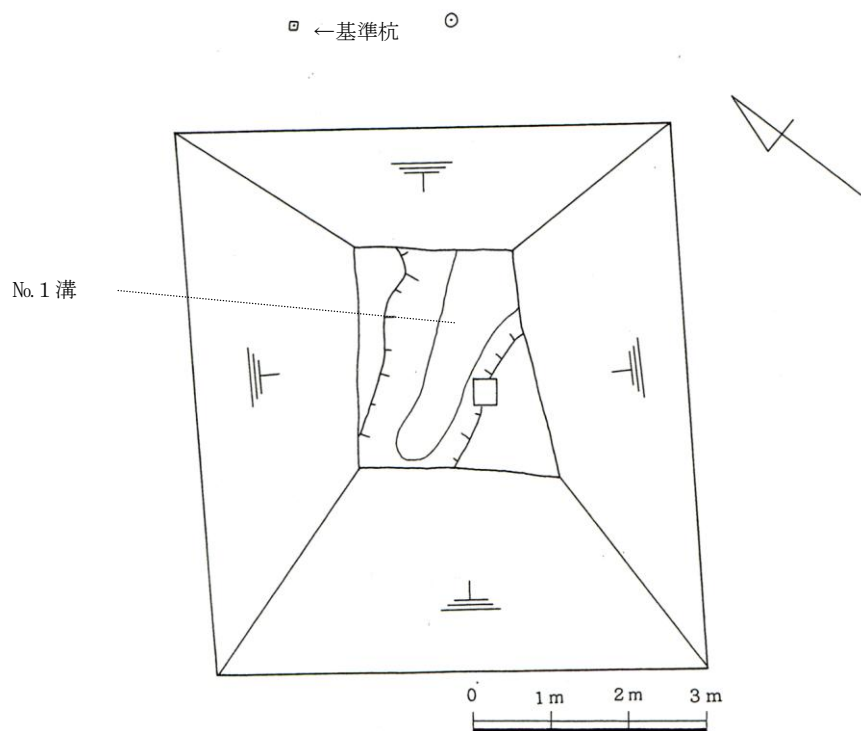
No.1杭列はほぼ直線に直径15cm程度のものが3つ並ぶ。しかしこの杭列は断面の観察からも上層からの打ち込みで、このトレンチではコンクリート杭も打設されており近現代のものと思われる。

3次遺構面は暗赤灰色砂質土上面で精査を行った。この堆積も上層と同様に礫、小礫、粗砂を含みゆるい。しかし上層よりは比較的堅緻である。ここでは溝1が検出された。No.1溝はN78°Eの角度である。掘肩は南肩はほぼ直で人為的な掘削が想定される。それに対し北肩はなだらかで人為的な掘削は明瞭でない。最もしっかりした南方の上場でTP+8.23mから7.83mで深さは40cmを測る。埋土は灰黄白色砂である。

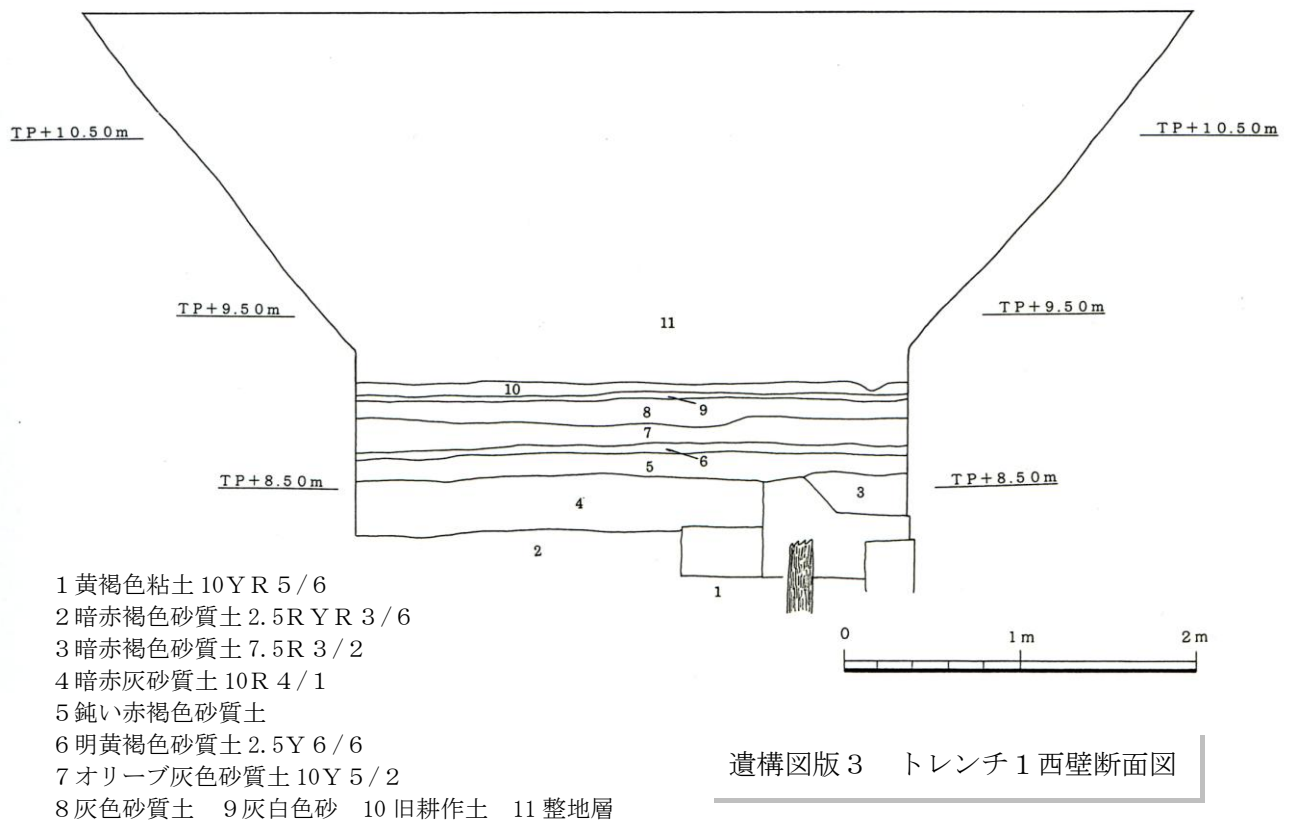




遺構図版 1    2次遺構面平面図

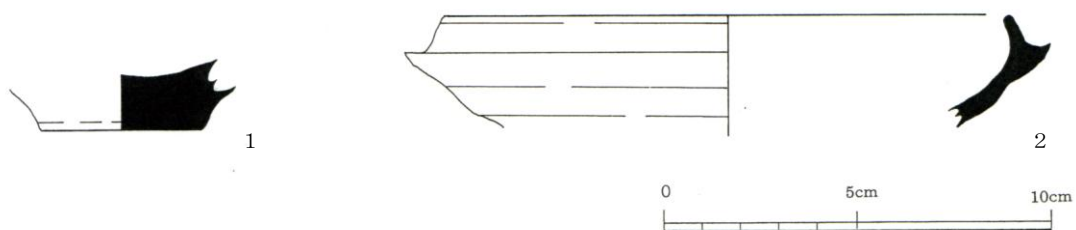


遺構図版 2    3次遺構面平面図



## 検出された遺物

2次遺構面の精査時のにぶい赤褐色砂質土より土師器破片、須恵器破片が出土した。土師器は胴部破片が多く図化できるものはなかった。図化できる遺物として、底部の破片1点が出土した。図1は残高1.4cm、底部径4.2cm、色調は黄灰色。残存状況は悪いが弥生時代の平底の土器の底部と思われる。須恵器は3点出土した。甕体部は外面のタタキ及び内面の当て具の痕跡を残す。図2は坏身である。最大径15.8cm、口径13.8cm、焼成は不良で色調は灰白色を呈する。小型化し受け部の立ち上がりも弱く、中村編年Ⅱ型式5段階相当であろうか。



遺物図版1 トレンチ1出土遺物

## トレンチ 2

---

上端で 9.4m×5.6m を測り面積は 52.64 m<sup>2</sup>。下端で 6.3m×1.6m を測り面積は 10.08 m<sup>2</sup>。現状地盤 T P +11.30m。遺構面上端 T P +9.04m。

### 基本層序

---

整地層 T P +11.30m から 9.10m で厚さ 220 cm。旧耕作土 T P +9.50m から 9.10m で厚さ 40 cm。オリーブ灰色砂質土 (10Y 5/2) T P +9.1m から 8.8m で厚さ 30 cm。暗赤灰色砂質土 (10Y 4/1) T P +8.8m から 8.4m で厚さ 40 cm。暗赤褐色砂質土 (10R 3/2) T P +8.6m から 8.2m で厚さ 40 cm。黒褐色粘質土 T P +8.2m から確認できた 8.04m で厚さ 16 cm。

### 検出された遺構

---

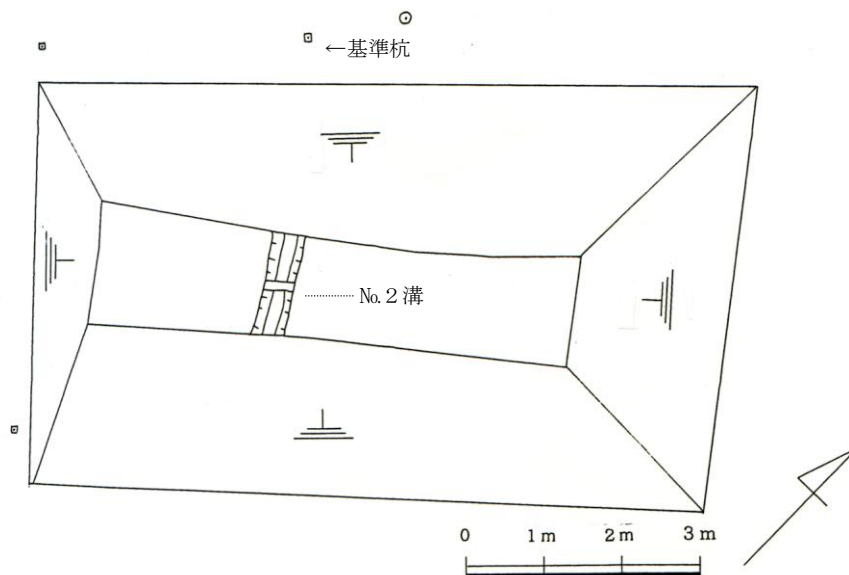
1 次遺構面としてオリーブ灰色砂質土上面で精査を行った結果、溝 1 が検出された。この No. 2 溝は、幅 50 cm で均一に直線的に掘られている。角度は N56° E で傾いている。当該地の条里制地割とほぼ符号するものである。掘肩の下場も均一でかつ直線を強く意識している。南壁の深いところで、上場で T P +8.94m 下場で T P +8.79m で深さ 15 cm である。埋土は青灰色砂質土である。

2 次遺構面として、暗赤灰色砂質土上面で精査を行った。この面からは溝 1、土坑 4 が検出された。No. 3 溝は、西肩の残存は良好で、N 5° E でほぼ南北方位である。東肩は東西に突出する部分があるが、北端のラインではこれもほぼ南北方位である。突出部が人工的なものか明瞭ではないが、南北を意識していた可能性を残す。湧水が激しく当該遺構の上場下数 cm まで水が溜まる状況である。この溝の堀肩は東壁で確認できた。埋土は下層から明褐色砂 (7.5YR 7/1) 灰白色砂質土 (7.5YR 8/1) 褐灰色砂礫 (7.5YR 5/1) 灰色砂礫 (7.5YR 8/1) であった。上場で T P 8.8m、中段が平坦面を有し T P 8.6m、下場は V 次状に深くなり確認できた範囲で T P 8.2m を測る。確認できた範囲で 60 cm の深さを測る。湧水が激しく下層が砂や礫層のため最深部まで掘削することは困難であった。しかし V 次状の堀肩の延長を想定するとまだ 60 cm 程度下がる可能性があり推定 120 cm になるならば、比較的深く掘り込んでいる状況が復元できる可能性がある。

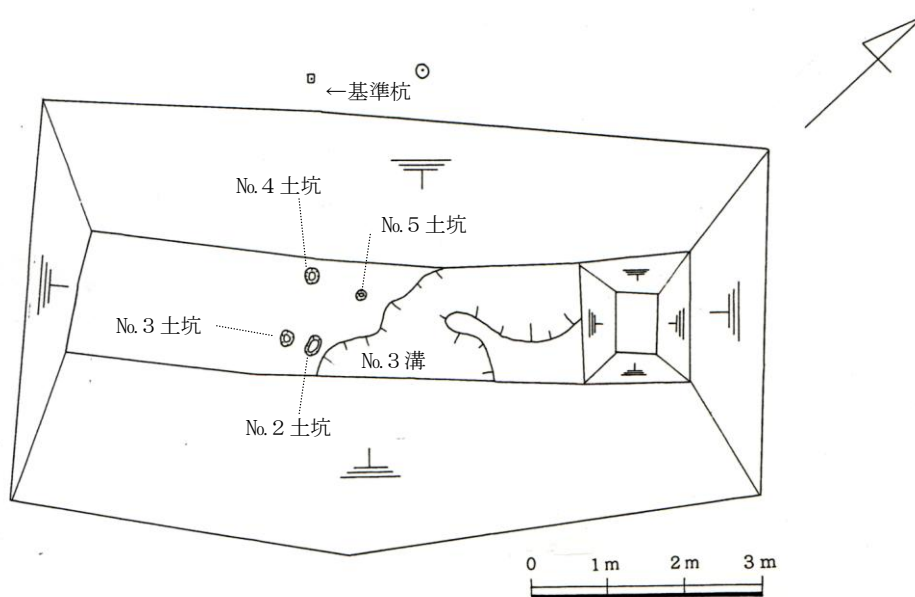
No. 2 ～ 5 土坑は 20 cm から 30 cm 程度の小型のものである。埋土はいずれも溝内の埋土と類似する灰白色砂質土である。配列を検討すると No. 3 ～ 5 土坑の 3 つは比較的規則的に並ぶ。土坑の中心で東西に測ると南北軸で N25° W の角度になる。

3 次遺構面として、黒褐色粘質土上面で精査を行った。結果、土坑 4 が検出された。いずれの埋土も黒灰褐色粘質土である。No. 6 土坑は西肩は上層遺構に切られているが南北には残りが良く直径 60 cm。No. 7 土坑は直径 48 cm。No. 8 土坑は北壁に切られているが東西では 75 cm を測る。No. 9 土坑は一部サブトレンチに切られた形となったが、残存の南北で 75 cm 測る。No. 8 土坑と No. 9 土坑は埋土も同一で、No. 8 土坑の上場で T P +8.16m、下場で 8.134m で深さ 3 cm 程度、No. 9 土坑の上場で T P +8.14

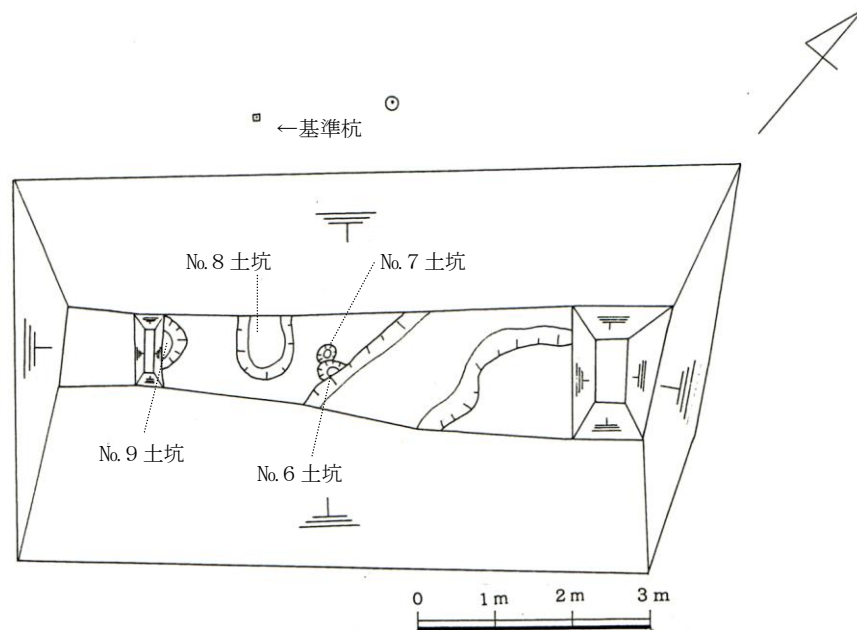
m、下場で8.11mで深さ3cm程度で同一規格である可能性はある。ただしこの面から検出された状況では、堀肩は浅く柱穴として確認できる材料は少ないものと思われる。



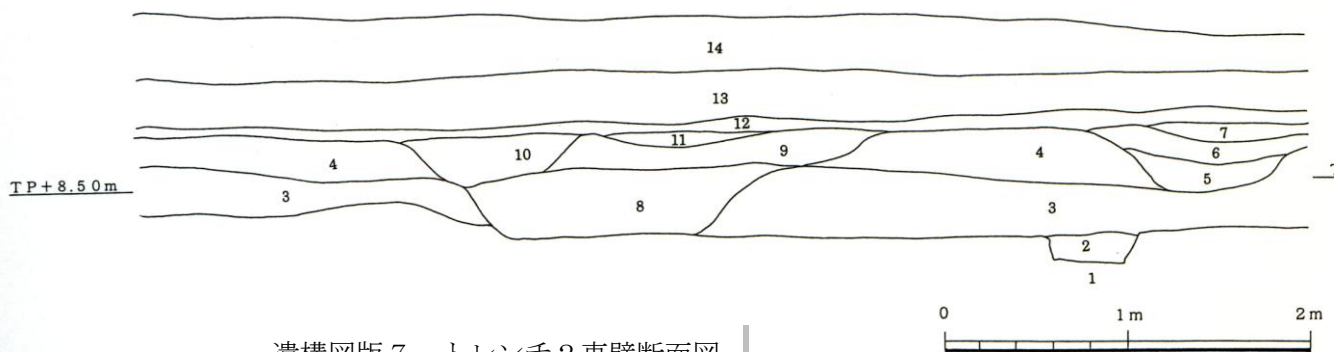
遺構図版 4 1次遺構面平面図



遺構図版 5 2次遺構面平面図



遺構図版6 3次遺構面平面図



遺構図版7 トレンチ2東壁断面図

- |                      |                    |                     |
|----------------------|--------------------|---------------------|
| 1 黄褐色粘土 10YR 5/6     | 2 黒褐色砂質土 10YR 3/2  | 3 暗赤褐色砂質土 10R 3/2   |
| 4 暗赤灰色砂質土 10R 4/1    | 5 灰褐色砂質土 7.5YR 5/2 | 6 褐色砂質土 7.5YR 5/1   |
| 7 明褐色砂質土 7.5YR 7/2   | 8 明褐色砂 7.5YR 7/1   | 9 灰白色砂質土 7.5YR 8/1  |
| 10 褐色砂礫 7.5YR 5/1    | 11 灰白色砂礫 7.5YR 8/1 | 12 明褐色砂質土 7.5YR 5/6 |
| 13 オリーブ灰色砂質土 10Y 5/2 | 14 旧耕作土            |                     |

## 検出された遺物

1次遺構面としたオリーブ灰色砂質土より土師器、須恵器の破片の出土はあったが図化できる遺物はなかった。

2次遺構面で検出されたNo.3溝より、須恵器坏身の完形品が出土した。溝の埋土は明褐色砂である。図3須恵器は最大径15.8cm、口径13.2cm、器高5cmを測る。焼成は不良で灰白色を呈する。胎土には小礫や粗砂を含みやや粗いものである。外面はへら削りが明瞭に残り底部は未調整となっ

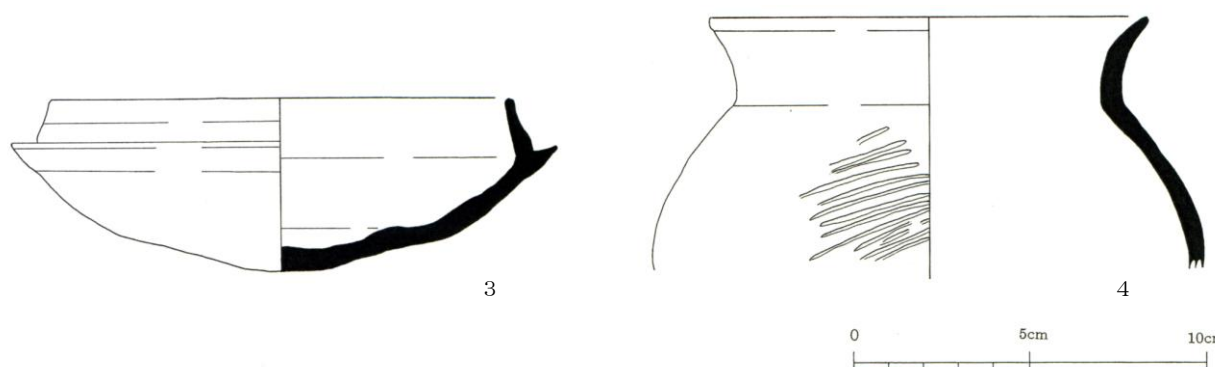


ている。口縁部の立ち上がりは丁寧なナデを施しているが、受部のナデは雑である。受部は短く、口縁部の立ち上がりは内傾する。内面は指オサエの跡が明瞭に残る。焼成時の焼きぶくれも見られる。中村編年型式Ⅱ型式4～5段階で6世紀後半期のものである。

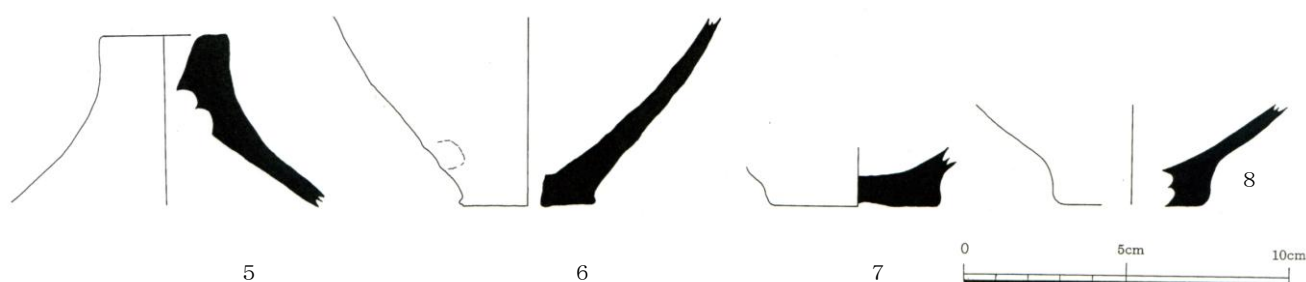
2次遺構面として設定した暗赤灰色砂質土を精査した後、人力掘削を行った際、比較的多数の土器片が検出された。検出状況としては暗赤褐色砂質土に包含されていた。図4は弥生土器甕である。現存する部分で最大径15.65cm、口径12.6cm、残高7.25cmを測る。色調は黄橙色で表面の摩耗は激しい。胎土に小礫を多く含む。体部に斜上するタタキ目が残る。内面にはナデ消したような調整しか見られない。口縁部に若干の面を持たすが、比較的スムーズに外傾している。破片で全容はつかめないが弥生土器森田編年Ⅵ様式が想定される。図5は口径4cm、器高残5.1cm。上端は摩耗を受けているが平坦面を持つ内面に剥離があるが、推定される範囲で1.8cmのくぼみになる。下端は破損し復元はできない。高坏の脚部の可能性は残るが、上端の平坦面を考慮し脚台として報告する。色調は黄橙色で頸部にヨコナデを施す。図6は有孔の鉢である。底部は4.2cm、残存高は6cmを測る。内外面とも磨滅が激しいが、一部に斜行タタキを残す。底部は指オサエ後未調整。図7は底部の破片である。底部径4cm、残存高は1.8cm、底の厚さは9mm。外面底に指オサエのような窪みがある。外面は黄橙色、内面は褐灰色を呈する。

3次遺構面の黒褐色砂質土より、弥生土器の破片が20点出土した。そのうち1点が図化できた。図8は弥生土器の底部である。推定底部径4.6cm、残存高3.1cmを測る。外面の色調は黄橙色であるが、一部に黒斑が見られる。内面は黄灰色である。底部面はナデを施し比較的丁寧に仕上げている。

暗赤褐色砂質土と黒褐色砂質土では、層序上では時期差があるが、この時期差を遺物で求める事は難しい状況である。但し上層の暗赤褐色砂質土には内面に当て具の痕跡を残す須恵器甕の破片や坏の破片を包含するが、黒褐色砂質土には須恵器が見られない。現段階では須恵器の包含状況が時期差を示している可能性がある。



遺物図版2 トレンチ2出土遺物



遺物図版3 トレンチ2出土遺物

### トレンチ3

上端で7.0m×4.8mを測り面積は33.6 m<sup>2</sup>。下端で4.5m×4.0mを測り面積は18 m<sup>2</sup>。現状地盤T P +11.25m。

このトレンチでは、表面の整地層を重機により掘削している段階で、大規模なコンクリート構造物が検出された。通常他のトレンチでは、コンクリート塊などは撤去して下層の調査を進めてきたが、このトレンチのコンクリート構造物は、重機では撤去できない規模である事、また当該地が操車場ということを勘案すれば、確証はないものの操業当時の転車台の可能性が高く、無理に破壊する事なく近現代の遺産として調査し、このトレンチの調査は終了した。今回の報告では、外寸や検出高のみである。今回検出されたコンクリート構造物は転車台の最下基礎部分と思われるが、構造等の詳細については、今後この転車台周辺の調査の際、全面的に確認された時に委ねたい。

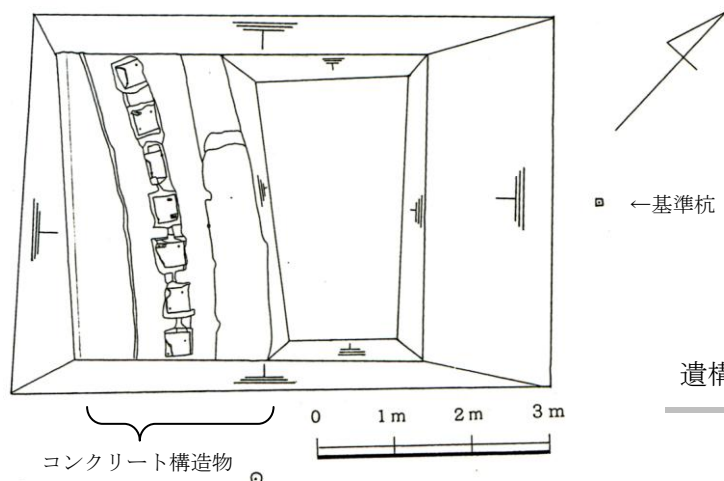
4段構成になっており一番高い上段で、北側でT P +10.59m、中央部でT P +10.705m、南側でT P +10.682mでほぼ平坦な状況である。幅は北側で削られ100 cmになっているが、残存のいいところでは114 cmである。垂直に中段まで、45 cmの段差がついている。上段の平坦面には構造物があったような痕跡はない。

中段の平坦面には確認された範囲で7つの構造物の痕跡が残っている。中段の平坦面でもほぼすべての測点でT P +10.245m ± 1 cm程度で見事なほどに平坦に建造されていることが分かる。中段構造物の西側はT P +10.235mで平坦で、中段のテラスの範囲でも1 cm単位で傾斜をつけている可能性が高い。中段の構造物の痕跡は、各々で壁があったような剥離跡が異なる。7つの内6つは短辺30 cm長辺40 cmで同一の規格が想定される。内1つは短辺20 cm長辺50 cmで明白に他のものとサイズが異なる。今回の調査区の範囲内では確認できないが、何個かおきの決まったパターンがあったのではないと思われる。また内4つには、同間隔、同角度で鉄筋が残存している。また内2つには鉄筋が1つのものがあり、鉄筋の数の違いにも規則性があったのかも知れない。高さは上部構造が分からなく剥離した跡が多いが中心部分は損傷が少なく当時のままであろうと思われる。いずれも

T P +10.24mから 10.25mの間である。下段までに 4 cm程度の段が垂直についている。

下段は北から南にかけて傾斜がついている。確認された 48 cm程度の範囲で北側でT P 10.199mから 10.142mで 5.7 cmの勾配がある。

今回のトレンチで確認できた範囲から推定すると最大径 15.5mの構造物となる。



遺構図版 8 転車台検出状況

## トレンチ 4

上端で 6.5m×3.1mを測り面積は 20.15 m<sup>2</sup>。下端で 2.8m×1.5mで面積は 4.2 m<sup>2</sup>。現状地盤T P +11.52m。線路と職員通路の間に位置し細長い形にしか掘削ができなかった。1次遺構面は精査可能だったが、それより下層については、湧水、壁面の崩落が激しく、一部サブトレンチを入れて重機により下層の確認を行い、調査を終了した。

## 基本層序

整地層T P 11.52mから 8.51mで厚さ 301 cm。オリーブ灰色砂質土（10Y 5/2）T P +8.51mから 8.34mで厚さ 17 cm。明赤褐粘質土T P +8.34mから 7.98mで厚さ 36 cm。褐灰色砂質土T P +7.98mから 7.85mで厚さ 13 cm。黄褐色粘質土T P +7.98mから 7.71mで厚さ 27 cm。黒褐色粘質土T P +7.71mから 7.54mで厚さ 17 cm。最下層は灰白色砂T P +7.54mから確認できた 7.45mで厚さ 9 cm。最終掘削深度 4 m70 cm。

## 検出された遺物

1次遺構面の灰オリーブ砂質土より、須恵器の破片が 1点出土したが、図化できるものではなかった。排土中より土師器破片、須恵器破片を採集した。

## トレンチ5

---

上端で 6.7m×6.3mを測り面積は 42.21 m<sup>2</sup>。下端で 5.5m×4.9mを測り面積は 26.95 m<sup>2</sup>。現状地盤 T P +10.44m。

### 基本層序

---

整地層 T P +10.44mから 9.55mで厚さ 89 cm。旧耕作土 T P +9.55mから 9.30mで厚さ 25 cm。オリーブ灰色砂質土（5 Y 5 / 2） T P +9.3mから 8.65mで厚さ 65 cm。灰黄色砂質土（2.5 Y 7 / 3） T P +8.65mから 8.4mで厚さ 25 cm。明褐色砂質土（7.5 Y R 5 / 6） T P +8.4mから 8.27mで厚さ 13 cm。褐灰色粘質土（7.5 Y R 4 / 1） T P +8.27mから T P +7.96 で厚さ 31 cm。黒褐色粘質土 T P +7.96mから。

### 検出された遺構

---

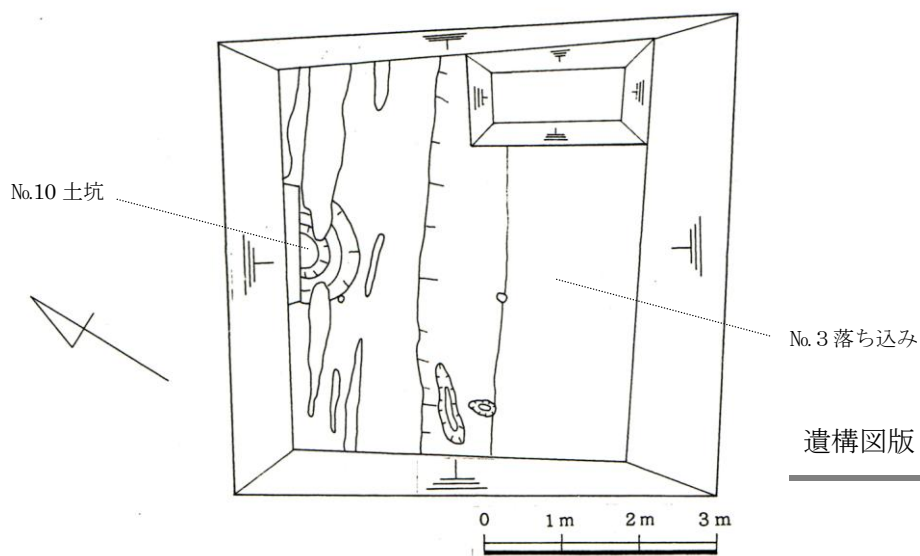
1 次遺構面として、オリーブ灰色砂質土上面で精査を行った。検出された遺構は、落ち込み 1、野井戸が想定される土坑 1、耕作に伴う鋤溝 7 である。

このトレンチで検出されたNo.3 落ち込みは北及び東西壁にはさまれ北から南に傾斜している。上層の旧耕作土も同様に傾斜しており、水平ではなく上層に合わせて掘削し、1 次遺構面に隆起及び平坦面の検出にいたった。平坦面は東側が広く 2m10 cm、西側は 1 m70 cmを測る。上場のラインは明確に残り N60° E の角度を有する。東側の上場で T P +9.19mで下場が 8.57mを測り、1 m20 cm の間で 62 cm下がっている。この平坦面の構造を確認するため、南北方向に 2 つのサブトレンチを入れた。基本層序は基本はオリーブ灰色の砂質であるが、部分により土層の色相が異なり、また小礫や粗砂を含む堆積があり分層が可能であった。下層からレンズ状に土盛りされていった経過を確認した。この隆起した平坦面は、限られたトレンチの範囲内では確定はできないが、オリーブ灰色砂質土が既往の調査より、中世の耕作土層（畠跡）であることを勘案すれば、区画を有する大きな畦の跡である可能性を残す。

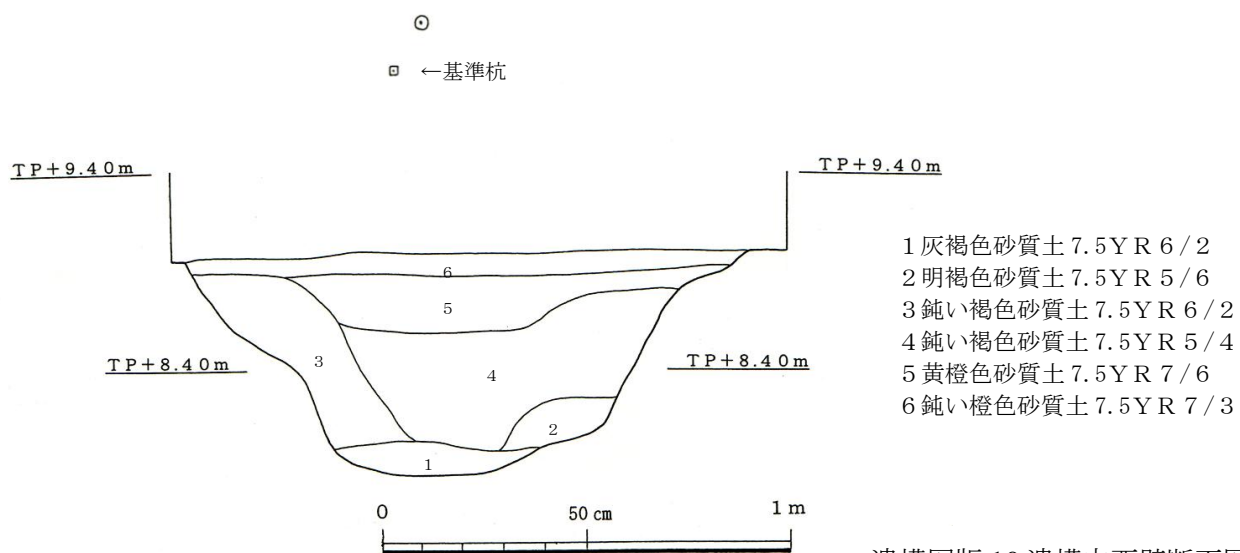
隆起した平坦面中央で北壁に食い込む形でNo.10 土坑を検出した。直径 1 m20 cmである。上場は T P +9.2mで下場は 8.76mで最深部分 44 cmの深さがある。完堀を行った上で、断面を観察すれば、黄橙色砂質土や褐色系砂質土が互層に入り比較的短期間に埋め戻した状況を確認した。ただし最下層のみ灰褐色砂質土でマンガンや礫を含み上層と異なる点は留意する必要がある。このような遺構は耕作に伴う野井戸の様相を呈するものかも知れない。

鋤溝群の埋土は上層の旧耕作土と同様で近世段階のものであろうと思われる。

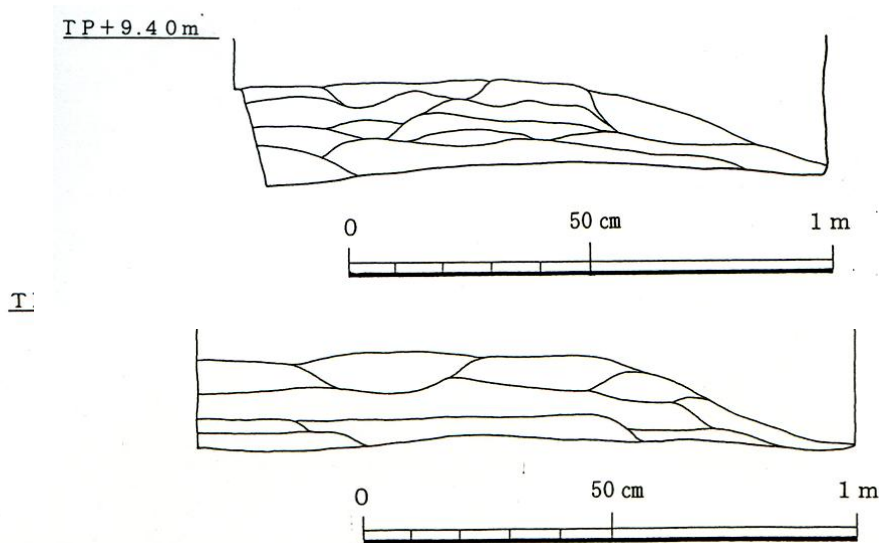
2 次遺構面として、灰黄色砂質土上面で精査を行った。この面では土坑 2、杭 15 を検出した。杭列は、T P 8.6mからの検出で 13 本が N67° E の角度をもって並ぶ。2 本はこのラインにほぼ直角で北西に向けて並ぶ。これらの杭列は大きなもので 25 cm程度で小さなものは 15 cm程度である。



遺構図版 9 1次遺構面平面図

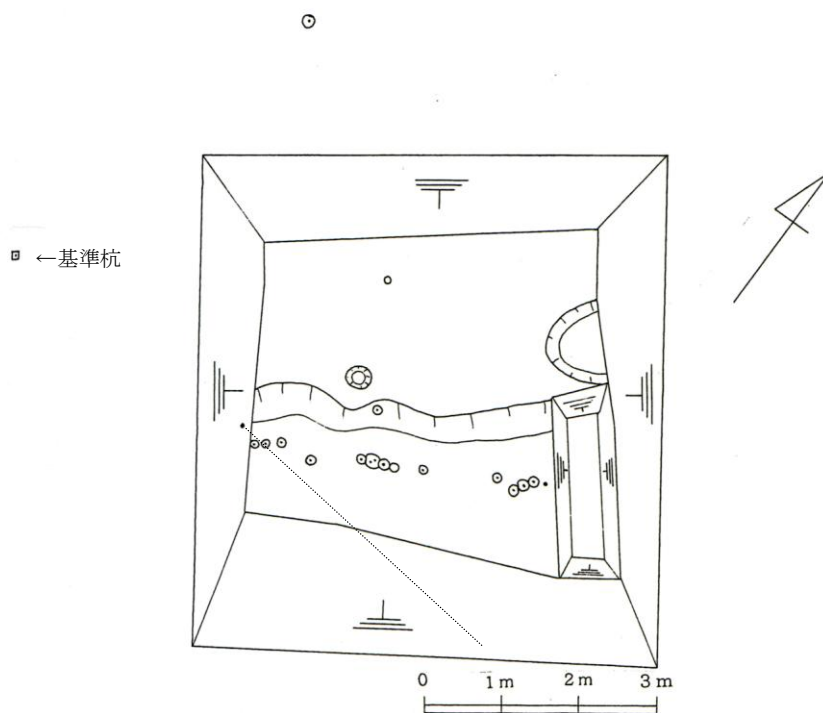


遺構図版 10 遺構内西壁断面図

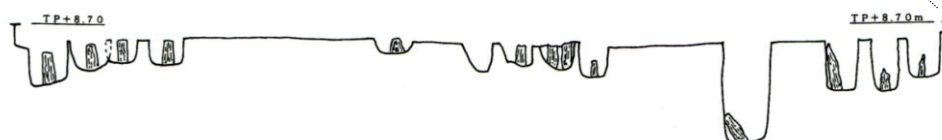


遺構図版 11  
遺構内北壁断面図





遺構図版 12 2次遺構面平面図



遺構図版 13 杭列横断面図

度である。埋土は同一で灰白色粘質土である。これらの杭には木芯が残るものが12あり、検出時に露頭してたものや、杭内掘削中に露出するもの、斜めになっているものまで検出状況には違いがある。特筆すべき東西南北が交差する点にある杭には2本の杭が用いられていた点である。杭の用途までは特定できないが、交点となる所には何らかの加工が施されていたのであろう。

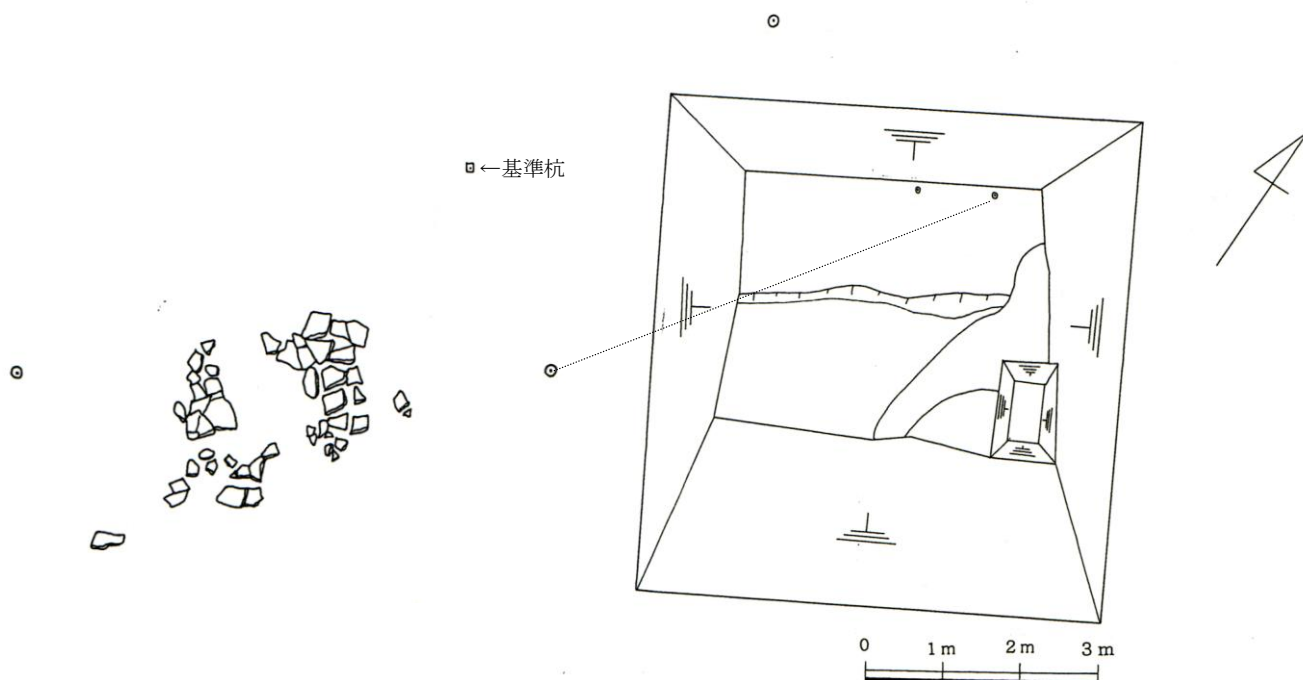
3次遺構面として明褐色砂質土上面で精査を行ったが、遺構・遺物は確認されなかった。

4次遺構面として褐灰色砂質土上面で精査を行った。この面では、礫、小礫、粗砂が入る比較的ゆるい堆積が平面でも互層に入る状況を確認できた。褐灰色をベースに一部灰色砂層が入ったり暗赤褐色砂質土が若干高まりで隆起する状況を呈した。何らかの河川の氾濫の影響を受けたであろう状況である。若干の高まりの上から土器溜1が検出された。いずれも土師質の土器の碎片で総数

44 点。北壁際からの検出で 60 cm から 45 cm 四方の範囲に集中している。検出されたのは T P+8.42 のレベルである。土器溜に伴う掘肩は見られず自然に流されてきたものと思われる。

5 次遺構面として、黒褐色粘質土上面で精査を行った。遺構として溝 1、土坑 7 を検出した。No.4 溝は N45° E の角度で流れる。埋土は灰黄白砂礫でベースとなる黒褐色粘質土とは色調及び土質において明瞭に遺構検出が可能であった。この溝はトレンチ内で、北東部ほど幅が広く南西に向けて狭くなる傾向がある。北東部では 45 cm 南東部で 25 cm を測る。高さは北東部で上場 T P+7.95m、下場 7.79m で深さは 16 cm を測る。対する南西部では上場で T P+7.89m、下場で 7 は.78m で深さは 11 cm となる。これらの事から上場では北東の方が高く下場がほぼ同じであり深さも北東から南西へ浅くなっている状況から北東から南西へ流れていたものと思われる。ただし溝として認識するには、上肩が削平され今回検出された溝はその残存部分であるという前提が必要であろう。ただしこの遺構が溝として機能していたのであれば、その角度は重要になってくるであろう。中世段階では、33 度という条里制に規制された地区割であることは、前述のとおりである。今回検出した弥生時代の溝は、N45° E の角度を有し南北軸ではないが、中世以前の開発の基軸を考える上で、重要な資料となるであろう。

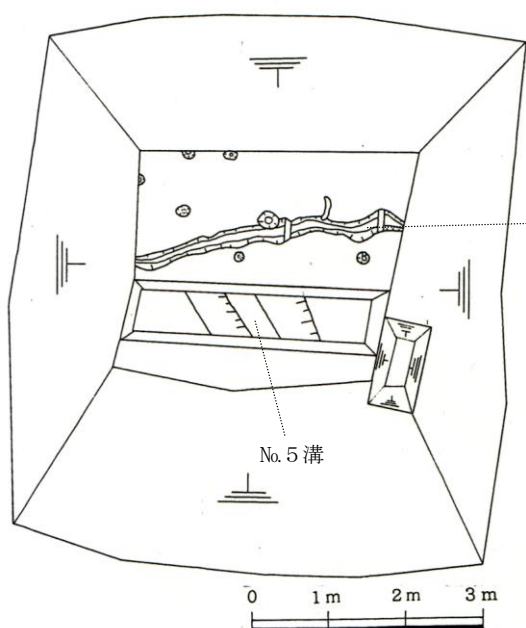
土坑の埋土は褐灰色砂質土で、最大で直径 25 cm、最小のものでは、直径 15 cm 程度であり、今回検出された範囲では建物跡のような規則制をもった配置は想定できない状況であった。1 つが溝を切っている形で検出されたことから No.4 溝とは時期差があるものと思われる。



遺構図版 15 No. 1 土器溜検出状況図

遺構図版 14 4 次遺構面平面図

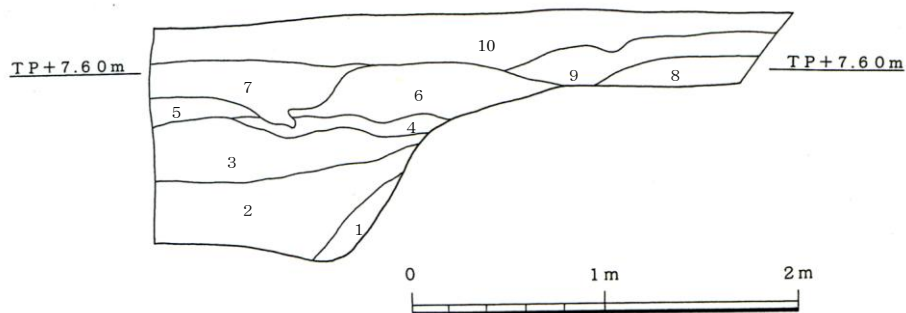
←基準杭



No. 4 溝

No. 5 溝

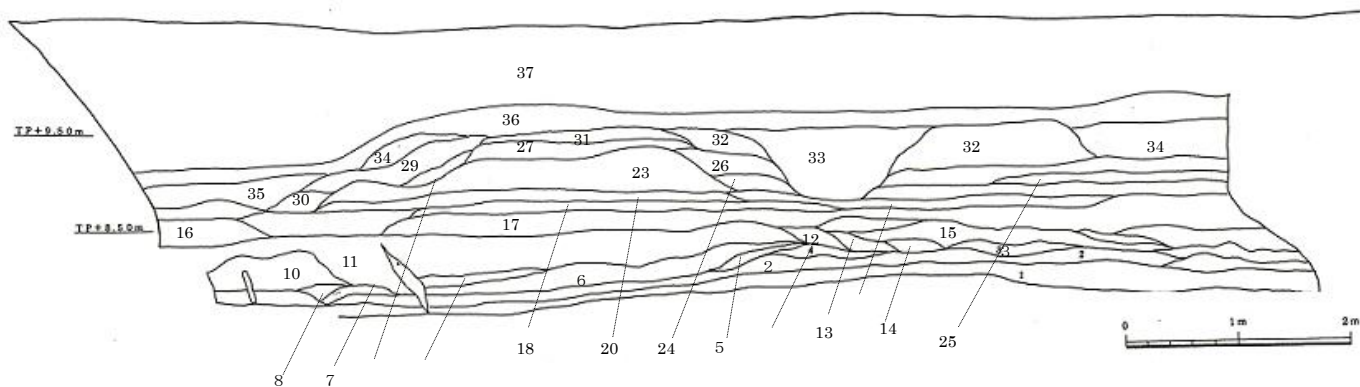
遺構図版 16 5・6次遺構面平面図



- 1 暗青灰色砂 5 BG 4/1
- 2 暗緑灰色砂 10G 4/1
- 3 緑灰色砂 5 G 5/1
- 4 暗青灰色砂 5 BG 4/1
- 5 暗緑灰色砂 10G 4/1
- 6 明緑灰色砂質土 10GY 7/1
- 7 明オリーブ灰色砂質土 2.5GY 7/1
- 8 オリーブ灰色砂質土 10Y 6/2
- 9 明青灰色砂質土 10BG 7/1
- 10 暗青灰色砂質土 5 BG 4/1

遺構図版 17

No. 5 溝内西壁断面図



遺構図版 18 5 トレンチ南・西断面図

|                       |                       |                       |
|-----------------------|-----------------------|-----------------------|
| 1 黒褐色粘質土 7.5YR 3/2    | 2 褐灰色粘質土 7.5YR 4/1    | 3 明褐色粘質土 7.5YR 5/6    |
| 4 灰褐色粘質土 7.5YR 5/2    | 5 にぶい褐色粘質土 7.5YR 5/3  | 6 褐灰色粘質土 7.5YR 6/2    |
| 7 にぶい褐色粘質土 7.5YR 5/4  | 8 明褐色粘質土 7.5YR 6/3    | 9 にぶい褐色粘質土 7.5YR 6/3  |
| 10 褐灰色砂質土 7.5YR 6/2   | 11 明褐色砂質土 7.5YR 5/6   | 12 褐灰色砂質土 7.5YR 5/1   |
| 13 明褐色砂質土 7.5YR 7/1   | 14 灰褐色砂質土 7.5YR 4/1   | 15 暗褐色砂質土 7.5YR 4/3   |
| 16 灰オリーブ色砂質土 7.5Y 6/2 | 17 明黄褐色砂質土 2.5Y 7/3   | 18 灰黄色砂質土 2.5Y 7/3    |
| 19 鈍い黄色砂質土 2.5Y 6/3   | 20 黄褐色砂質土 2.5Y 5/4    | 21 オリーブ黄色砂質土 7.5Y 6/3 |
| 22 灰オリーブ砂質土 7.5Y 5/2  | 23 オリーブ黄色砂質土 5Y 6/4   | 24 オリーブ黄色砂質土 5Y 6/3   |
| 25 オリーブ灰色砂質土 10Y 5/2  | 26 オリーブ黄色砂質土 7.5Y 6/3 | 27 オリーブ灰色砂質土 10Y 4/2  |
| 28 オリーブ黄色砂質土 7.5Y 6/4 | 29 オリーブ色砂質土 5Y 6/6    | 30 オリーブ灰色砂質土 7.5Y 6/2 |
| 31 オリーブ色砂質土 7.5Y 5/6  | 32 灰オリーブ粘質土 5Y 5/2    | 33 井戸断面               |
| 34 オリーブ黄色砂質土 5Y 6/3   | 35 灰オリーブ砂質土 5Y 6/2    | 36 灰オリーブ砂質土 5Y 6/2    |
| 37 旧耕作土               |                       |                       |

6 次遺構面は、5 次遺構面のNo.4 溝や土坑は、弥生時代後期の遺構として、そのまま保存する必要があるものと判断し下層は下げずに、遺構が検出されなかった南側を掘削し溝 1 を検出した。No. 5 溝は上層の黒褐色粘質土の下層の灰黄色砂層を掘削すると地山（2 次的堆積物）相当の黄褐色粘土を切り込む形で検出された。上肩は西から東に 80 cm ほど残存し角度 N64° W を測る。検出された高さは T P +7.5m からで、95 cm の平坦面を持ち、T P +7.3m まで 70 cm ゆるやかに傾斜している。下場は T P +7.5m までは確認できたが湧水が激しく最下層は砂層のため掘削ができず不明である。この溝は北側の肩は明瞭に確認できたが南肩は調査区の範囲内では確認できなかった。しかし東西にしっかりした平坦面をもち、V 字状にしっかりした傾斜を持っている。全面的に検出されればかなり大規模な溝であることが想定される。なお上層の溝とは直角ではないが 85 度程度で交わるラインが想定される。

## 検出された遺物

トレンチ 5 からは、比較的多くの土器片が出土した。コンテナ 1 箱程度だが、調査面積を考慮すると出土量は多いと言える。弥生土器、土師器、須恵器が出土したが、いずれも磨滅が激しく、接合や復元できる遺物はなかった。ここでは、図化できた小型鉢、底部破片 9 について報告する。いずれも 5 次遺構面として設定した黒褐色粘質土からの検出である。図 9 は弥生土器の底部である。底部径 4.6 cm、残存最大径 6.2 cm、残存高 2.4 cm、底部の厚さ 1.0 cm を測る。胎土は礫を多く含み粗い。色調は内面が灰黄色で外面は黄橙色を呈する。底部に指オサエによる窪みを残す。図 10 も弥生土器底部である。底部径 4.9 cm、最大径 7.9 cm、残存高 3.2 cm、底部の厚さ 1.6 cm を測る。胎土は小礫を含むが比較的精緻である。色調は淡赤橙色で他の底部片とはベース色が異なる。底部は平坦面を意識して、比較的丁寧に仕上げている。底部の平坦面からの立ち上がり部分に強くナデた痕跡を残している。図 11 も弥生土器底部である。底部径 4.6 cm、最大径 6.4 cm、残存高 2.0 cm、底部厚 1.4 cm を測る。胎土は粗砂を含むが、比較的精緻である。色調は外面に黒班を受けている。内面は灰黄色を呈する。図 12 も弥生土器底部である。底部径 3.6 cm、残存最大径は 5 個体が接合し、比較的残りがよく 7.15 cm、底部厚は 1.1 cm を測る。色調は灰黄色をベースに一部弱い黒班を受けており、暗褐色を呈する。内外面とも調整は確認できない。図 13 は、底部径 4 cm、最大径 7.6 cm、器高

3.9 cm、底部厚は明確に窪み 1.0 cmを測る。胎土は礫、小礫を含み粗い。色調は内面は黄灰色であるが、外面は明赤褐色を呈する。全体に磨滅が激しいが、口縁部は残存しており、内外面ともにナデ仕上げによる手づくねの小型鉢として報告する。

図 14 も弥生土器の底部である。底部径 4.0 cm、残存最大径 5.2 cm、残存高 2.2 cm、底部厚 1.4 cmを測る。胎土は粗砂を含むが精緻である。焼成も良好である。色調は灰黄色ながら極めて白色を呈する。底部の平坦面をしっかりとナデしており接地面が多い。底部から体部への立ち上がり部分も強くナデしておりしっかりした面を持つ。

図 15 も弥生土器の底部である。底部径 3.8 cm、残存径 4.7 cm、残存高 1.8 cm、底部厚 1.4 cmを測る。色調は内外面とも黄灰色を呈する。底部底は平坦面だが、ナデ調整をした跡がなく未調整である。底部から体部への立ち上がりも窪みを持つが、ナデ調整を行った痕跡がない。

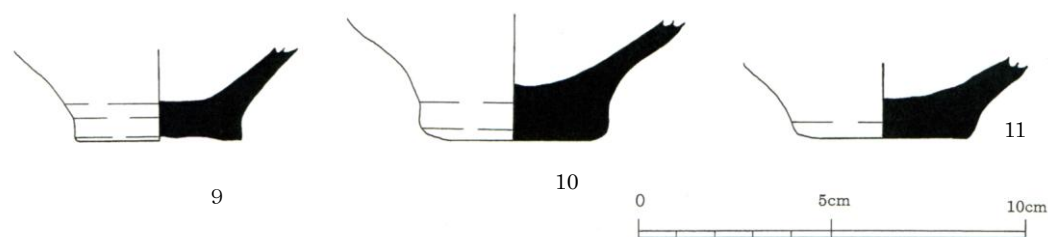
図 16 も弥生土器の底部である。底部径 4.8 cm、残存最大径 5.8 cm、残存高 2 cm、底部厚 0.9 cmを測る。色調は内面が暗褐色で外面は黄灰色を呈する。胎土は礫、小礫を含み粗い。底部は比較的平坦面を意識しており、一部ナデ調整を行っている。厚さが他の底部と比較すると薄く仕上げている。

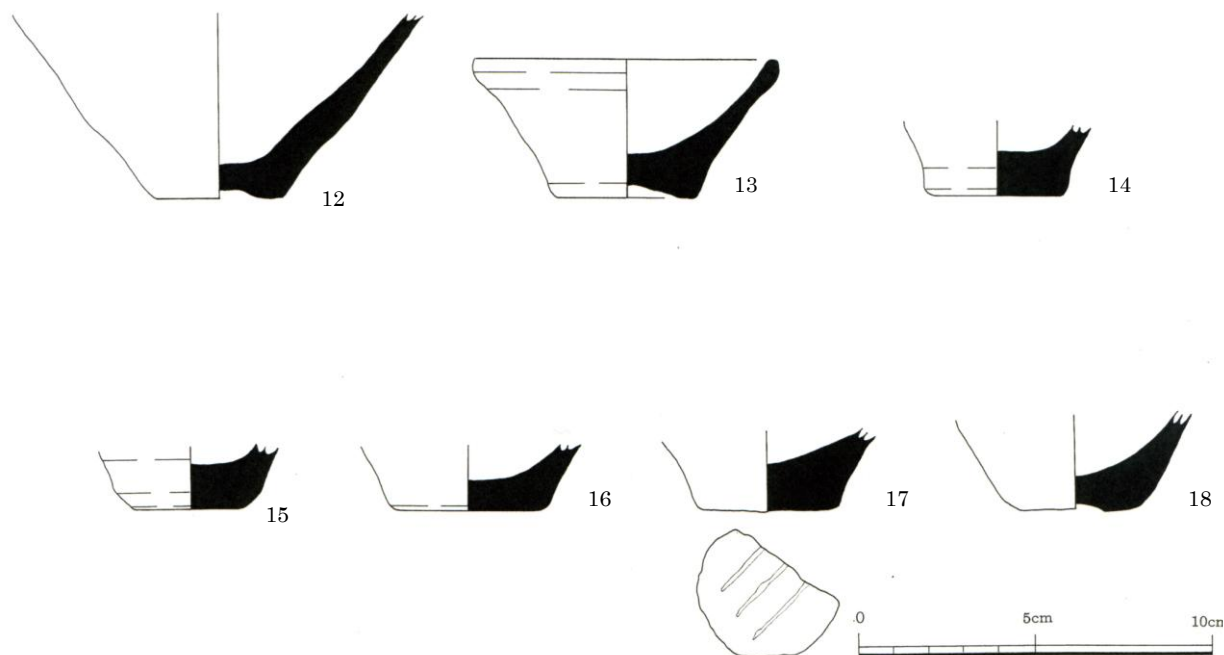
図 17 も弥生土器の底部である。底部径 4 cm、残存最大径 6 cm、残存高 2.1 cm、底部厚 1.4 cmを測る。内面は褐灰色で外面は全面に黒班を有する。内面の傾斜は直線的になっている。底部に 3 条の筋状の痕跡が残る。

図 18 も弥生土器の底部である。底部径 3.6 cm、残存最大径 6.8 cm、残高 2.6 cm、底部厚 1.4 cmを測る。胎土は礫・小礫を含み粗砂も多く極めて粗い。色調は内面が褐灰色で外面が黄灰色である。

以上 9 個体の底部の報告を行ったが、破片であり全容はつかめないが、底部が平坦な個体と窪みを有する個体に分けられる。また色調も黄灰色系が多いが、一部に淡赤橙色系の個体もある今回の資料のみでは在地と外来の土器の検討はできないが、今後の検討の一助としたい。また底部の観察で図 17 のみ痕跡を残すが、それ以外はナデ消して平坦面をつくるか、未調整で、葉脈なども見られず、いわゆる回転台を想定できるような痕跡は残っていなかった。

なお今回報告した底部破片を含む黒褐色粘質土は、全て弥生土器とは特定できないが、土質の土器ばかりで、須恵器を含まない堆積である。





遺物図版 5 トレンチ 5 出土遺物

## トレンチ 6

上端で 6.3m×6.2m を測り面積は 39.06 m<sup>2</sup>。下端で 4.4m×3.2m を測り面積は 14.08 m<sup>2</sup>。現状地盤 T P +10.327m。

## 基本層序

整地層 T P +10.327m から 8.93m で厚さ 139.7 cm。旧耕作土 T P +8.93m から 8.75m で厚さ 18 cm。オリーブ灰色砂質土 (2.5 G Y 6 / 1) T P +8.75m から 8.36m で厚さ 39 cm。暗赤褐色砂質土 (5 Y R 3 / 3) T P +8.36m から 7.9m で厚さ 46 cm。にぶい黄褐色砂質土 (10 Y R 5 / 3) T P +7.9m から 7.72m で厚さ 18 cm。黄褐色粘質土 (2.5 Y 5 / 4) T P +7.96m から確認できた範囲では T P 7.42m で厚さ 54 cm。

## 検出された遺構

1 次遺構面として、オリーブ灰色砂質土上面で精査を行った。結果、土坑 3、鋤溝 12 を検出。

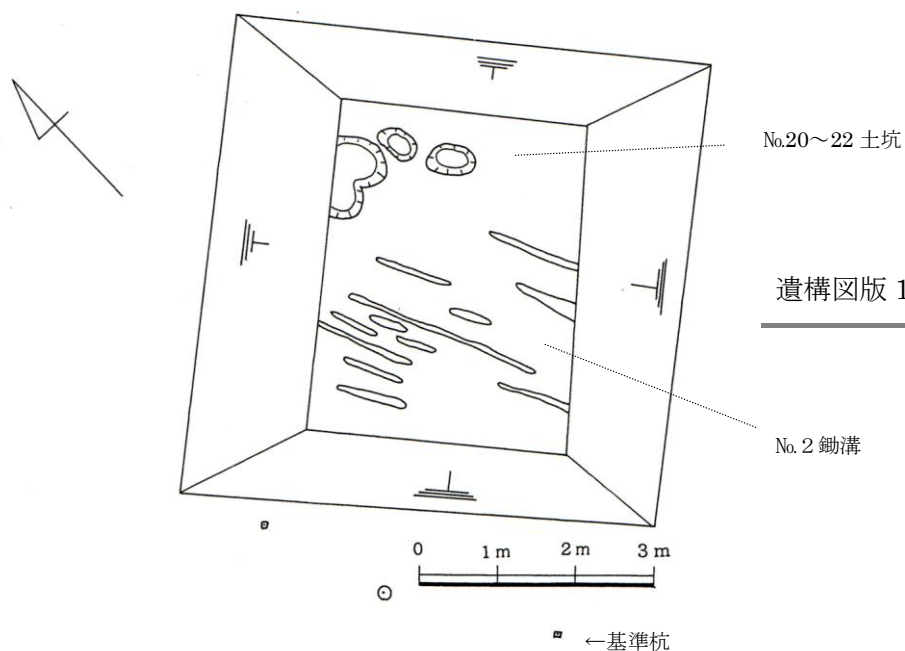
No.20～22 土坑は埋土は黄灰褐色粘質土であるが、3 ついずれも T P +8.72m 程度から 8.73m 程度までで、土坑というよりも土が被さっている薄さの堆積であった。

No.2 鋤溝は上層の旧耕作土が堆積している。こちらも T P +8.72m からの検出で、比較的残存状態は良好である。図化した 12 条は N30° W の角度を持つ。

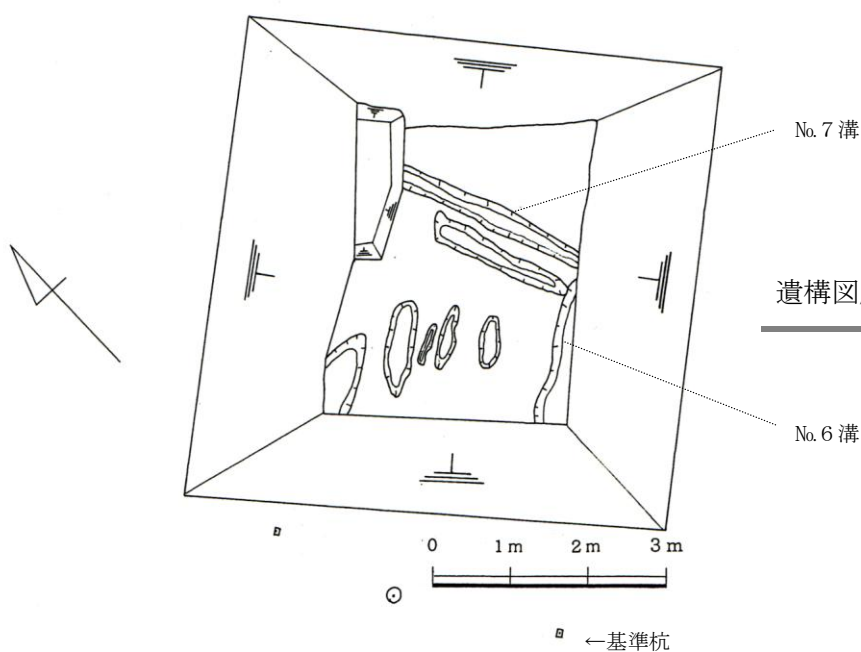


2次遺構面として、暗赤褐色砂質土上面で精査を行った。結果、溝3、土坑5を検出した。

No.6溝はN24° Wの角度を持つ。埋土は黄灰褐色粘質土である。No.6溝とほぼ直行する形でNo.7溝が検出された。埋土はNo.6溝と同様に黄褐色粘質土である。No.6・7溝とも堆積の厚さは2～3cm程度で上肩は中世の耕作土化の際に、削平されてしまった可能性が高く底部の痕跡の検出と判断される。No.23～27土坑についても、青灰色粘質土の堆積が見られたが、層厚は2～3cm程度でその遺構の性格まで特定できる材料はない。

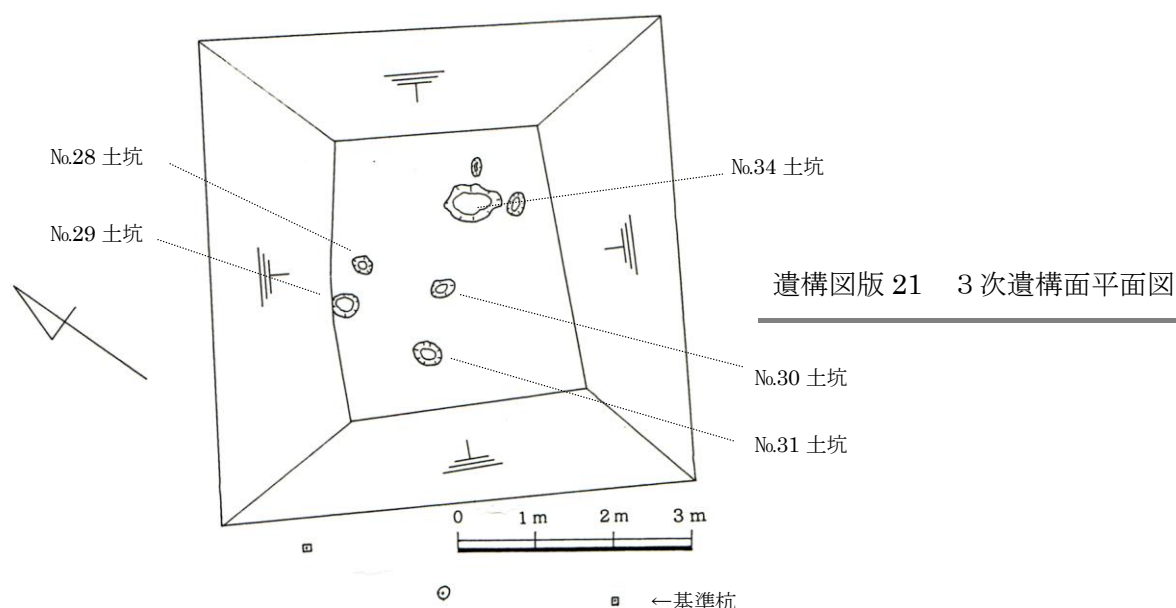


遺構図版 19 1次遺構面平面図



遺構図版 20 2次遺構面平面図

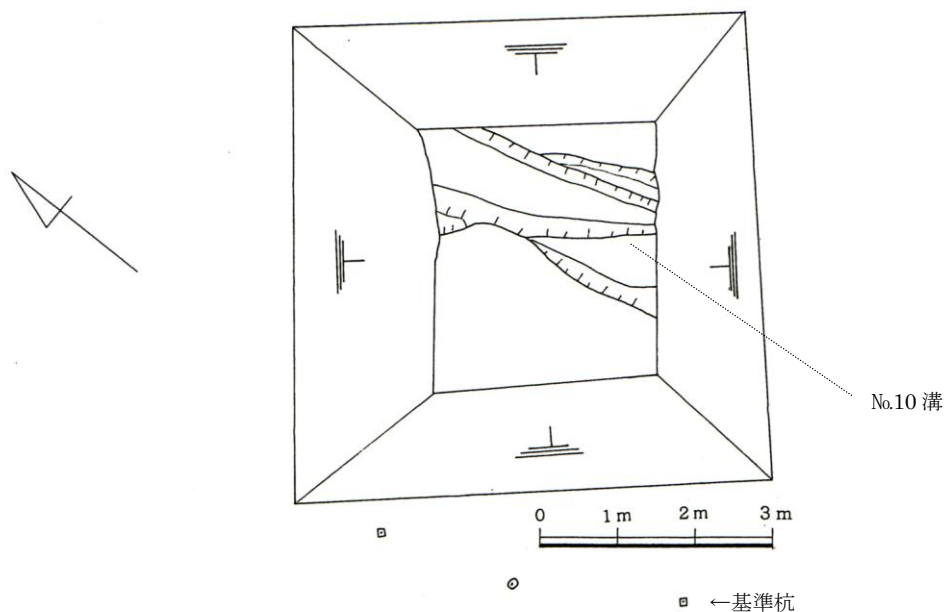
3次遺構面としてにぶい黄褐色砂質土上面で精査を行った。検出された遺構は土坑7である。No.28～33 土坑の6つの埋土は同一で暗黄褐色粘質土である。検出されたレベルT P+8.07mから8.1 mであるが埋土は浅く2～3 cm程度しかない。No.28～31 土坑は比較的規則的に配置されており、柱穴の可能性は残す。しかし今回の検出状況では堀肩と明言できるものではないので、土坑として取り扱う。No.34 土坑は検出レベルは他の土坑と同じだが、埋土は黄褐色粘土ブロックを明瞭に含む点や形の歪さで他の土坑とは異なる性格を有する。しかしNo.34 土坑も3～4 cm程度の掘削で明瞭な堀肩は検出されなかった。



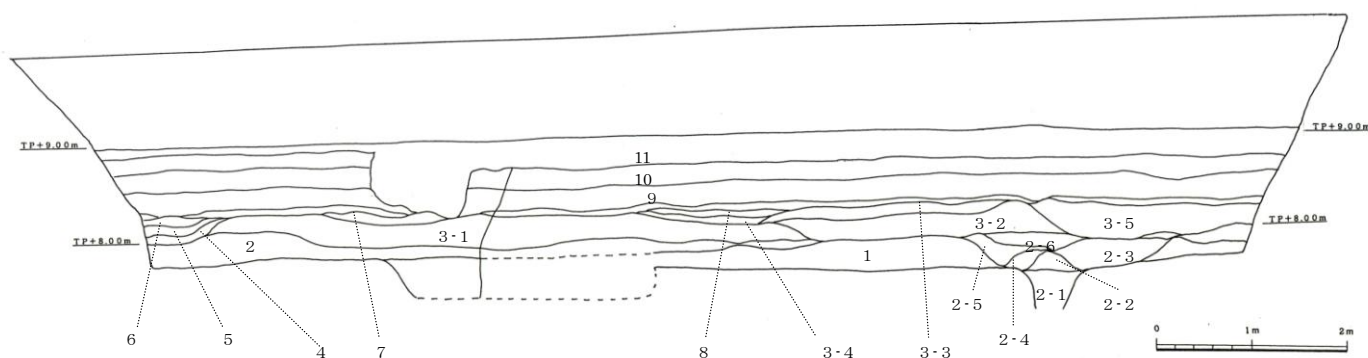
4次遺構面として上層のにぶい黄褐色砂質土を掘削すると、下層の地山相当堆積である黄褐色粘土を切り込む形で北西から南東向きの溝1が検出された。

No.10 溝は、南東側で最大幅で1m75 cm、北西側で最小幅で1 m25 cmを測る。検出された高さ及び形状は南東側の断面で良好に観察できた。北西側の断面は湧水及び砂層堆積のため崩落が激しく断面精査ができなかった。南側の肩の上部でT P+10.12mを測る。そこからT P+14.5mまで1 m程度なだらかなテラス状の段がつく。ここで急にV字状に屈曲が変わる。湧水はこのV字に屈曲する上面まで達する。埋土は砂層でかつ湧水が激しく溝の底を検出することは難しい状況であった。確認できた最深部でT P+11m程度である。北側の肩も20 cm程度のテラス状の段をもち、なだらかに傾斜し上肩に達する。湧水レベル平坦面が溝がオーバーフローしてできるものか、作業スペースとして人為的に形成されたものかなど詳細は不明である。

角度はN32.5° Wの傾きである。



遺構図版 22 4次遺構面平面図



- 1 黄褐色粘土 2.5Y 5/4  
 2 ①緑灰色砂 10GY 6/1 ②明青灰色砂 10BG 7/1 ③灰白色砂 10Y 8/2 ④黄褐色砂 2.5Y 5/4  
 ⑤オリーブ灰色砂 5GY 6/1 ⑥オリーブ灰色砂 5GY 6/1 ⑦暗オリーブ灰色砂 5GY 4/1  
 3 ①暗赤褐色砂質土 5YR 3/3 ②暗赤褐色砂質土 5YR 3/3 ③極暗赤褐色砂質土 5YR 2/3  
 ④明黄褐色 2.5YR 5/6 ⑤暗赤褐色砂質土中に黄色粘土含む  
 4 黄褐色砂質土 10YR 5/6 粘土含まず  
 5 黄褐色砂質土 10YR 5/6 黄色粘土含む  
 6 黄褐色砂質土 10YR 5/6 粘土含まず砂質強い 7 黄褐色砂質土 10YR 5/ 黄色粘土含む  
 8 灰黄色砂質土 10YR 6/2 9 オリーブ灰色砂質土粘質 2.5GY 6/1  
 10 オリーブ灰色砂質土砂質 2.5GY 6/1

遺構図版 23 6トレンチ西・北壁断面図

## 検出された遺物

---

トレンチ6からは、2次遺構面である暗赤褐色砂質土中に比較的多くの遺物が出土した。図化できたのは8点である。

図19は弥生土器の口縁部である。口径12.2cm、最大径12.8cm、残存高4.4cmを測る。色調は内外面とも灰黄色を呈する。胎土は礫、小礫、粗砂を含み比較的粗雑である。焼成は不良だが、口縁は内外面とも丁寧なナデ調整を行っている。口縁にナデ調整による明確な面を持ち、直径1cmの円形浮文を張り付けている。図化した面は比較的良好に残存していたが、他の浮文は剥離があり明瞭に残らない。

図20は弥生土器の甕である。口径15.8cm、残存最大径16.0cm、残存高4.8cmを測る。色調は灰黄色を呈する。外面にタタキ調整を残すが、概して磨滅が著しい。口縁部は直立し、つまんで内傾させている。

図21は高坏の脚部である。残高は9.8cmである。内面は中空で絞りしめた痕跡を残す。上端は坏部との接合部で一部に接合の際の強いナデ調整を残す。坏部との接合面は平坦で、いわゆるさし込み法であらかじめ脚部の大きさに坏部の底を穿孔し接合したものと思われる。胎土に赤色の小礫を多く含み、色調も黄橙色ながら赤色が強くトレンチ内の他の土器と様相が異なる。

図22も高坏の脚部である。残高は7.5cmである。中空で内面に絞りしめた痕跡を残す。坏部との接合面に窪みを持つ。これは図21と異なり、貼り付け法により坏部と脚部を張り付けるために施されたものと思われる。

図23から25は底部の破片であるが、3個体とも底面の作りが異なり特徴的であり、底部だけの破片で上部を復元する事は困難だが形状等について順次報告する。

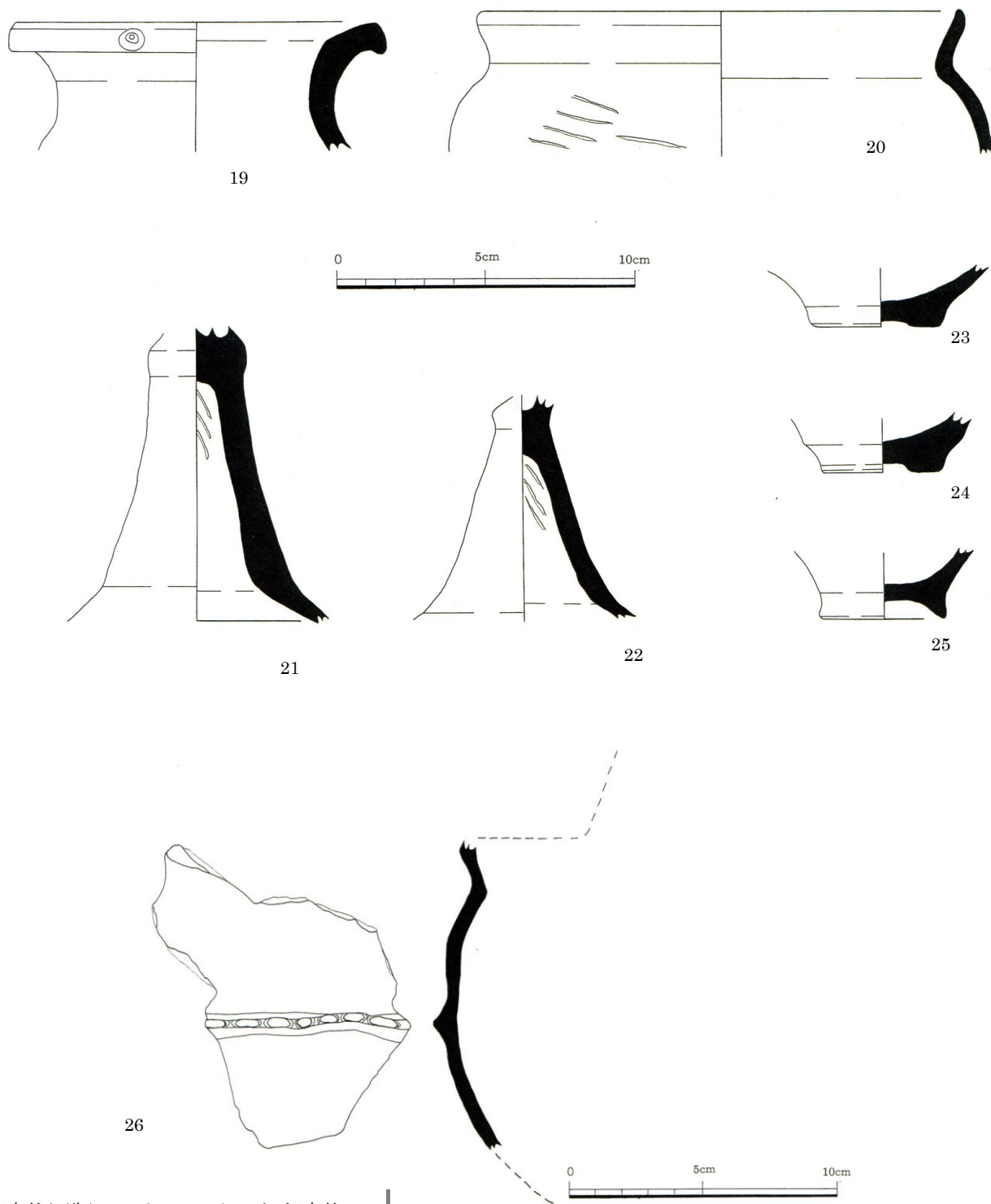
図23は底部径4.4cmで残高は1.9cmを測る。色調は内面は灰褐色で外面は全面に黒班を受けている。底部平坦面に直径2cmほどの窪みを持つ段差は明瞭でないが、人為的に窪めたものであろう。

図24は底部径4cmで残高は1.9cmを測る。図23と比べ明確に底部に窪みを持ち段差の平坦面も丁寧に仕上げられている。

図25は底部径4.2cm、残高2.4cmを測る。底部を設置した際、中空となり接地面はわずかでしかない。底部外面は指オサエながら丁寧に仕上げている。

図26は胴部に刻み目の突帯を持つ破片である。突帯の部分を平行に据えて復元すると最大径は18.8cmとなる。今回図化したのは上から見た図面及び断面図である。限られた破片で特定はできないが、手焙り式土器の一部であろうと思われる。刻み目はV字状を呈して上端は5mm程度で、刻みの底に粘土を押し付けた痕跡があるので、三角状の工具で突帯に押さえつけ刻みこんだものと思われる。色調は外面が黄灰色で内面は褐灰色を呈する。粗砂は含むが、胎土は比較的精緻である。

これらの土器群は、破片ばかりであるが、弥生時代後期森田編年摂津VI様式の範囲内で比較的まとまっているものと思われる。



遺物図版 6 トレンチ 6 出土遺物

## トレンチ 7

上端で 6.2m×6.2mを測り面積は 38.44 m<sup>2</sup>。下端で 4m×3.8mを測り面積は 15.2 m<sup>2</sup>。現状地盤 T P +10.06m。

## 基本層序

---

整地層 T P +10.06m から 8.68m で厚さ 138 cm。旧耕作土 T P +8.68m から 8.5m で厚さ 18 cm。オリーブ灰色砂質土 (10Y 5/2) T P +8.5m から 8.23m で厚さ 27 cm。灰オリーブ砂質土 (5Y 5/3) T P +8.23m から 8.03m で厚さ 20 cm。地山相当の黄褐色粘土 (2.5YR 5/4) T P +8.03m から確認できた範囲で 7.9m で厚さ 13 cm。

## 検出された遺構

---

1 次遺構面として鋤溝群 14 を検出した。いずれも上層の旧耕作土が埋土である。向きも同一で北西から南東へ 33.5 度の傾きをもっている。オリーブ灰色砂質土は中世相当の堆積であるが、これらの鋤溝は近世段階の耕作の影響を受けているものと思われる。下層の灰オリーブ堆積は上層とちがいに礫・小礫を多く含むので分層したが基本的には同一堆積である。この 2 層を人力掘削すると下層は地山相当の黄褐色粘土層が検出された。精査を行ったが遺構・遺物はなかった。

## トレンチ 8

---

上端で 6.4m × 6.1m を測り面積は 39.04 m<sup>2</sup>。下端で 4.8m × 4.5m を測り面積は 21.6 m<sup>2</sup>。現状地盤 T P +9.91m。

## 基本層序

---

整地層 T P +9.91m から 8.65m で厚さ 126 cm。旧耕作土 T P +8.65m から 8.5m で厚さ 15 cm。オリーブ灰色砂質土 (10Y 5/2) T P +8.5m から 8.0m で厚さ 50 cm。にぶい黄褐色砂質土 (2.5Y 6/3) T P +8.0m から 7.88m で厚さ 12 cm。地山相当の黄褐色粘土 (2.5Y 5/) T P +7.88m から確認できた範囲で 7.74m で厚さ 14 cm。

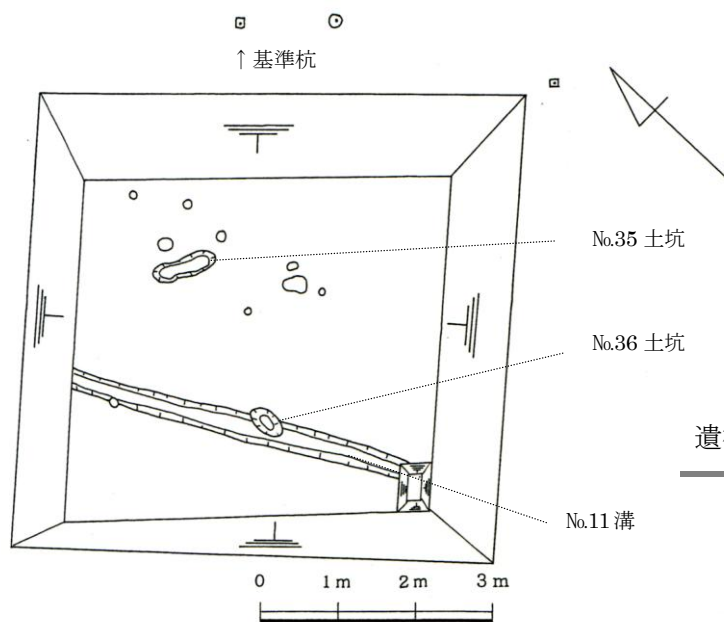
## 検出された遺構

---

1 次遺構面としてオリーブ灰色砂質土上面で精査を行った。検出された遺構は溝 1、土坑 2、足跡群である。

No.11 溝は N28.5° W の角度で検出された。高さは概ね T P +8.35m からの検出である。埋土は黄褐色粘質土であるが深さは 2～3 cm 程度で明瞭な掘肩は検出されなかった。上肩は近世段階の耕作で削平された可能性が高い。ただし角度は他のトレンチ同様 33 度振った地割であることは確認できた。No.35・36 土坑も浅く上層の旧耕作土がブロック状に入るもので、中世段階の遺構ではないものと思われる。その他小さな穴は近世の耕作に伴う人間の足跡及び偶蹄目科の動物の足跡であろうと思われる。



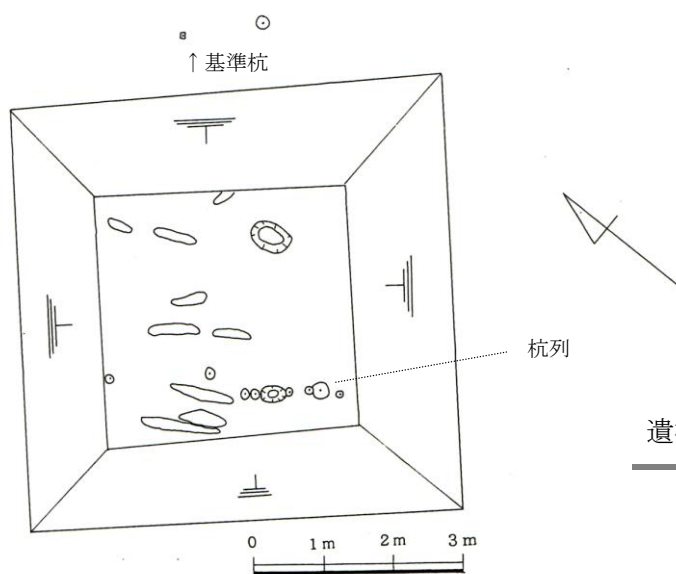


遺構図版 24 1次遺構面平面図

2次遺構面として、にぶい黄褐色砂質土上面で精査を行った。検出された遺構は杭列、鋤溝群、足跡群である。

杭は直線的にN28~37° Wで並ぶ。高さは概ねT P+8.11m程度からの検出である。埋土は上層のオリーブ灰色砂質土である。この杭列に沿う形で鋤溝が検出された。埋土はこちらも上層のオリーブ灰色砂質土である。また鋤溝の間を縫うように多くの足跡が検出された。これら耕作の痕跡である鋤溝や足跡は他のトレンチでも検出されていたが、すべて近世のものであった。中世の堆積を完掘した後の検出で、埋土も中世のものであり、これら耕作跡は中世段階のものと判断される。

3次遺構面として、地山相当の黄褐色粘土層上面で精査を行ったが遺構・遺物は確認されなかった。



遺構図版 25 2次遺構面平面図



遺構図版 26 8 トレンチ北壁断面図

- 1 黄褐色粘土 2.5Y 5/3
- 2 にぶい黄褐色砂質土 2.5Y 6/3
- 3 明黄褐色砂質土 2.5Y 6/6
- 4 オリーブ灰色砂質土 10Y 5/2
- 5 オリーブ灰色をベースに黄色粘土ブロック含む
- 6 旧耕作土
- 7 整地層

## 検出された遺物

トレンチ8からは、1次遺構面オリーブ灰色砂質土精査時、1次遺構面No.11 溝、No.35・36 土坑から土師器・須恵器の碎片が、出土したが図化できる破片はなかった。2次遺構面のにぶい黄褐色砂質土より土師器・須恵器の碎片が出土したが、図化できる破片はなかった。

## トレンチ9

上端で6.0m×5.6mを測り面積は33.6 m<sup>2</sup>。下端で5.3m×5.0mを測り面積は26.5 m<sup>2</sup>。現状地盤TP+10m。

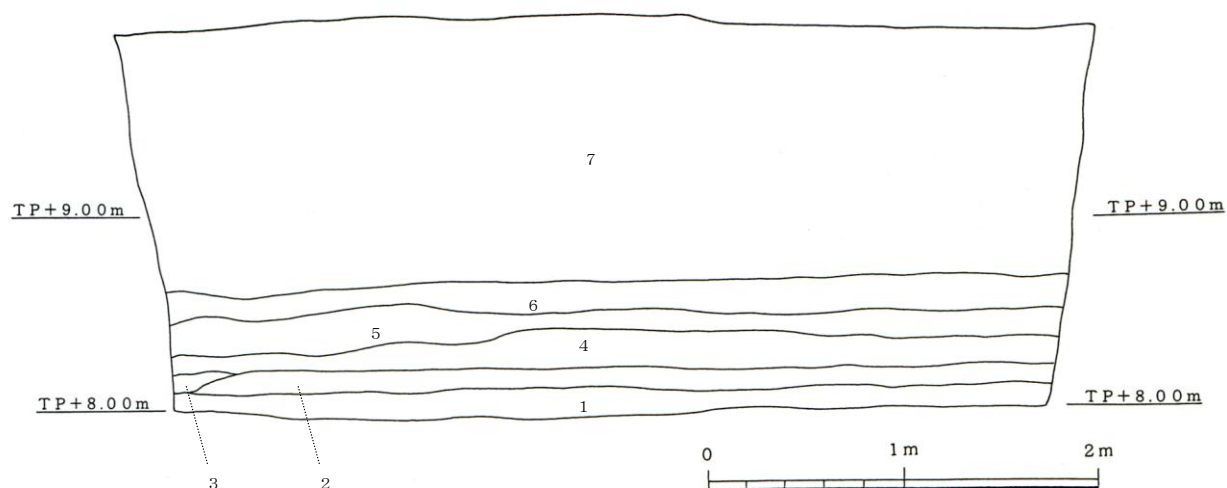
## 基本層序

整地層TP+10mから8.55mで厚さ145 cm。旧耕作土TP+8.55mから8.41mで厚さ14 cm。緑灰色砂質土(7.5GY 6/1) TP+8.41mから8.28mで厚さ13 cm。オリーブ灰色砂質土(5GY 5/1) TP+8.28mから8.15mで厚さ13 cm。地山相当のオリーブ黄色粘土(2Y 6/4) TP+8.15mから確認できた範囲で7.9mで厚さ25 cm。

## 検出された遺構

1次遺構面として緑灰色砂質土上面で精査を行った。検出された遺構は鋤溝群のみである。他のトレンチと同様に北西から南東へ33.5度ふった角度で検出された。残存した鋤溝は8条で埋土はいずれも上層の旧耕作土である。

2次遺構面としてオリーブ灰色砂質土上面で精査をおこなったが遺構・遺物は検出されなかった。



遺構図版 27 トレンチ 9 東壁断面図

- 1 オリーブ黄色粘土 5Y 6/4
- 2 オリーブ灰色砂質土 5GY 5/1
- 3 灰オリーブ粘質土 5Y 6/2
- 4 オリーブ灰色砂質土 5GY 5/1
- 5 緑灰色砂質土 7.5GY 6/1
- 6 旧耕作土
- 7 整地層

## トレンチ 10

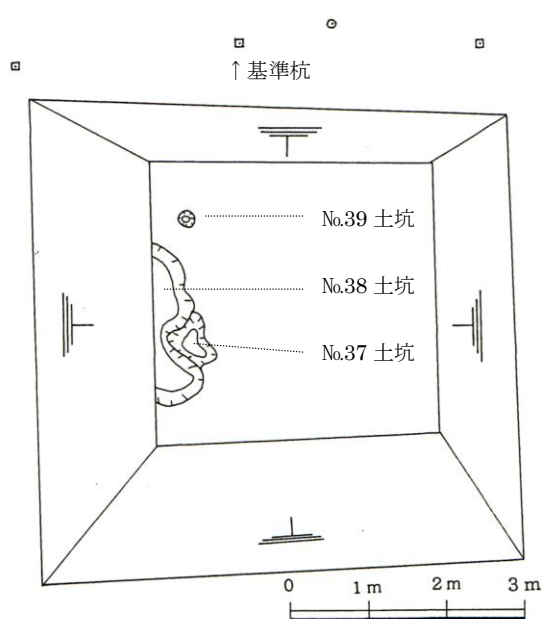
上端で6.4m×6.2mを測り面積は39.68㎡。下端で3.7m×3.7mを測り面積は13.69㎡。現状地盤で勾配がついており高い南側でTP+10.67m低い北側で10.16m。

### 基本層序

整地層TP+10.16mから8.8mで厚さ136cm。旧耕作土TP+8.8mから8.63mで厚さ17cm。オリーブ黄色砂質土(7.5Y 6/3)TP+8.63mから8.4mで厚さ23cm。オリーブ灰色砂質土(10Y 5/2)TP+8.27mから8.2mで厚さ7cm。オリーブ灰色砂質土の下層は地山相当の黄褐色粘土。

## 検出された遺構

1次遺構面として、オリーブ黄砂質土上面で精査を行った。検出されたのは歪な形で切り合う土坑2である。No.37土坑がNo.38土坑を切っている形である。No.37土坑の埋土は黄褐色粘質土、No.38土坑の埋土は暗褐色粘質土。No.37土坑はT P +8.21mからの検出で深さは9 cmと浅く掘肩もしっかりしていない。No.38土坑はT P +8.28mで深さは14 cmあり、掘肩も直立を意識しており比較的しっかりしている。もう一つ直径25 cmのNo.39土坑が検出された。いずれの土坑の相関関係はこの限られたトレンチの範囲内では不明である。2次遺構面として、オリーブ灰色砂質土上面で精査を行った。結果土坑2、杭7を検出した。土坑の埋土は暗褐色砂質土で、分層は可能であった。しかし形は不整円形で深さも浅く掘肩も明瞭でなく自然に堆積したような状態であった。



遺構図版 28 1次遺構面平面図

## 検出された遺物

トレンチ 10 からは、2次遺構面であるオリーブ灰色砂質土から土師器1点が出土したが、図化できる破片ではなかった。

## トレンチ 11

上端で7.1m×4.0mを測り面積は28.4 m<sup>2</sup>。下端で4.8m×2.7mを測り面積は12.96 m<sup>2</sup>。現状地盤で勾配がついており高い東側でT P +10.4m低い西側で9.88m。

## 基本層序

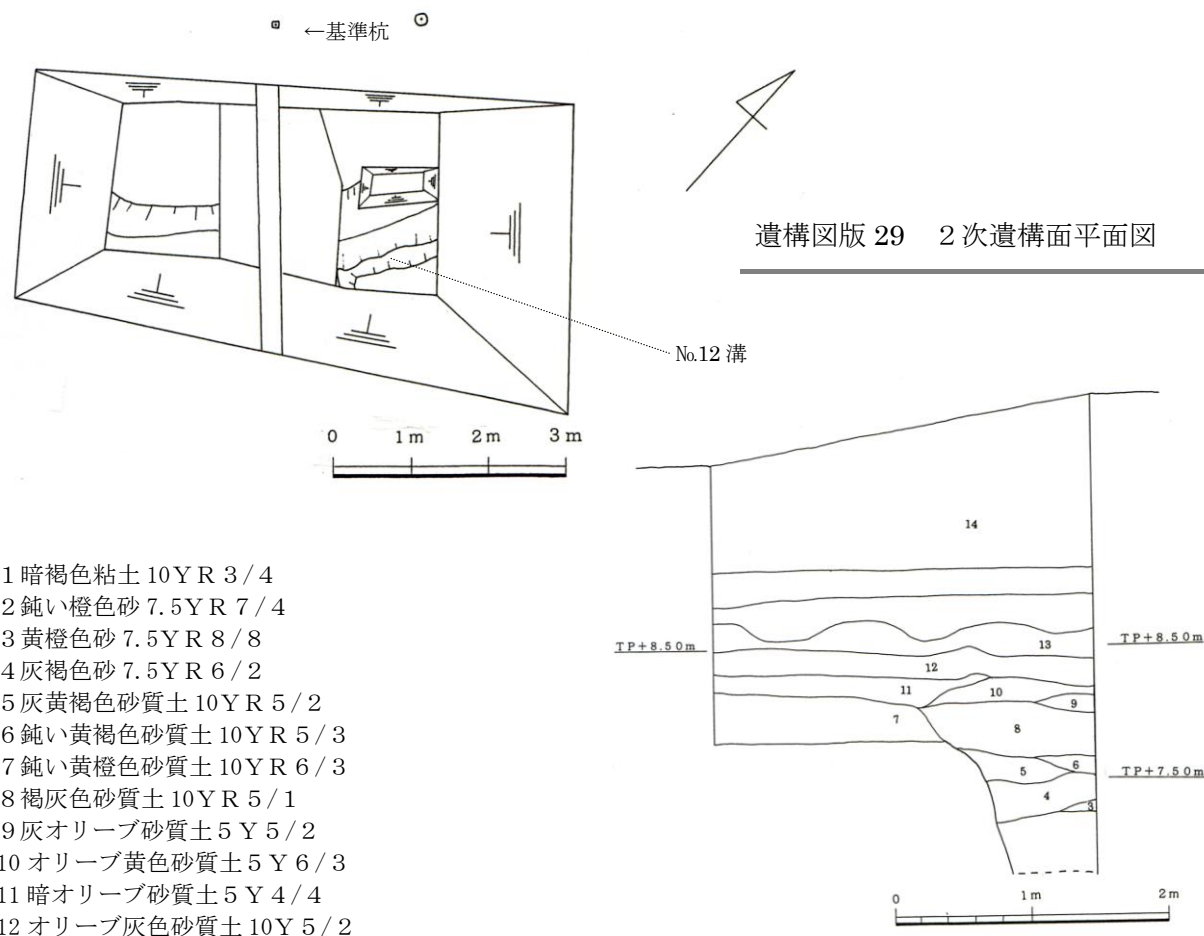
整地層T P +9.88mから8.75mで厚さ113 cm。旧耕作土T P +8.75mから8.46mで厚さ29 cm。オリーブ灰色砂質土(10Y 5/2) T P +8.42mから8.18mで厚さ24 cm。褐灰色砂質土(10Y R 5/

1) TP+8.18 から 7.8m で厚さ 38 cm。下層は地山相当の暗褐色粘土 (10YR 3/4)。

## 検出された遺構

1 次遺構面としてオリーブ灰色砂質土上面で精査を行った。遺構・遺物は検出されなかった。

2 次遺構面として褐灰色砂質土上面で精査を行った。結果、溝 1 が検出された。No.12 溝はコンクリート管が中央に位置し撤去することができず、南北に分断される形で検出された。また北側には攪乱が入り、部分的な検出となった。しかし北西側で堀肩が比較的良好に残存し、N33° E の角度で検出された。トレンチの中央を分断するコンクリート管の下層の断面は良好に残り土層観察が可能であった。この溝は TP+8.18m からの検出で、褐灰色砂質土及び地山相当の暗褐色粘土を切り込む形で検出された。南壁の観察で東肩は明瞭に残り、西肩は調査区の端に位置しこの断面では確認できなかった。褐灰色砂質土で埋没した肩はなだらかに傾斜、その下層では肩はほぼ直下に落ちる。テラスは形成しないが、段を付ける意識は働いているものと思われる。埋土は下層は砂層で上層は砂質土になっている。層序からも一気に埋めたのではなく自然に廃絶されていった断面が確認された。



遺構図版 30 No.12 溝内北壁断面図

## トレンチ 12

---

上端で 6.0m×6.0m を測り面積は 36.0 m<sup>2</sup> でトレンチを設定した。重機により整地層の掘削を行ったが、5 m を超えても瓦礫を含む堆積であった。結果、人力による調査掘削は極めて困難と判断し調査を終了した。

## トレンチ 13

---

上端で 6.0m×6.0m を測り面積は 36.0 m<sup>2</sup> でトレンチを設定した。トレンチ 12 同様に 5 m を超えても瓦礫を含む堆積であった。結果人力による調査掘削は極めて困難と判断し調査を終了した。上層は黒色土、下層は同一の青色土であった。

## トレンチ 14

---

上端で 8.1m×4.4m を測り面積は 35.64 m<sup>2</sup>。下端で 0.8m×0.5m を測り面積は 0.4 m<sup>2</sup>。現状地盤は T P +11.47m。このトレンチは湧水が激しく、壁面の崩落があり、かなりの勾配をつけて調査を行った。

## 基本層序

---

整地層 T P +11.47m から 9.2m で厚さ 227 cm。旧耕作土 T P +9.2m から 9.08m で厚さ 12 cm。灰オリーブ色砂質土（5 Y 5 / 3） T P +9.08m から 8.58m で厚さ 50 cm。明赤褐色砂質土（5 Y R 5 / 6） T P +8.58 から 8.49m で厚さ 9 cm。暗赤褐色砂質土（5 Y R 3 / 4） T P 8.49m から 8.1m で厚さ 39 cm。

## 検出された遺構

---

1 次遺構面として灰オリーブ色砂質土上面で精査を行った。結果、土坑 2 が検出された。この 2 つの土坑は極めて浅く、形状は丸くなるが、自然堆積で、人為的な掘削ではないものと判断される。

2 次遺構面として明赤褐色砂質土上面で精査を行った。遺構の検出はなかった。

3 次遺構面として暗赤褐色砂質土上面で精査を行った。結果、溝 1 を検出した。

この No.13 溝は、北側のラインが明瞭で N62° E で検出された。形状は北側の肩は直線的であるが、南側の肩は屈曲し狭くなる。トレンチ内で確認できた長さは 3.4m、最大幅で 90 cm、最小幅で 46 cm を測る。高さは上場で T P +8.46m、下場では 8.32m で深さは概して 14 cm である。埋土は礫・小礫を含む極めてゆるい黄灰色砂である。この溝も残存状況は良くないが当該地の地割を考える資料となるだろう。





## 検出された遺物

---

トレンチ 14 からは、2 次遺構面である明赤褐色砂質土、3 次遺構面である暗赤褐色砂質土及びNo. 13 溝より土師器・須恵器の碎片が検出されたが、図化できる破片はなかった。

## トレンチ 15

---

上端で 6.0m×6.0m を測り面積は 36.0 m<sup>2</sup> でトレンチを設定した。トレンチ 12 同様に 5 m を超えても整地層であった。かつ湧水が激しく底部は泥状になった。壁の崩落もあり、力による調査掘削は極めて困難と判断し調査を終了した。上層は黄色土、下層は同一の青灰色土であった。

## トレンチ 16

---

上端で 7.2m×5.2m を測り面積は 37.44 m<sup>2</sup>。下端で 3.7m×2.5m を測り面積は 9.25 m<sup>2</sup>。現状地盤は T P +11.42m。

## 基本層序

---

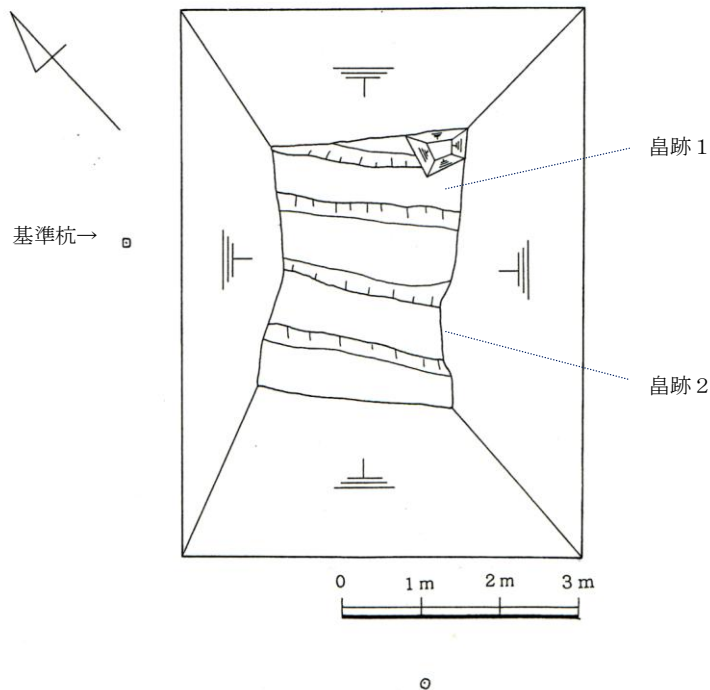
整地層 T P +11.41m から 9.18m で厚さ 223 cm。旧耕作土 T P +9.18m から 8.98m で厚さ 20 cm。灰オリーブ色砂質土（5 Y 5 / 3） T P +8.98m から確認できた範囲で 8.75m で厚さ 23 cm。

## 検出された遺構

---

1 次遺構面として、灰オリーブ色砂質土上面で精査を行った。結果、隆起した畠跡 2 を検出した。人力掘削時に灰色オリーブ上面で旧耕作土が N35° W の角度で筋状に検出された。この旧耕作土を掘削し、中世段階の畠堆積を隆起している状況で検出できた。隆起堆積は 2 条検出された。比較的残りの良い南側を観察する。上部の平坦面の幅ほぼ均一で 75 cm を測る。高さは T P +8.9m から 9 m の間でほぼ均一である。下場が最大幅となり 110 cm を測る。下場のレベルが T P +8.74m で高低差は中央部分で 24 cm となる。北側の隆起堆積との間隔は平坦部中央から約 1 m 80 cm の間隔で並ぶ。

この遺構面も湧水が激しく壁面の崩落及び遺構面の水没があり、これ以上の詳細な分析はできなかった。下層が灰白色砂で非常に不安定な状況であった。この砂層の一部について重機を用いトレンチ掘削を行ったが、安定した地盤には達しなかった。



遺構図版 33 1次遺構面平面図

## トレンチ 17

上端で 7.1m×5.5mを測り面積は 39.05 m<sup>2</sup>。下端で 3.3m×2.6mを測り面積は 8.58 m<sup>2</sup>。現状地盤は T P +11.35m。

### 基本層序

整地層 T P +11.35mから 9.62mで厚さ 173 cm。旧耕作土 T P +9.62mから 9.48mで厚さ 14 cm。灰オリーブ色砂質土 (5 Y 5 / 3) T P +9.48mから 8.86mで厚さ 62 cm。にぶい赤褐色砂質土 (5 Y R 5 / 3) T P +8.86 から 8.45mで厚さ 41 cm。明黄褐色砂質土 (10 Y R 6 / 6) 及びにぶい黄褐色砂質土 (10 Y R 5 / 4) T P +8.45mから 8.27mで厚さ 18 cm。

### 検出された遺構

1次遺構面として灰オリーブ色砂質土上面で精査を行った。結果中世段階の耕作土の検出のみで遺構の検出はなかった。

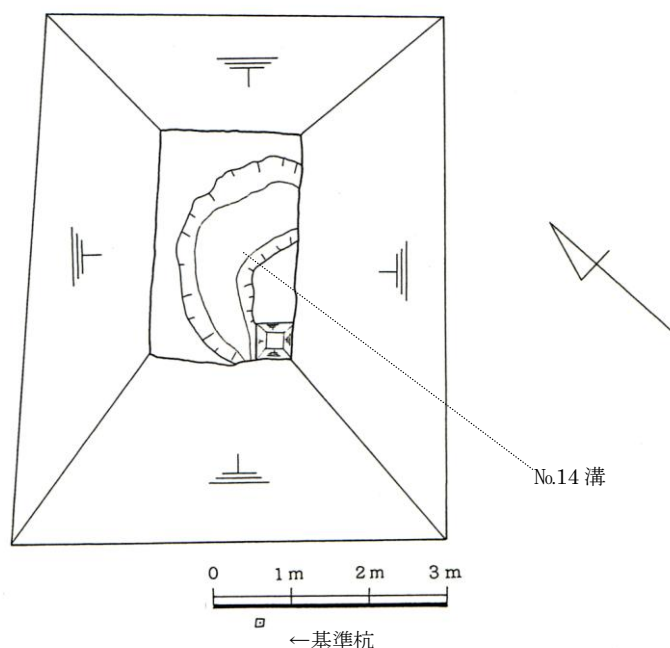
2次遺構面としてにぶい赤褐色砂質土上面で精査を行った。一部に黄褐色砂質土が互層に入り平面上でも分層が可能であったが、サブトレンチで確認を行ったが上層を覆っているだけの状況と判断し、さらに下層を人力掘削し全面ににぶい赤褐色砂質土を検出した。この面でも精査を行ったが遺構の検出はなかった。この堆積は上層ほど赤褐色が強く下層ほど黄褐色が強くなる。また上層は若干粘質が強いものの下層ほど粘質が弱く地面にしみ込むほどの湧水があった。この堆積の性格としては、明確なラミナは確認できないが、河川の氾濫等の可能性がある。周辺のトレンチでも湧水が

激しい傾向がある。

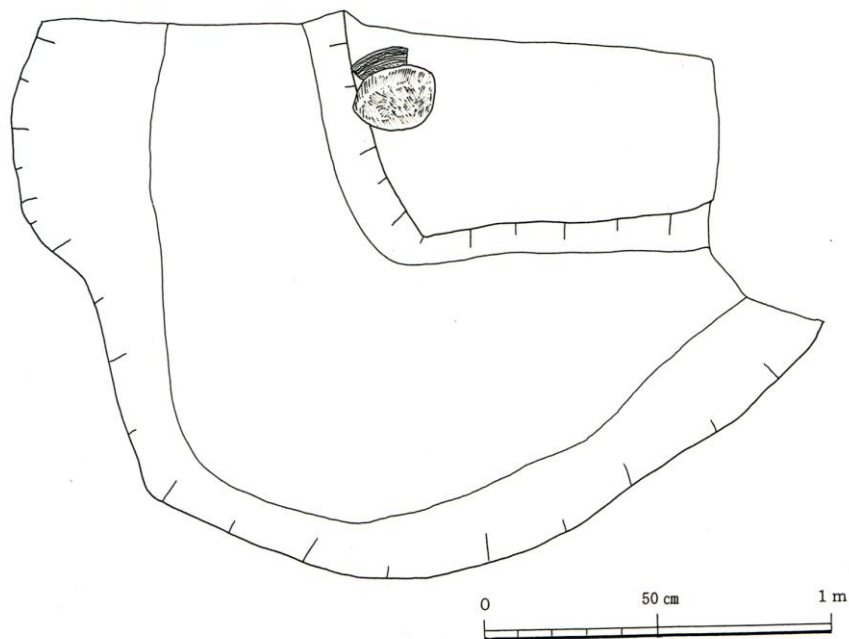
3次遺構面として、調査区北側では灰黄褐色砂質土、南側ではにぶい黄褐色砂質土上面で精査を行った。T P +8.6m段階で精査を行った結果、北東から南西に向けて青灰色砂が南北に長く帯状に入る遺構らしきものが検出された。しかし上層の河川氾濫層の影響が強く湧水もある明瞭な輪郭が出ていなかった。再度 10 から 15 cmほど、軟弱な堆積を除去すると、北側では明黄褐色砂質土で南側ではにぶい黄褐色砂質土の堆積が検出され3次遺構面として再度精査を行った。3次遺構面は上面と異なり、堅緻である。また表面に上層の河川氾濫堆積の影響を受けたであろうマンガン班の沈着が見られる。

南西から北上し東へ屈曲する鍵状の溝 1 を検出した。埋土は礫・小礫を多く含みゆるい青灰白色砂層である。このNo.14 溝はT P +8.5mからの検出で下場は 8.31m程度で深さは 19 cmである。

この溝の東側肩で屈曲する部分から須恵器壺の完形品（一部口縁部が欠損）が出土した。須恵器壺の詳細な報告は遺物編で行うが、ここでは検出状況のみ報告する。この壺は、トレンチ中央の土層観察用のあぜに食い込む形で検出された。また東に屈曲する堀肩もあぜの下に位置する結果となった。あぜを撤去すると須恵器壺の検出状況が明確となった。壺は口縁部を東側に向け横たわった形で検出された。検出された位置は、あぜを取り除いて検出されたNo.14 溝の堀肩に埋没する形で検出された。この肩内の堆積はにぶい黄褐色砂質土及び明黄褐色砂質土で両層を合わせて 20 cm程度である。下層はにぶい黄褐色砂質土で、この堆積の上面で土器が検出された場所に 2～3 cmの窪みを残していた。土器は最大幅 25 cmを測るもので、黄褐色砂質土及び明黄褐色砂質土に包含され下層に設置され胴部 5 cm程度が露出している状況で検出された結果となった。No.14 溝の深さは 19 cmと浅く上層の河川氾濫堆積から勘案すると堀肩の上部は削平されている可能性が高い。平面精査時に土坑等の遺構の検出がなかった状況から、No.14 溝造営時に人為的に置かれ埋められていった可能性がある。またこの壺はほぼ完形品であるが、焼成後に口縁部を打ち欠いている。比較的鋭角にV字状な割れ口を呈する。この割れ口を下向きに置いており人為的な所作があったのではないと思われる。

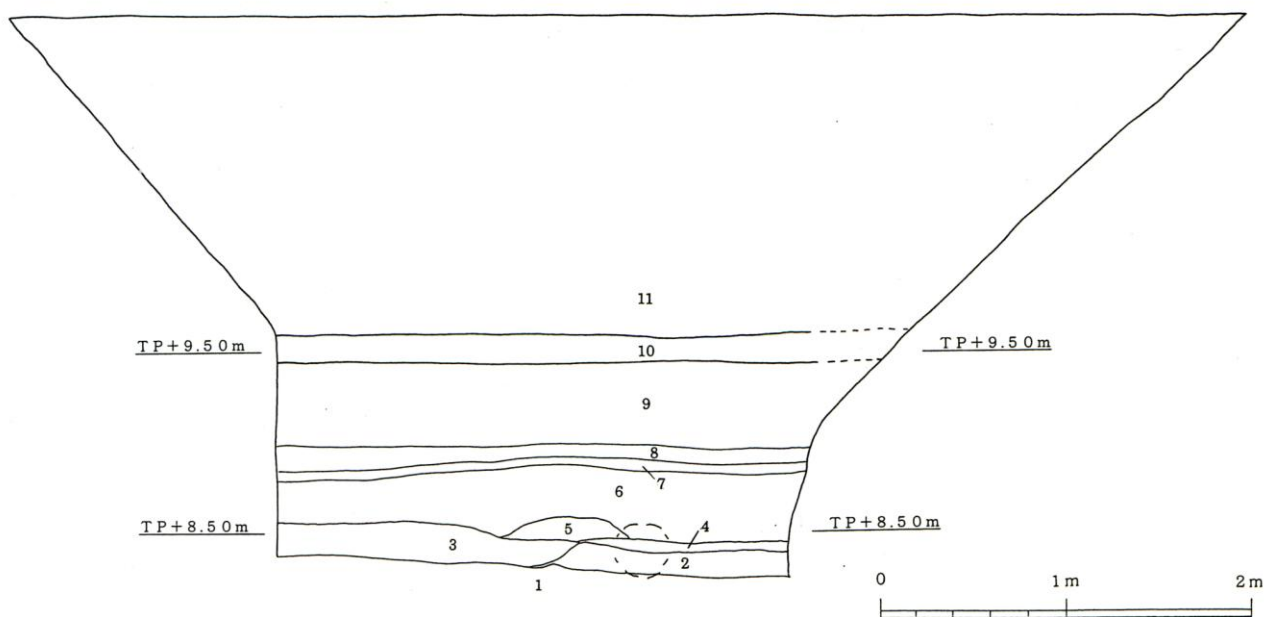


遺構図版 34 3次遺構面平面図



遺構図版 35

No.14 溝及び須恵器甕  
検出状況



- |                      |                      |
|----------------------|----------------------|
| 1 にぶい黄橙色砂質土 10YR 6/3 | 2 明黄褐色砂質土 10YR 6/6   |
| 3 灰黄褐色砂質土 10YR 6/2   | 4 にぶい黄褐色砂質土 10YR 5/4 |
| 5 褐灰色砂質土 10YR 6/1    | 6 にぶい赤褐色砂質土 5YR 5/3  |
| 7 オリーブ黄色砂質土 5Y 6/3   | 8 オリーブ色砂質土 5Y 6/6    |
| 9 灰オリーブ色砂質土 5Y 5/2   | 10 旧耕作土 11 整地層       |

遺構図版 36

17 トレンチ東壁断面図

## 検出された遺物

トレンチ 17 からは、2 次遺構面であるにぶい赤褐色砂質土、3 次遺構面である灰黄褐色砂質土及び No.14 溝より土師器・須恵器の碎片が検出されたが、図化できた遺物は 9 点である。

図 27 は須恵器の口縁部である。2 次遺構面であるにぶい赤褐色砂質土からの検出である。口径 20

cm、残存最大径 21.2 cmを測る。色調は黄橙色で極めて焼成が悪い。粗砂を含むも礫・小礫は含まず胎土は比較的精緻である。口縁部端部は丁寧にナデているが、肥厚なつくりとなっている。頸部に細かいハケ目が施されている。

図 28 は土師器の鉢である。3 次遺構面を切っているNo.14 溝埋土上層からの出土である。口径 12.8 cm、最大径 13.2 cm、器高 5.7 cmを測る。底部は内外面とも指オサエを残し未調整の部分もあるが、器壁は比較的丁寧にナデの調整を施している。器壁は直立し内湾している。胎土は粗砂を多く含み粗雑である。色調は浅黄橙色を呈している。

図 29 から 35 までは 3 次遺構面であるにぶい黄褐色砂質土を人力掘削中に検出された。

図 29 は須恵器坏蓋である。口径 13.2 cm、最大径 13.2 cm、器高 4.8 cm、厚さ 3～6 mmを測る。天井部は比較的高く丸みを持ち、口縁部は外湾を意識しながら直立的になっている。天井部に上部に回転ヘラ削りを比較的しっかり施している。中村編年 I 型式 4 段階相当と思われる。

図 30 も須恵器坏蓋である。口径 12.8 cm、最大径 12.8 cm、器高 4.6 cm、厚さ 4～7 mmを測る。調整は天井部のヘラ削りや丸みなど図 29 と類似するが、口縁部からの立ち上がりが短く、若干小型化及び粗雑化が見られる。中村編年 I 型式 4 段階相当と思われる。

図 31 は須恵器坏蓋である。口径 13.2 cm、最大径 13.2 cm、器高は破片であったので、残存高で 3.9 cm、厚さ 3～6 mmである。図 29 と調整は類似するが、口縁部からの立ち上がりが短く、より内湾が強い。中村編年 I 型式 4 段階相当と思われる。

図 29 から 31 までの須恵器坏蓋を胎土及び焼成から比較する。図 29 及び図 31 が色調は青灰色を呈し焼成が良好である。また胎土は精緻で礫・小礫・粗砂を含まない。それに対し図 30 は、色調が灰白色を呈し焼成も悪い。また胎土に多くの礫、小礫、粗砂を含み明白に異なる。また天井部の回転ヘラ削りの施工も明白に異なる。この差はいわゆる邑村のものと在地のものとの差を示している可能性がある。胎土及び焼成で生産地を特定する事は、難しい側面があるかも知れないが、今後の検討課題となるものと思われる。

図 32 から 34 は須恵器坏身である。図 32 は口径 12.6 cm、最大径 15.8 cm、器高 4.6 cmを測る。立ち上がりは比較的短く内傾して伸びる。受部は断面三角形を帯びるが鋭意ではない。底部に回転ヘラ削りを施すが粗雑である。焼成は黄灰色を呈し極めて不良品として考慮するほど悪い。

図 33 は口径 9.8 cm、最大径 11.6 cm、残存器高 5.3 cmを測る比較的小ぶりの土器である。立ち上がりは比較的短く内傾してのびる。受部は断面三角形を帯び比較的鋭意である。底部に回転ヘラ削りを施している。焼成は青灰色を呈するが良好ではない。

図 34 は口径 12.9 cm最大径 16.2 cmを測る破片である。立ち上がりは比較的短く内傾して伸びる。受部は断面三角形を帯びるが鋭意ではない。焼成は黄灰色を呈し極めて不良品として考慮するほど悪い。

図 32 から 34 の坏身も坏蓋と同年代の様相を呈しているものと思われる。

図 35 は土師器の底部である。底部径は 2.8 cm、残高 3.7 cmを測る。底部は丸底を意識しながらも、窪んだ平坦面を持つ。平底から丸底への最終段階の様相を呈している。



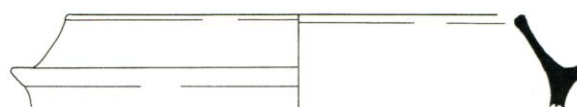
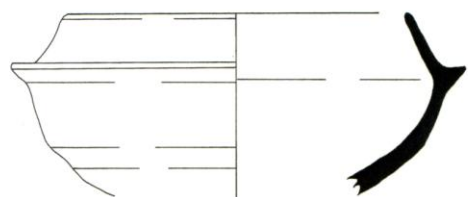
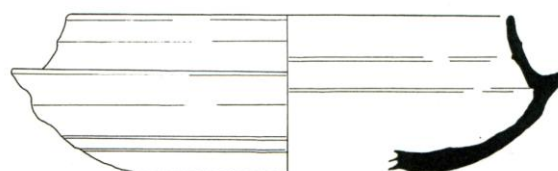
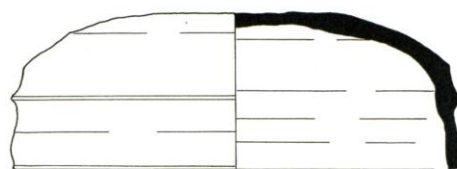
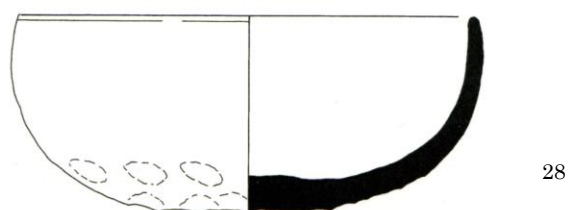
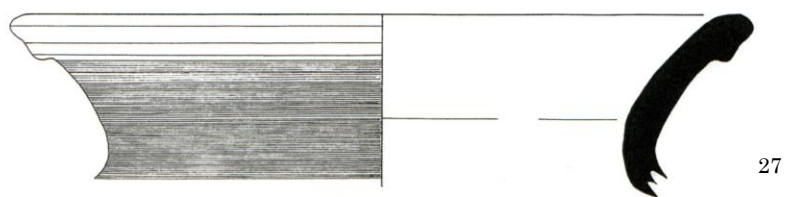


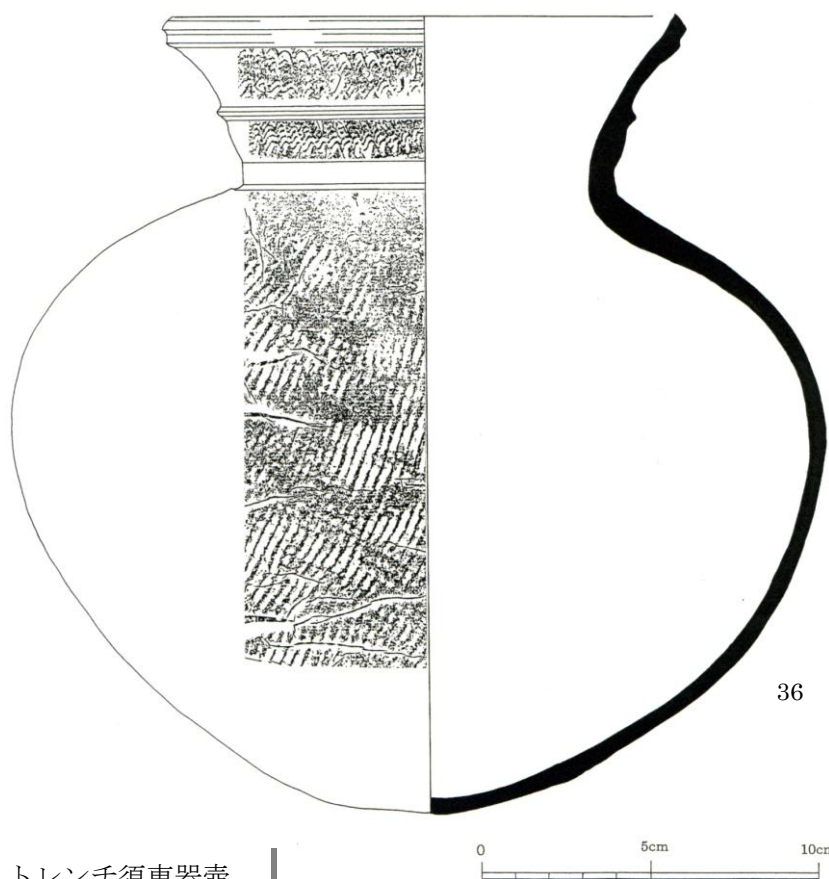
図 36 は須恵器壺である。No.14 溝が屈曲する角から検出された。口縁部を一部欠くがほぼ完形品である。口径 15.2 cm、最大径 24.2 cm、器高 24.4 cm、厚さ 5 mm～1 cm を測る。口縁部外面平坦面は肥厚し鋭意な仕上げではない。口縁部上面は比較的鋭意な三角形を呈する。口縁部下に凹線があるが鋭く削っていない。頸部はほぼ中央に凸線があり上下 2 段に分かれている。上下段とも波状文が施されている。上段は幅 1.1 cm の工具で上下幅と間隔ともに比較的均一に施文している。下段は最大 0.9 mm～1.4 cm 上下幅がある。しかし間隔は一定に上段より細かく施文している。上下段は明確に施文が異なる。中段の凸線は断面三角形を呈するが、削り出しにシャープさがなく、退化した様相を呈する。位置は頸部上側に位置しバランスが悪く配置されている。頸部と胴部の間はナデテの際、接合する痕跡を残しており、未調整のような粗雑さがある。

胴部は外面は 4 cm 程度の工具でのタタキ目を持つ。比較的密に丁寧に叩きしめられている。底部以外は斜め上に向けて叩かれている。内面は丁寧にナデ消されており、この土器の古相の一面を示している。

焼成は青灰白色を呈し、極めて悪いと言える。胎土も礫・小礫・粗砂を含み精緻ではない。トレンチ 17 の須恵器同様に青灰色を呈し胎土が精緻な須恵器が邑村産のものであるならば、今回出土した須恵器壺はいわゆる在地の千里古窯跡群によるものと判断できる可能性がある。

時期は、初期須恵器の要素を持つ面もあるが、口縁部の仕上げの雑さ、凸線の退化、頸部の未調整などを考慮すれば、中村編年 I 型式 3 段階に位置するものと思われる。

なお、口縁部、頸部の観察には柳本照男氏より、焼成及び胎土に関わる観察には藤原学氏より多くのご教示を得た。



遺物図版 8 17 トレンチ須恵器壺

## トレンチ 18

上端で 7.7m×4.9m を測り面積は 37.73 m<sup>2</sup>。下端で 4.2m×3.3m を測り面積は 13.86 m<sup>2</sup>。現状地盤は T P +11.53m。

### 基本層序

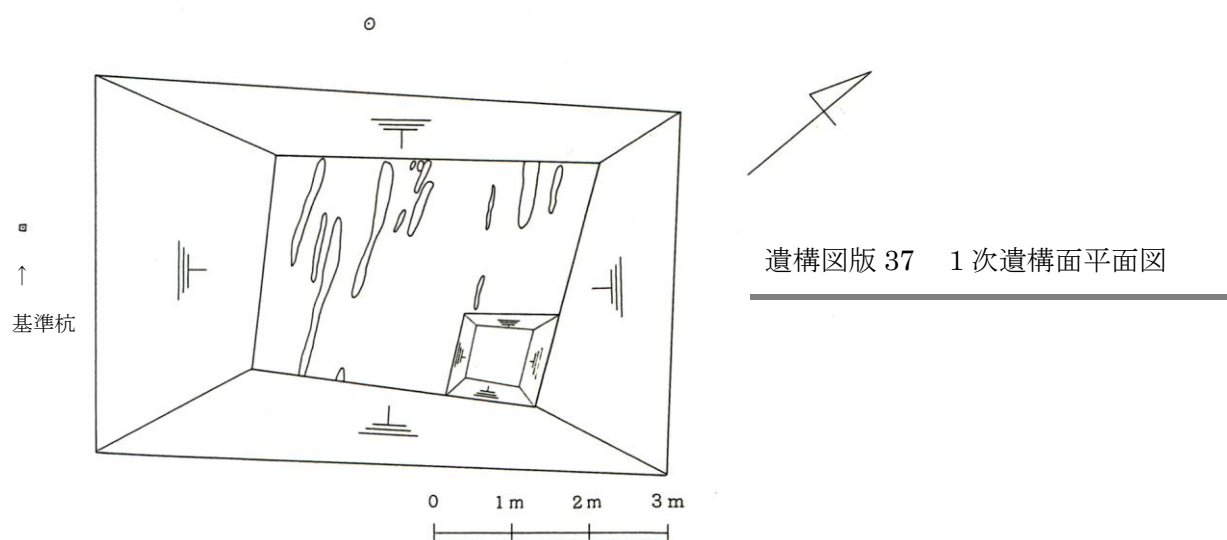
整地層 T P +11.53m から 9.5m で厚さ 203 cm。旧耕作土 T P +9.5m から 9.28m で厚さ 22 cm。灰オリーブ色砂質土 (5 Y 5 / 3) T P +9.28m から 8.74m で厚さ 54 cm。明赤褐色砂質土 (5 Y R 5 / 3) T P +8.74 から 8.54m で厚さ 20 cm。暗赤褐色砂質土 (5 Y R 3 / 4) T P 8.54m から 8.45m で厚さ 9 cm。最終掘削深度は。

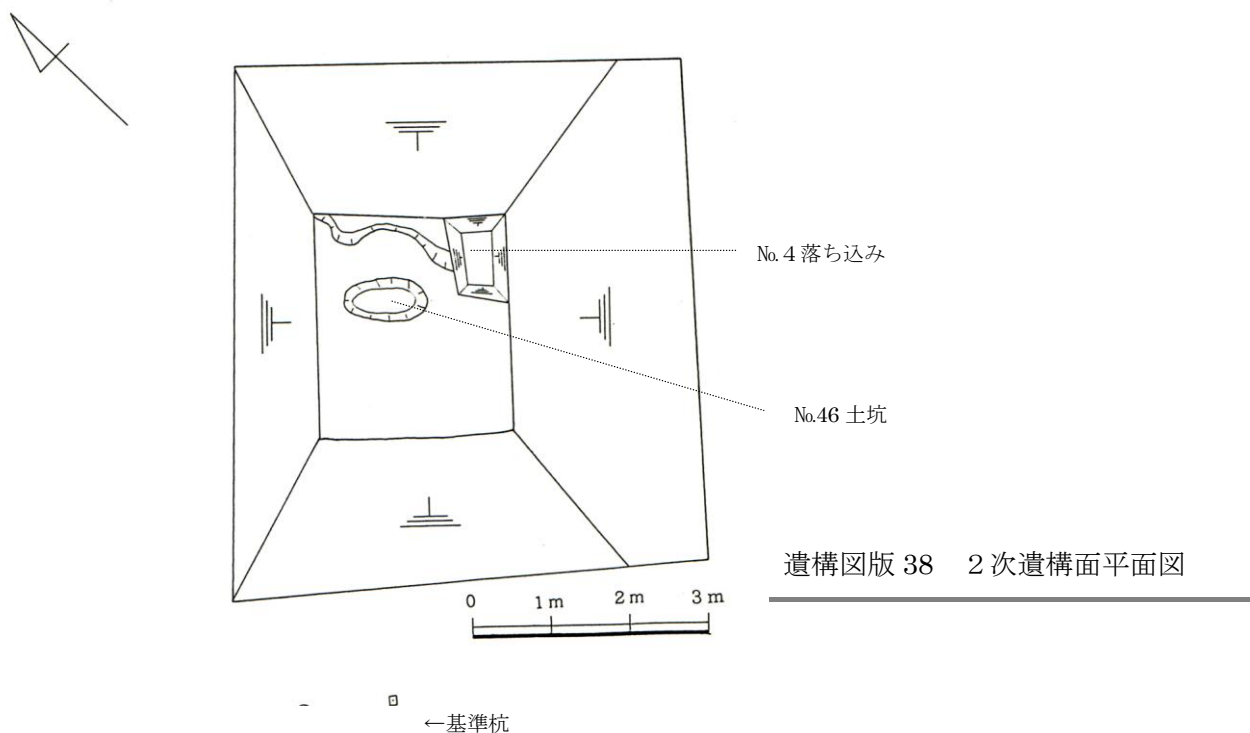
### 検出された遺構

1 次遺構面として、灰オリーブ色砂質土上面で精査を行った。遺構としては鋤溝群、足跡群を検出した。N35° W の傾きで検出された。鋤溝と足跡ともに埋土は旧耕作土で近世段階の耕作に伴うものと思われる。

2 次遺構面として暗赤褐色砂質土上面で精査を行った。結果、土坑 1、落ち込み 1 を検出した。No.4 落ち込みは N60° E のラインで検出された。埋土は褐灰色砂質土である。T P +8.49m からの検出で深さは 21 cm 程度である。上場のラインも歪で溝とは限定できない状況である。トレンチほぼ中央で No.46 土坑を検出した。楕円形で 2.2m×1.1m を測る。T P +8.47m からの検出で深さ 13 cm 程度である。埋土は褐灰色砂質土である

落ち込みと土坑の両方とも、今回の調査区の範囲内では、遺構の性格を特定することはできない状況であった。



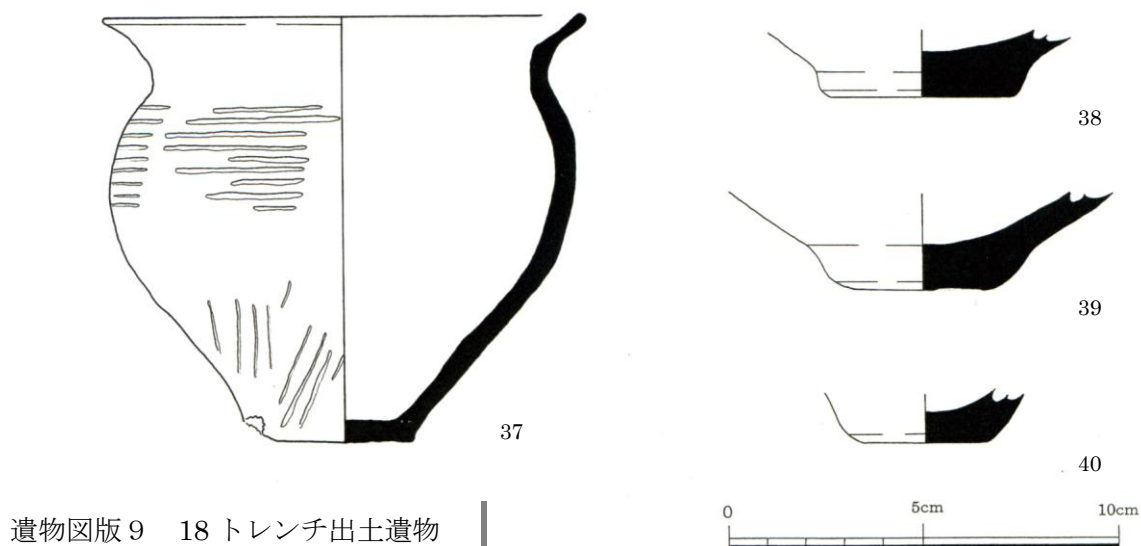


## 検出された遺物

2次遺構面として設定した暗赤褐色砂質土を人力掘削中に、土師器破片及び須恵器破片が検出された。図面化できた遺物は4である。

図 37 は弥生土器小型甕である。口径 12.4 cm、最大径 12.4 cm、器高 11.3 cm、底部径 3.6 cmを測る。胴部上半には並行のタタキ目を施している。下半には斜行タタキと粗雑ながらナデ消している。底部は安定しており、胴部の球形化が顕著である。弥生時代後期の森田編年摂津Ⅵ様式に位置づける。

図 38 から 40 は弥生土器の底部である。それぞれ順に底部径 4.8 cm、3.8 cm、3.6 cmを測る。いずれも底部平坦面の接地は安定している。



## トレンチ 19

上端で6 m×6 mでトレンチを設定した。1次遺構面として、オリーブ灰色砂質土上面で精査を行い鋤溝8を検出した。また2次遺構面として明赤褐色砂質土上面で精査を行い直径10 cm程度の土坑4を検出した。このトレンチも極めて湧水が激しく旧耕作土の上部の整地層が砂層で壁面がオーバーハングして壁面の崩落が始まった。調査掘削及び平面図、断面図作成は極めて困難と判断し調査を終了した。

## トレンチ 20

上端で6.8m×6.2mを測り面積は42.16 m<sup>2</sup>。下端で4.6m×2.2mを測り面積は10.12 m<sup>2</sup>。現状地盤はTP+11.40m。

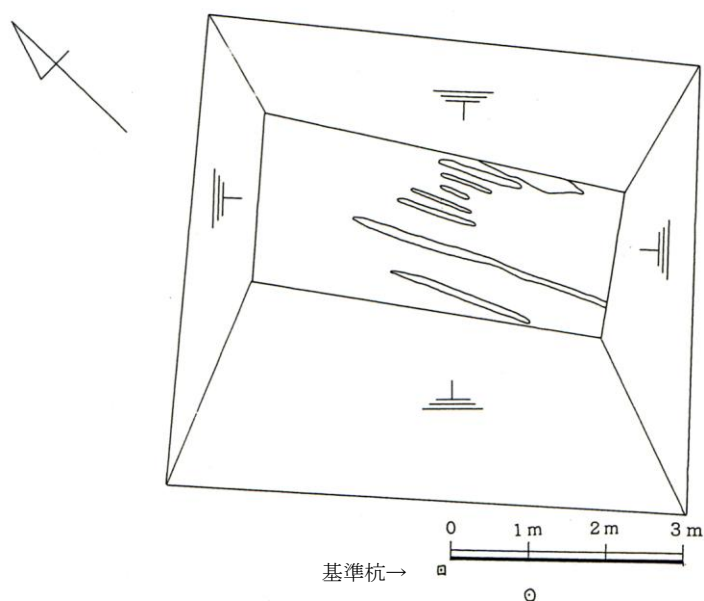
### 基本層序

整地層TP+11.40mから9.11mで厚さ229 cm。旧耕作土TP+9.11mから8.95mで厚さ16 cm。オリーブ灰色砂質土(5Y5/3) TP+8.95mから8.45mで厚さ50 cm。黄褐色粘質土(2.5Y5/3) TP+8.45mから。

### 検出された遺構

1次遺構面としてオリーブ灰色砂質土上面で精査を行い、鋤溝群を検出した。N23°Wの角度を測る。埋土は上層の旧耕作土であるので近世近代の遺構と思われるが、角度が他のトレンチと異なる点は留意する必要がある。

2次遺構面として黄褐色粘質土上面で精査を行ったが遺構は確認されなかった。



遺構図版 39 1次遺構面平面図

## 検出された遺物

---

2次遺構面として設定した黄褐色粘質土を人力掘削中に、土師器破片1点を検出したが、図面化できる土器ではなかった。

## トレンチ 21

---

上端で6 m×6 mでトレンチを設定した。整地層の一部に礫層があり、絶えず水が噴き出す状況であった。雨が降った後など当該地の排水経路になっているのかも知れない。ポンプアップを行っていたが追いつかず、結果人力による調査掘削は極めて困難と判断し調査を終了した。

## トレンチ 22

---

上端で6.4 m×5.9 mを測り面積は37.76 m<sup>2</sup>。下端で2.6 m×2 mを測り面積は5.2 m<sup>2</sup>。現状地盤はT P +11.54 m。

## 基本層序

---

整地層T P +11.54 mから8.54 mで厚さ300 cm。旧耕作土T P +8.54 mから8.41 mで厚さ13 cm。オリーブ灰色砂質土（5 Y 5/3）T P +8.41 mから8.1 mで厚さ31 cm。褐灰色砂質土（10 Y R 6/1）T P +8.1 mから。1次遺構面として灰オリーブ灰色砂質土を検出したが、遺構・遺物は確認されなかった。2次遺構面として褐灰色砂質土上面で湧水が激しく壁面崩落もあったので、トレンチ内の一部で精査を行ったが遺構・遺物は確認されなかった。

## トレンチ 23

---

上端で6 m×6 mでトレンチを設定した。5 mを超えても整地層であった。かつ湧水が激しく底部は泥状になった。トレンチの西半は大規模なコンクリート構造物が検出されており、基礎の関係でかなりの規模で掘削が行われたような状況であった。壁の崩落もあり人力による調査掘削は極めて困難と判断し調査を終了した。



## トレンチ 24

上端で 6.4m×6.2m を測り面積は 39.68 m<sup>2</sup>。下端で 2.8m×2.5m を測り面積は 7.0 m<sup>2</sup>。現状地盤は TP+11.61m。なおこのトレンチのみ周知の埋蔵文化財包蔵地外である。

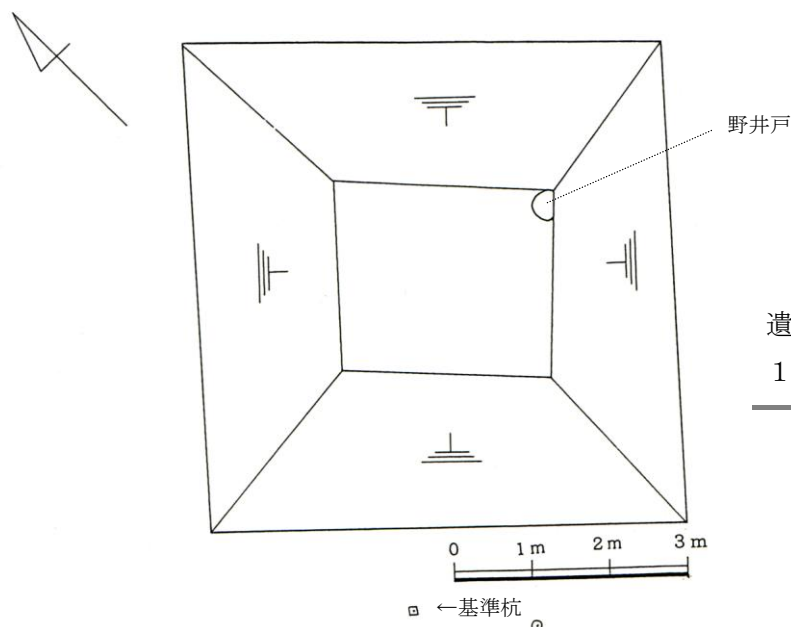
### 基本層序

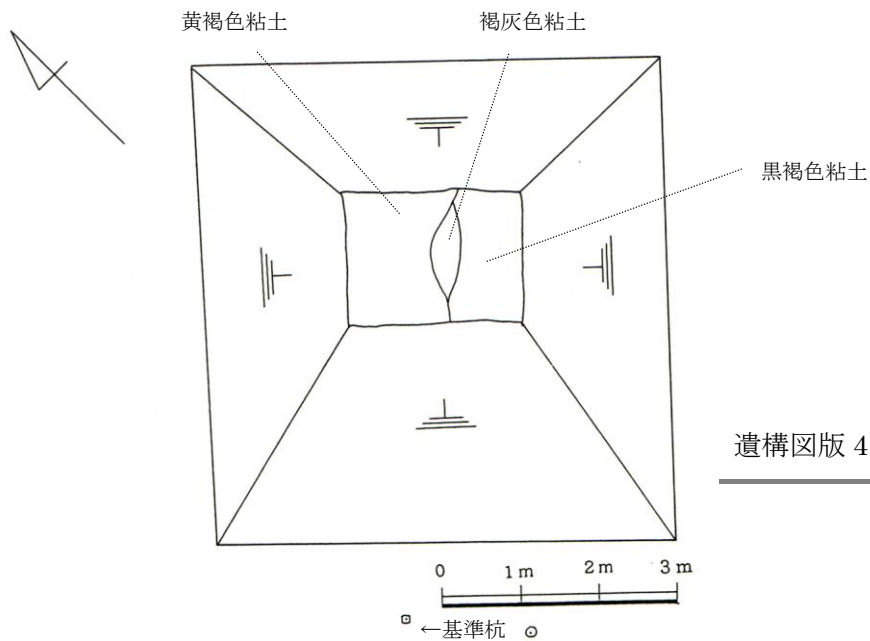
整地層 TP+11.61m から 8.58m で厚さ 303 cm。旧耕作土 TP+8.58m から 8.50m で厚さ 8 cm。オリーブ灰色砂質土 (10Y 5/2) TP+8.35m から 8.14m で厚さ 21 cm。黒褐色粘土 (5 YR 3/1) TP+7.77m から 7.5m で厚さ 27 cm。

### 検出された遺構

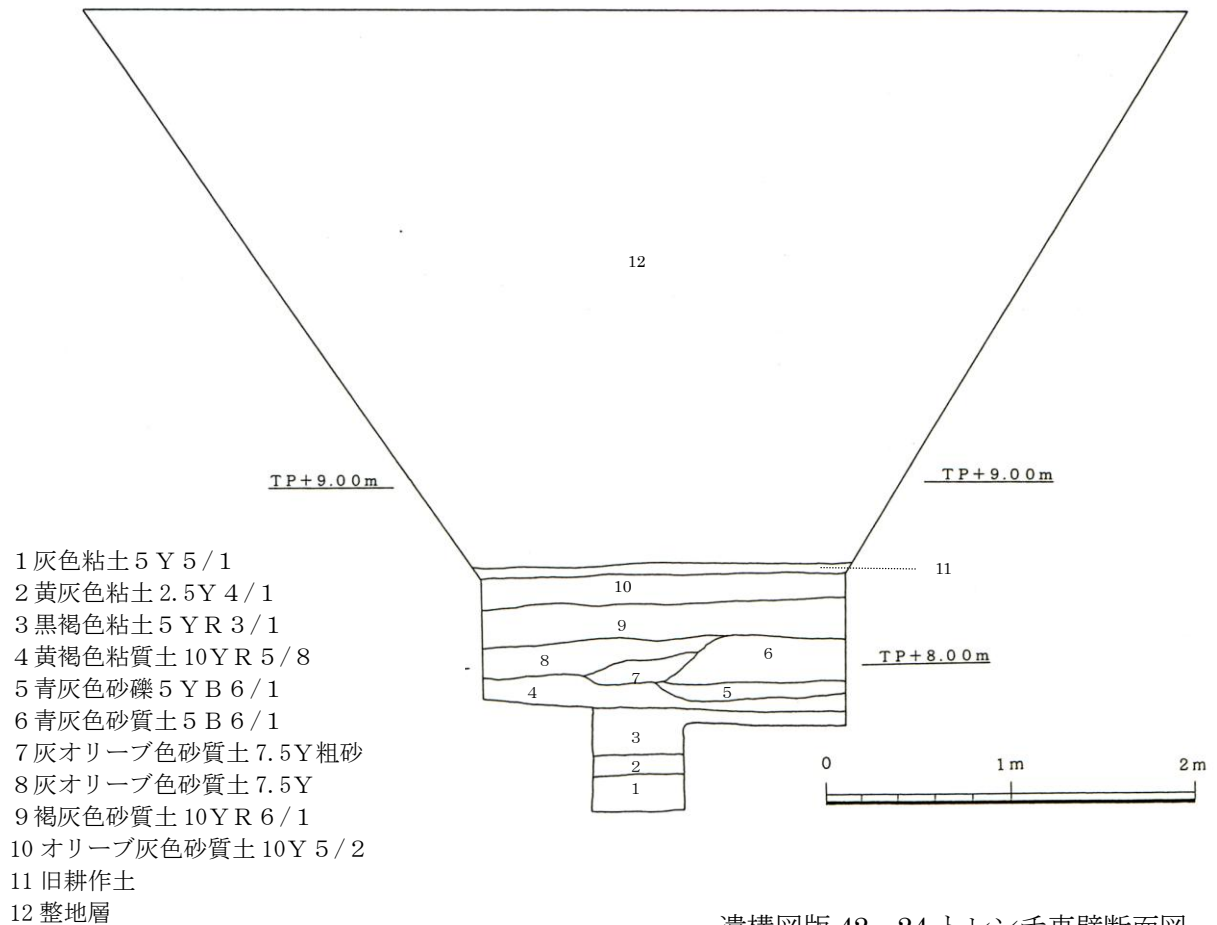
1 次遺構面として、オリーブ灰色砂質土上面で精査を行った。トレンチ北西に土坑 1 を検出した。直径は 48 cm 程度である。上層の旧耕作土をベースに黄色粘土や灰色粘土がブロック状に入る。近世・近代期の野井戸と思われる。

1 次遺構面の下層は褐灰色砂質土、灰オリーブ砂質土、青灰色砂礫など礫や小礫を含む堆積が互層に入り、その下の黒褐色粘土層を 2 次遺構面として精査し遺構検出を行った。この黒褐色粘土は極めて堅緻で粗砂、砂粒、礫を含まない。北半は土質は同一ながら黄褐色を呈し、トレンチ中央に褐色の粘土が帯状に入る。この面は TP+7.77m で現状地盤から 384 cm に位置する。地山相当の千里丘陵を形成する粘土層 (2 次堆積物の可能性を考慮する必要はある) を比較的良好に検出できたと思われる。さらに下層について一部トレンチ掘削を行った。下層も堅緻な黄灰色及び灰色の粘土層であった。今回のトレンチ調査では、これ以上の所見を報告できないが、全面発掘を実施した際は、より詳細な千里丘陵の堆積物分析が重要になってくるであろう。





遺構図版 41 2次遺構面平面図



遺構図版 42 24 トレンチ東壁断面図

## 検出された遺物

1次遺構面として設定したオリーブ灰色砂質土より土師器破片が出土した。褐灰色砂質土より須恵器破片1点が出土した。いずれも破片で図面化できなかった。

## トレンチ 25

上端で 8.5m×4.1m を測り面積は 34.85 m<sup>2</sup>。下端で 3.9m×1.6m を測り面積は 6.24 m<sup>2</sup>。現状地盤は T P +10.1m。トレンチ南側が大きく攪乱されており上端面積は大きいが下端面積は限られた範囲での調査となった。

### 基本層序

整地層 T P +10.1m から 8.86m で厚さ 124 cm。ただし一番深いレベルで T P +7.3m で 280 cm。旧耕作土 T P +8.86m から 8.62m で厚さ 24 cm。浅黄色砂質土 (5 Y 7 / 4) T P +8.62m から 8.43m で厚さ 19 cm。褐灰色砂質土 (10 Y R 6 / 1) T P +8.43m から 7.98m で厚さ 45 cm。黄褐色粘土 (10 Y R 5 / 8) T P +7.98m から確認できた範囲で厚さ 10 cm 程度。

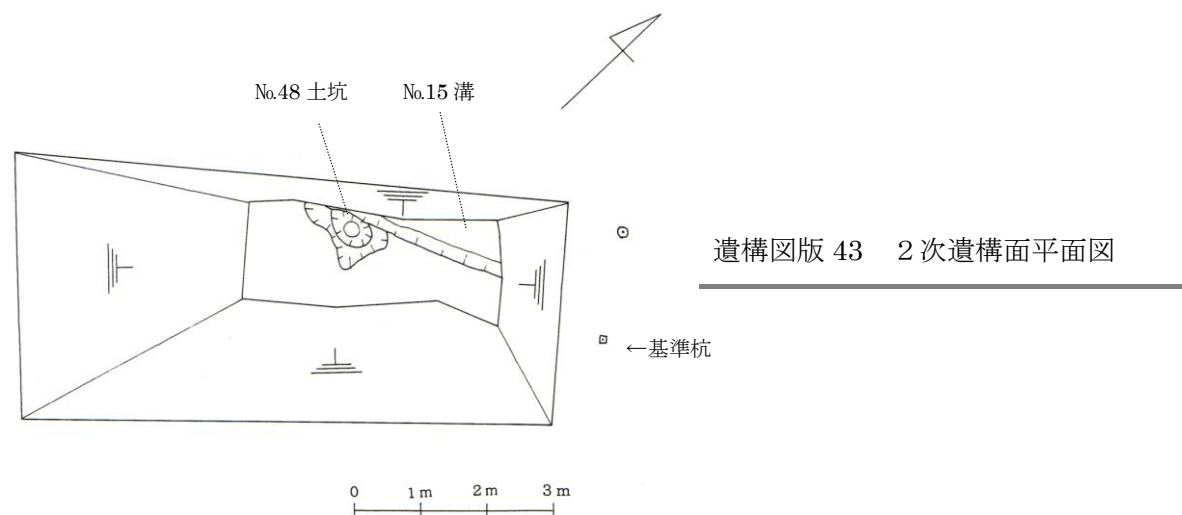
### 検出された遺構

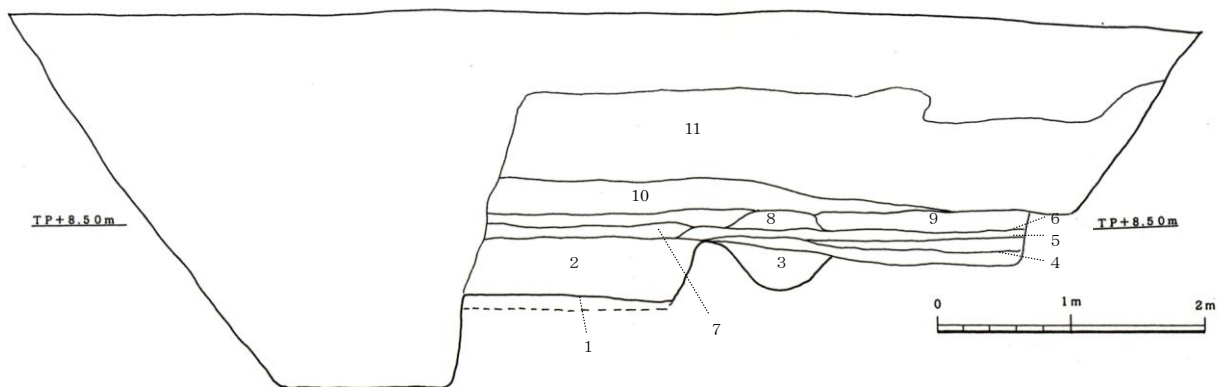
1 次遺構面として浅黄色砂質土上面で精査を行った。結果遺構の検出はなかった。しかし当該地では旧耕作土の直下はほぼオリーブ色堆積で、他のトレンチでは見られない堆積であった。

2 次遺構面として褐灰色砂質土上面で精査を行った。この面からは溝 1、土坑 1 を検出した。No. 15 溝はトレンチ北東隅から南西に向けて N67° E の角度で北壁に切られる形で検出された。直線的で上場で T P +8.37m からの検出で深さは 17 cm でなだらかな掘肩を持つ。北側の肩は調査区外になり南肩のみの検出である。埋土は灰白色砂礫及び灰白色砂礫である。

No.48 土坑も北壁に切られる形で検出された。T P +8.36m からの検出で深さ 31 cm を測り、比較的しっかりした掘肩を持つ。上部ではゆるやかに傾斜し、中段ぐらいからほぼ直下に掘削されている。No.15 溝とは同一面からの検出であるが、平面及び北壁の断面から、No.15 溝に切られた形で検出された。土坑の性格は不明であるが、溝との時期差があることは確実であろう。

3 次面として黄褐色粘土層で精査を行ったが遺構は検出されなかった。礫や小礫を含まず、極めて堅緻であり、地山相当堆積と思われる。





- |                      |                       |
|----------------------|-----------------------|
| 1 黄褐色粘土 10Y R 5 / 8  | 2 褐灰色砂質土 10Y R 6 / 1  |
| 3 灰オリーブ色砂 7.5Y 5 / 2 | 4 灰白色砂礫 7.5Y 7 / 1    |
| 5 オリーブ黄色砂礫 5Y 6 / 3  | 6 オリーブ黄色砂質土 5Y 6 / 3  |
| 7 浅黄色粘質土 5Y 7 / 3    | 8 オリーブ灰色砂質土 10Y 6 / 2 |
| 9 浅黄色砂質土 5Y 7 / 4    | 10 旧耕作土               |
|                      | 11 整地層                |

遺構図版 44

25 トレンチ西壁断面図

## トレンチ 26

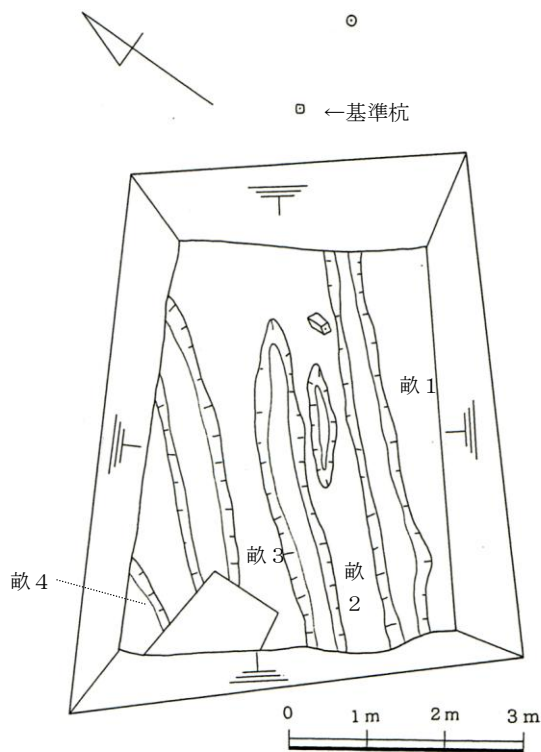
上端で 6.6m×6mを測り面積は 39.6 m<sup>2</sup>。下端で 5 m×4.5mを測り面積は 22.5 m<sup>2</sup>。現状地盤は T P +10.55m。

### 基本層序

整地層 T P +10.55mから 9.46mで厚さ 109 cm。旧耕作土 T P +9.46mから 9.3mで厚さ 16 cm。オリーブ灰色砂質土 (10Y 5 / 2) T P +9.3mから 9.19mで厚さ 11 cm。明赤褐色砂質土 (5 Y R 5 / 3) T P +9.19mから 8.72mで厚さ 47 cm。褐灰色砂質土 (10Y R 6 / 1) T P +8.72mから。

### 検出された遺構

重機で機械掘削を行っていた際に、近世・近代の旧耕作土が帯状に入るのが確認された。これまで断面では、旧耕作土の起伏は確認されていたが、このトレンチでは帯状の起伏を確認する意味で精査を行った。近世・近代の堆積であるが、操車場前の景観の復元の意味もあり、1次遺構面として設定した。畝はN45° Eの角度を持って並ぶ。中央の2条は壁で切れることなく平坦面が明確に残る。畝が形成する平坦面は概ね 75 cmから 50 cmである。畝と畝の間の溝はほぼ均一に 50 cmを測る。畝の落ち込みは、平坦面を大きく確保するためもあり、比較的急に直に落ちる。上場で T P +9.48 m、下場で T P +9.35mで 13 cm程度の隆起となる。またトレンチ北側に石柱が検出された。斜めに突き刺さっているが、当時は直立していたものと思われる。東面に「I」のような記号が掘られ赤いペンキで着色されていた。今回は比較的良好な状態でおそらく近代の旧耕作土を検出する事ができた。結果、当該地の土地利用は水田ではなく畝耕作であることが窺える。

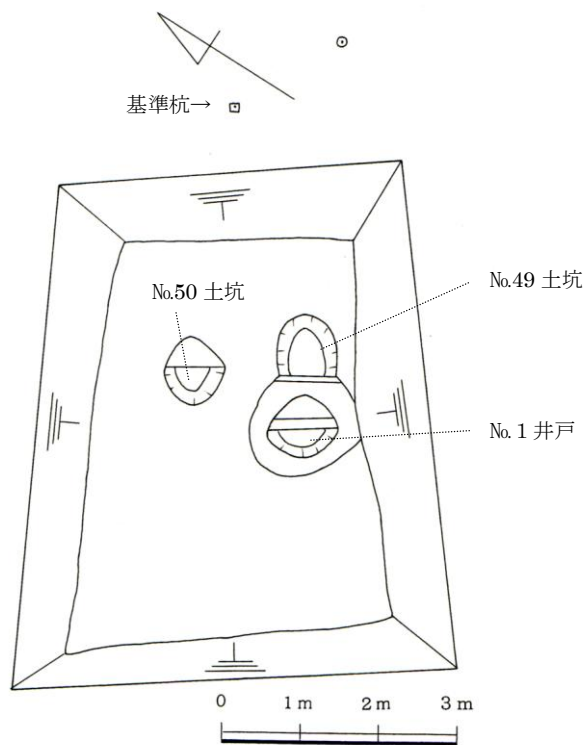


遺構図版 45 1次遺構面平面図

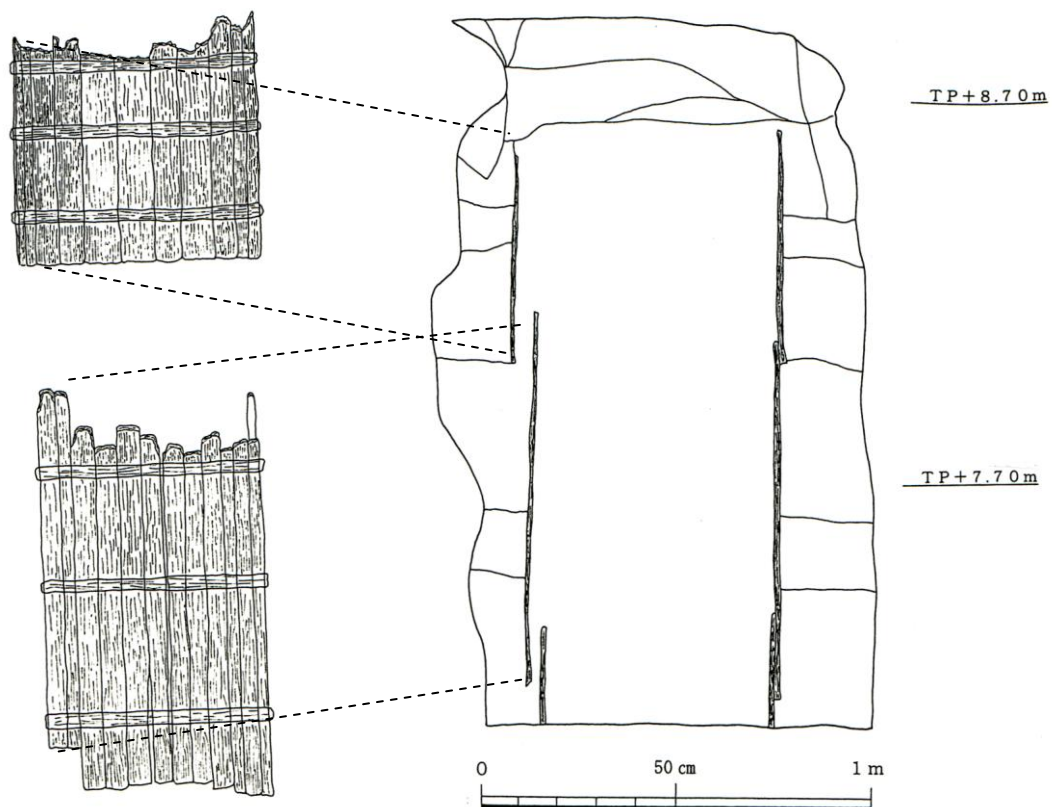
2次遺構面として、オリブ灰色砂質土上面で精査を行った。北西隅で土坑1、鋤溝13を検出した。土坑は推定直径1.8m程度で埋土はゆるい黄色粘質土である。素掘りの野井戸と思われる。鋤溝らしき用途不明の溝はほぼ東西南北方位である。上層は畠が想定できる堆積で上層からの踏み込みとは思えない。また角度も通常、中世段階では正方位はとらなく、今回の調査範囲では、不明な点が残る。

3次遺構面として、明赤褐色砂質土上面で精査を行った。結果明確な井戸1、土坑2を検出した。

No.1井戸の掘削はトレンチ南側のみ半掘した。No.1井戸検出の上場はTP+8.92mからの検出で、TP+8.65mまでの27cmは2次遺構面を構成するオリブ灰色砂質土が堆積していた。この堆積を取り除くと直径68cmの木桶を3個用い井戸枠として転用している状況が確認された。明確に確認できたのは、2段までであった。1段目は桶の直径70cm、2段目が65cm、3段目が60cmで入れ子状に重複して重ねていた。1段目の上端は一定ではないが、下端は直線に加工されており長さ65cmから50cmの木材を利用している。半掘の南側で9本の木材を3段で竹で編んだもので固定されていた。2段目の上端は一定ではないが、下端はほぼ直線に加工されており長さ90cmの木材を利用している。この段でも10本の木材を3つの竹で編んだもので固定されていた。なお3段目は2段目の下に重なっている状況の確認及び上端部の検出のみであった。今回の調査ではトレンチ掘で排水が難しく、一雨降るとトレンチが水没する状況が多々あった。このトレンチも水没し、壁面の崩落が始まったので、3段目の検出及び図化については断念せざるを得なかった。木桶を転用した井戸は室町時代以降のものと思われる。

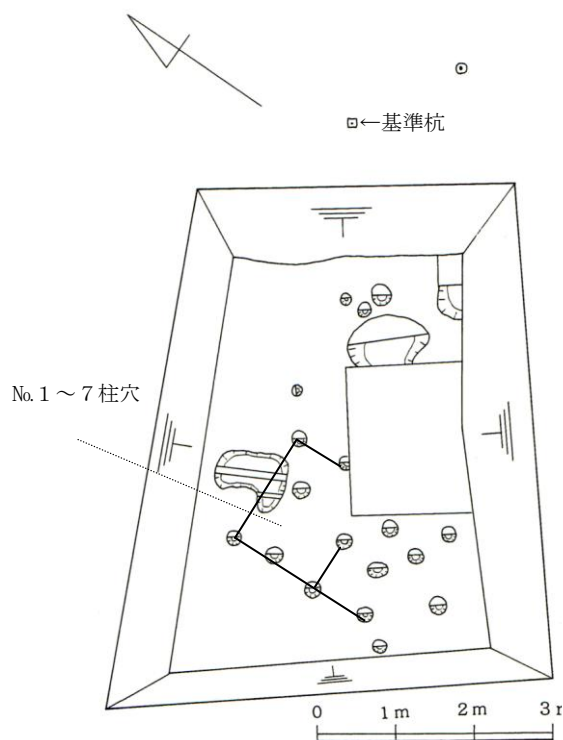


遺構図版 46 3次遺構面平面図



遺構図版 47 No. 1 井戸検出状況





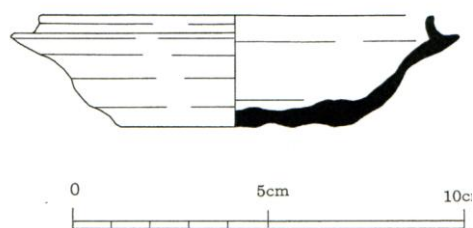
遺構図版 48 4次遺構面平面図

4次遺構面として、褐灰色砂質土上面で精査を行った。この面では比較的多数の土坑 21 が検出された。そのうち 7 個は規則的に配置されており柱穴として遺構番号を付けた。

この 7 つの柱穴のうち 4 つは南北にはほぼ南北に配置されている。柱間は中心から中心で 75 cm を測る。東西の並びについては北端は 1 m 50 cm 離れた位置の柱穴が直角に交わる。柱間の中心の位置に別の形状の土坑が位置しており、削平された可能性が高い。また想定建物の東側は 2 つの柱穴が並ぶ。想定される延長に 3 次遺構面の井戸を掘削するために残しておいたあぜの下に位置するため確認する事はできなかった。これらの状況を復元及び推定すると、今回検出された掘立柱建物は南北に 3 間、東西に 2 間の規模となる。柱穴の埋土は暗褐色砂質土で、上場は T P + 8.77 m からの検出で深さは 11 cm 程度が基準となり、下場には若干の高低差がある。

## 検出された遺物

3 次遺構面として、設定した明赤褐色砂質土最下層より須恵器坏身が検出された。図 41 は須恵器坏身である。口径 10 cm、最大径 11.6 cm、器高 3 cm を測る小型の土器である。受部は短く直立に立ち上がる。口縁部端面はつまみ上げている。体部上側はナデられているが、下部及び底部はヘラ切り後未調整である。法量の小型化や調整の粗雑さから中村編年Ⅱ型式 5 から 6 段階と位置づける。



遺物図版 10 26 トレンチ出土遺物

41

## トレンチ 27

---

上端で 9.2m×6.9m を測り面積は 63.48 m<sup>2</sup>。下端で 7.0m×4.0m を測り面積は 28 m<sup>2</sup>。現状地盤は T P +10.54m。このトレンチは西側に大規模なコンクリート建造物があった。またこのコンクリート基礎に伴う攪乱もあった。よって当初位置より東側にずらして調査区を設定した。実際調査可能な範囲は 2.5m×3.75m の範囲であった。

### 基本層序

---

整地層 T P +10.54m から 9.72m で厚さ 82 cm。旧耕作土 T P +9.72m から 9.48m で厚さ 24 cm。オリーブ灰色砂質土 (2.5GY 5/1) T P +9.48m から 9.29m で厚さ 19 cm。明赤褐色砂質土 (5YR 5/6) T P +9.29m から 9.13m で厚さ 16 cm。暗赤褐色砂質土 (5YR 3/4) T P +9.13m から 8.95m で厚さ 18 cm。褐灰色砂質土 (10YR 5/1) T P +8.95m から 8.78m で厚さ 17 cm。

### 検出された遺構

---

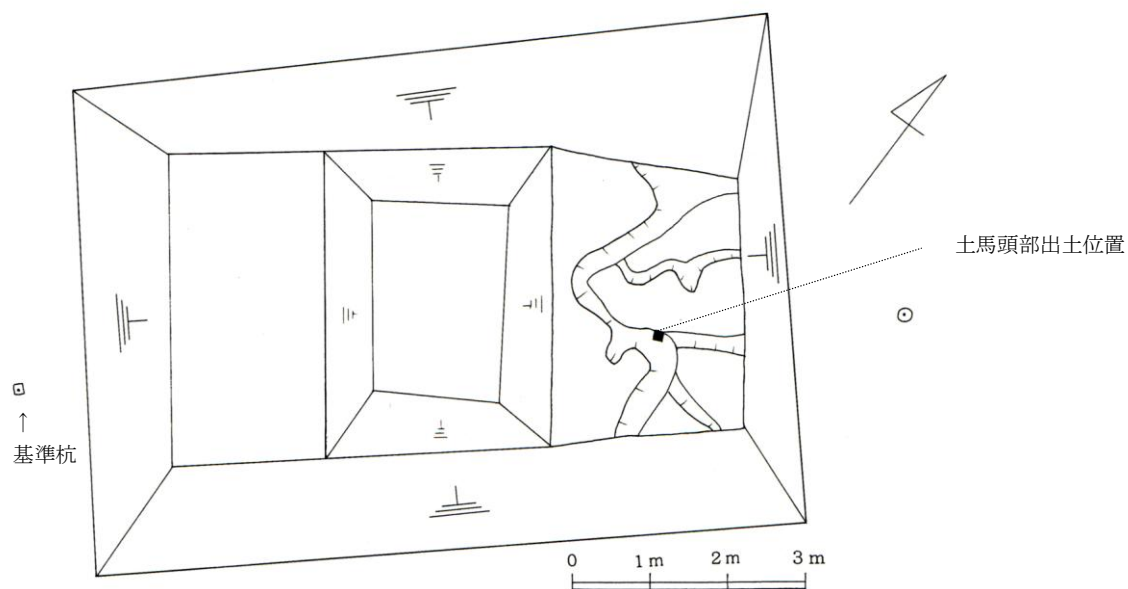
1 次遺構面としてオリーブ灰色砂質土上面で精査を行ったが、遺構は検出されなかった。

2 次遺構面として明赤褐色砂質土上面で精査を行った。この面では北西と南側が高く隆起している状況であった。北西で T P +9.2m、南で T P +9.29m である。この高さを上場として、複雑な隆起は見られるものの、概ね T P +9.0m が下場となる。高低差は 20 cm から 29 cm を測る。この隆起の T P +9.08m のレベルから、定型化する以前の古相を呈する土馬の頭部が検出された。詳細は遺物編で報告するが、小笠原好彦氏のご教示から、7 世紀代に位置づけされる土馬である。通常土馬は遺物洗浄時など内業調査中の発見が多いと見受けられる。今回の調査では、遺構内ではなく自然の起伏ではあるが、原位置を保って検出できた事は大きな成果であった。

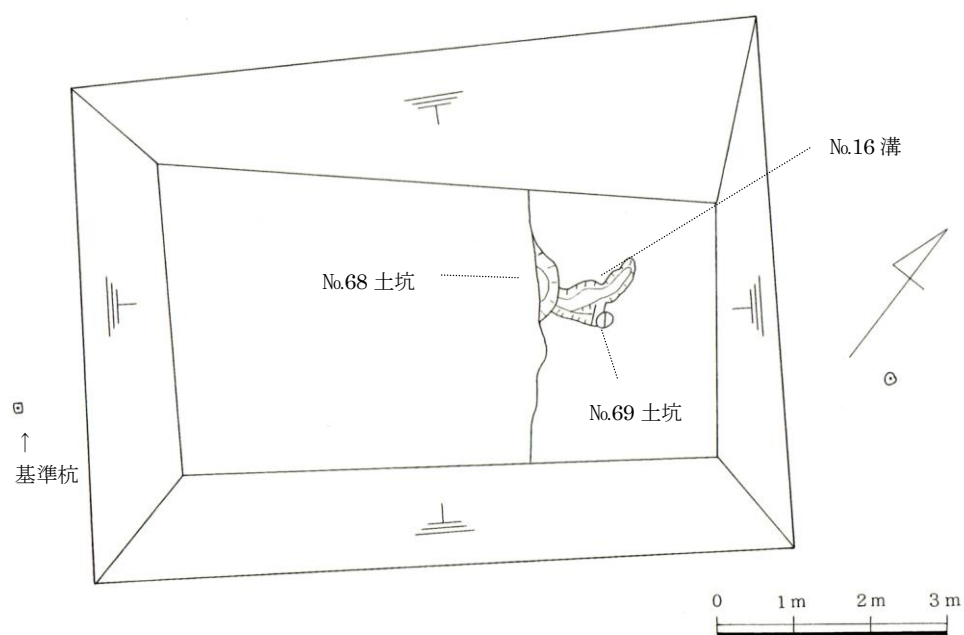
3 次遺構面として暗赤褐色砂質土上面で精査を行った。土坑 2、溝 1 を検出した。No.68 土坑は西側の攪乱で削平されており、一部のみの検出であった。しかし掘肩もしっかりしており、推定直径も 1 m 程度ある。上場は T P +9.03m で深さは 33 cm であった。埋土は暗青灰色砂質土である。No.69 土坑は直径 25 cm 程度の小型のものである。この 2 つの土坑に切られる形で No.16 溝が検出された西からゆるやかに屈曲し北へ 1 m 20 cm 程度が残存していた。堀肩は比較的しっかりしており、ほぼ直に落ちる。上場で T P +9.03m で深さは 21 cm である。埋土は灰黄褐色砂質土である。この遺構面上面から上層の同一個体と思われる土馬の体部が T P +9.06m のレベルから検出された。頭部同様遺構内からの検出ではなかった。

4 次遺構面として、褐灰色砂質土上面で精査を行った。結果、井戸 1 土坑 1 を検出した。No.2 井戸と想定される土坑は、トレンチ内北壁にかかり全容は検出できなかったが、ほぼ形状が確認できる状況であった。最大径は 170 cm を測る。東西南北に十字にあぜを残し 4 分割して遺構内を掘削した。高さは概ね T P +8.8m から 7.5m で深さは 130 cm 程度となる。埋土及び形状の詳細は、東壁

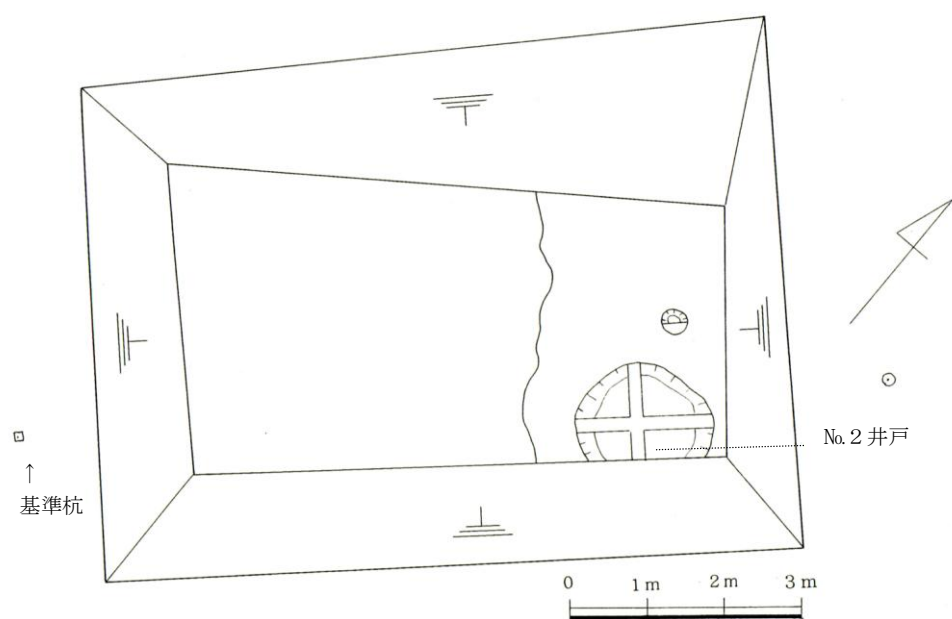
断面図にて報告する。このNo.2井戸からは、内面を刷り消した須恵器甕胴部や布留式期の土師器の破片が一括資料として良好に検出された。詳細は遺物編にて報告する。



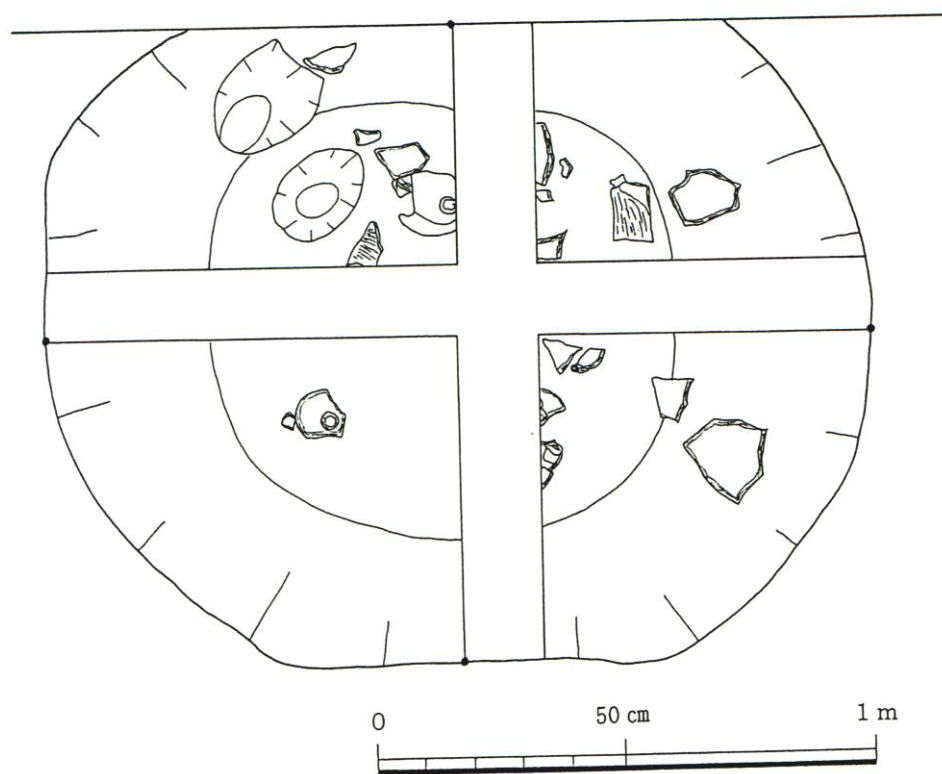
遺構図版 49 2次遺構面平面図



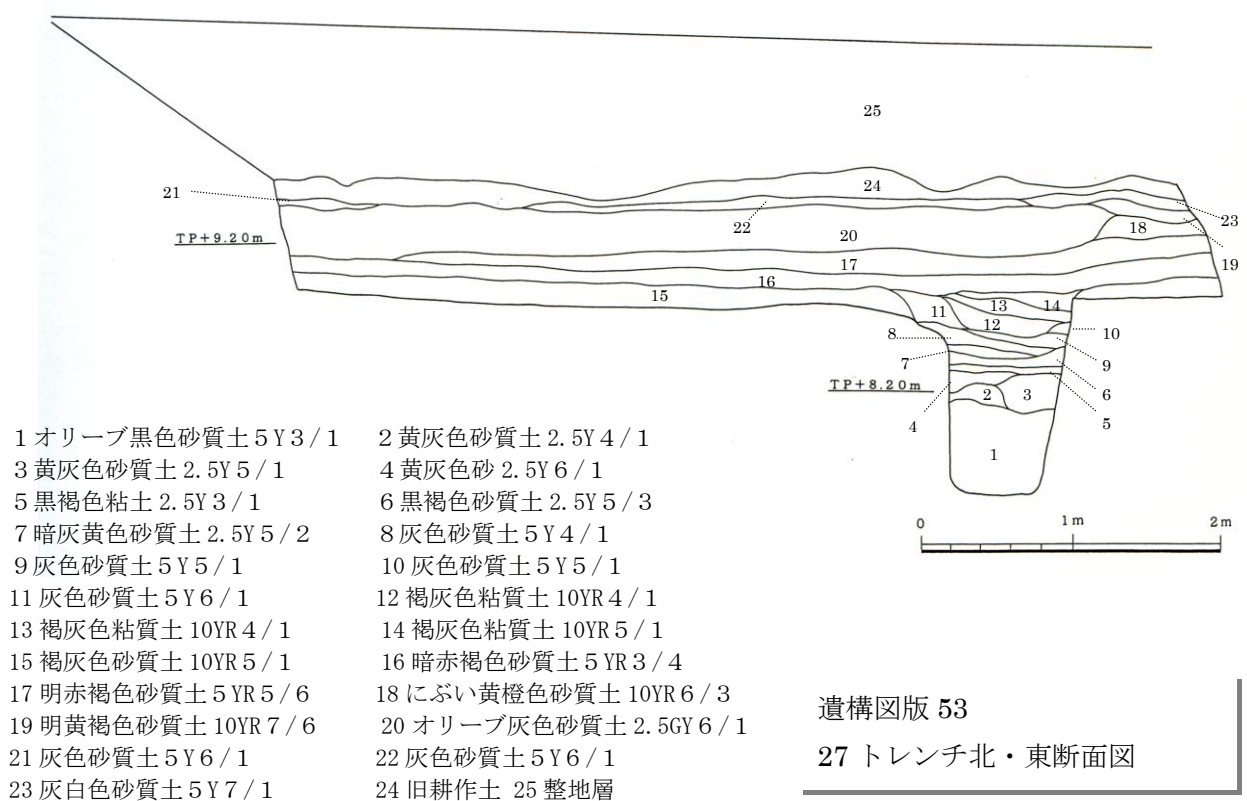
遺構図版 50 3次遺構面平面図



遺構図版 51 4 次遺構面平面図



遺構図版 52 No. 2 井戸平面図



## 検出された遺物

オリーブ灰色砂質土、明赤褐色砂質土、暗赤褐色砂質土、褐灰色砂質土の各層より、比較的多量の遺物が出土した。

オリーブ灰色砂質土からは図化できる遺物はなかったが、明赤褐色砂質土出土遺物として 10 点、暗赤褐色砂質土出土遺物として 3 点、褐灰色砂質土出土遺物として 1 点、No.2 井戸内出土遺物として 5 点を図化した。

図 42 から図 51 は明赤褐色砂質土からの出土である。

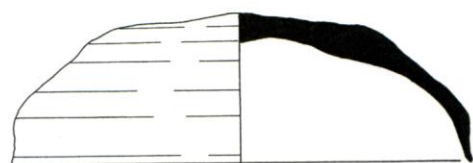
図 42 は須恵器の坏蓋である。口径及び最大径は 12.2 cm、器高は 4 cm を測る。外面は口縁部にはナデ調整、胴部にはヘラ削りを施している。上部はヘラ切り後未調整である。色調は灰白色を呈し焼成は悪い。胎土は礫は含まないが、小礫や粗砂を含む。天井部の丸みから中村編年Ⅱ型式 6 段階に位置づける。

図 43 は須恵器の坏身である。口径及び最大径は 13.8 cm、底部径は 9.2 cm、器高は 3.5 cm を測る。口縁部は丁寧にナデ調整が施されているが、底部のヘラ削りは明瞭でない。また底部もヘラ切り後未調整である。内面も凹凸があり粗雑さが強い。色白は灰白色ながら極めて、白色化が強く、焼成は悪い。胎土は礫、小礫、粗砂を多く含む。器壁の立ち上がりは外傾し、中村編年Ⅲ型式ⅠからⅡ段階の様相を呈する。

図 44 は須恵器の底部破片である。底部径 10.4 cm、残存最大径 13.6 cm、残存高 5 cm を測る。器壁は直立ではなく外傾する。底部は丸みを持ち接地面も少ない。内面は灰白色ながら、青色化が比較強い。外面は黄橙色を呈して、極めて焼成は悪い。器種の特定は困難だが、器径から坏身の可能性が高い。

図 45 は須恵器の口縁部である。破片であるので推定の要素があるが、最大径 18.8 cm、口径 18.2 cm を測る。残存高は 5.5 cm である。口縁部の形状は、丸みを帯び、端部の平坦面を強く意識している。上部も平坦面を有している。外面は平坦面下部に削ったような痕跡を残すが明瞭でない。頸部に若干の胴部への痕跡を残す。内面にも平坦面をもち比較的鋭意な凹線を有する。色調は青灰色で焼成は良好である。胎土は内面に多量の礫を含み、外面も小礫が多く精緻ではない。

図 46 は須恵器の口縁部である。破片であるので推定の要素があるが、最大径 28.8 cm、口径 27.4 cm を測る。残存高は 4.5 cm である。口縁部の形状は三角に突出し凹面を有する。上部及び突出面は鋭意な仕上げである。上部のナデ調整及び下部の削り込みもしっかりと仕上げられている。色調は青灰色ながら黒色に近く焼成は極めて良好である。胎土も粗砂を含むが礫や小礫を含まず極めて精緻である。



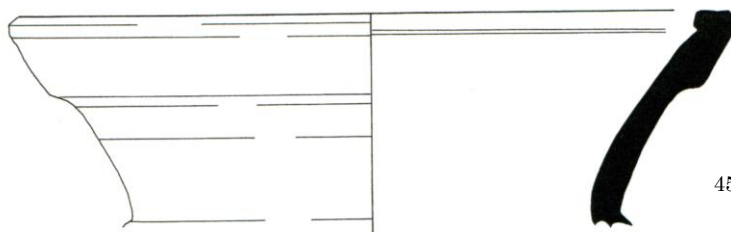
42



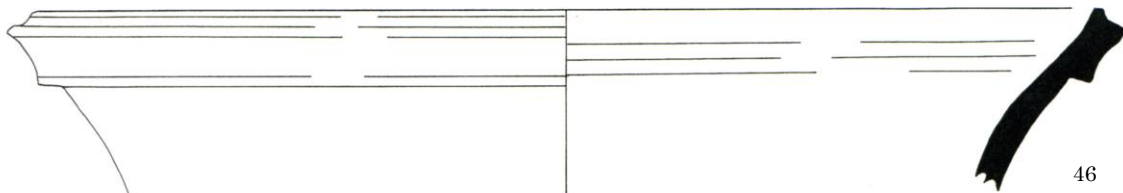
43



44



45



46





図 47 は土師器の高坏である。口径 16.2 cm、最大径 16.6 cm、残存高 11.4 cm を測る。坏部外面にはナデ調整のみでヘラ磨きは見られない。内外面とも口縁部は比較的丁寧にナデ調整が施されている。外面脚部との接合の際の突線が巡り有段のように見えるが、ナデ消していないだけで加飾のものではない。内面にはいわゆる金属器を模倣した暗文は見られずナデ調整のみである。脚部外面にはヘラ磨きは施されていないが、上下にナデ調整が施されており若干の面取りを持つ。脚部内面には絞り込んだ痕跡を残す。色調は赤褐色で焼成は良好で極めて堅緻である。胎土も礫・小礫を含まず、極めて精緻である。色調や胎土からいわゆる都城の土器の特徴を示している。この土器は難波宮下層遺跡出土の高坏と類似しており、都城の土器集成飛鳥Ⅱ型式段階のものと思われる。

図 48 は土師器高坏の脚部が想定される破片である。上から下へヘラ削りを行い、比較的しっかりと面取りを施している。中実でなく穴があいている状態で高坏脚部とは特定できない。上から見ると二重になっており芯となる外側に粘土を巻きつけている形状である。また外面と上部は色調が異なり、表面もざらついている。これらの状況から坏身部が剥離したものかも知れない。色調は赤褐色で焼成は良好で堅緻である。胎土も礫・小礫を含むが比較的精緻である。



## 遺物図版 12 27 トレンチ出土遺物（2）

図 49 は土師質の土馬の頭部、図 50 は土馬の胴部、図 51 は土馬の脚部が想定される遺物である。

図 49 の頭部は鼻先からたてがみまで最大 8.6 cm 程度、最頂部から残存首部まで 6.9 cm 程度の破片である。横面に竹管で押し付けたような目を両面にもつ。正面に工具で突いたような鼻をもつ。口は鋭利な工具でシャープに削られている。背面にはたてがみを捻り出している。たてがみの最頂上部は三角形に突出させている。平面に設置した場合口が左側を向く面は頸部の指オサエや全面にナデ調整が残るが比較的丁寧にナデ消されている。目の後ろ側に馬具を表現したものと思われる粘土塊が残存する。面繫であると思われる。右を向く面も指オサエやナデ調整が残るが丁寧な仕上げが行われている。この面にも馬具を表現したものと思われる粘土塊が残存する。位置が目と鼻の間であるので鼻革であろうか。色調は黄灰色で焼成は良好である。

図 50 の胴部は残存する胴幅 6 cm、残存高は 11 cm を測る。頭部を右側に設置した場合左半が大きく欠損している。左半には脚部が残るが右半には残らない。上から観察すると、粘土紐による馬具

の表現が残る。一部剥離しているが、胴部を左右及び、斜交いに粘土紐を張り付けている。かなり磨滅は受けているが、粘土の高まりの上に6個の竹管で突いたような表現が残る。尻繫を表現したものであろうか。後ろから見ると穿孔が施されている。欠損している部分の観察からも焼成前の穿孔が確認できる。製作時に木芯に粘土を挟み込んだ可能性もあるが、土馬という祭祀性がある遺物から、ここでは魂を抜くなど人為的に表現しているものと判断する。色調は頭部より黄色化が強いがほぼ同一の黄灰色である。焼成及び胎土も頭部に近い様相を呈する。図 49 頭部はT P +9.08m、胴部はT P +9.06mからの検出で原位置を保って検出されている。出土堆積及び検出高からも同一個体と思われる。

図 51 は遺物洗浄中に土馬の脚部と思われる破片である。色調、焼成、胎土ともに頭部及び胴部と同一である。堆積も頭部及び胴部と同一の明赤褐色砂質土である。なおこの土馬については、まとめの項にて報告する。

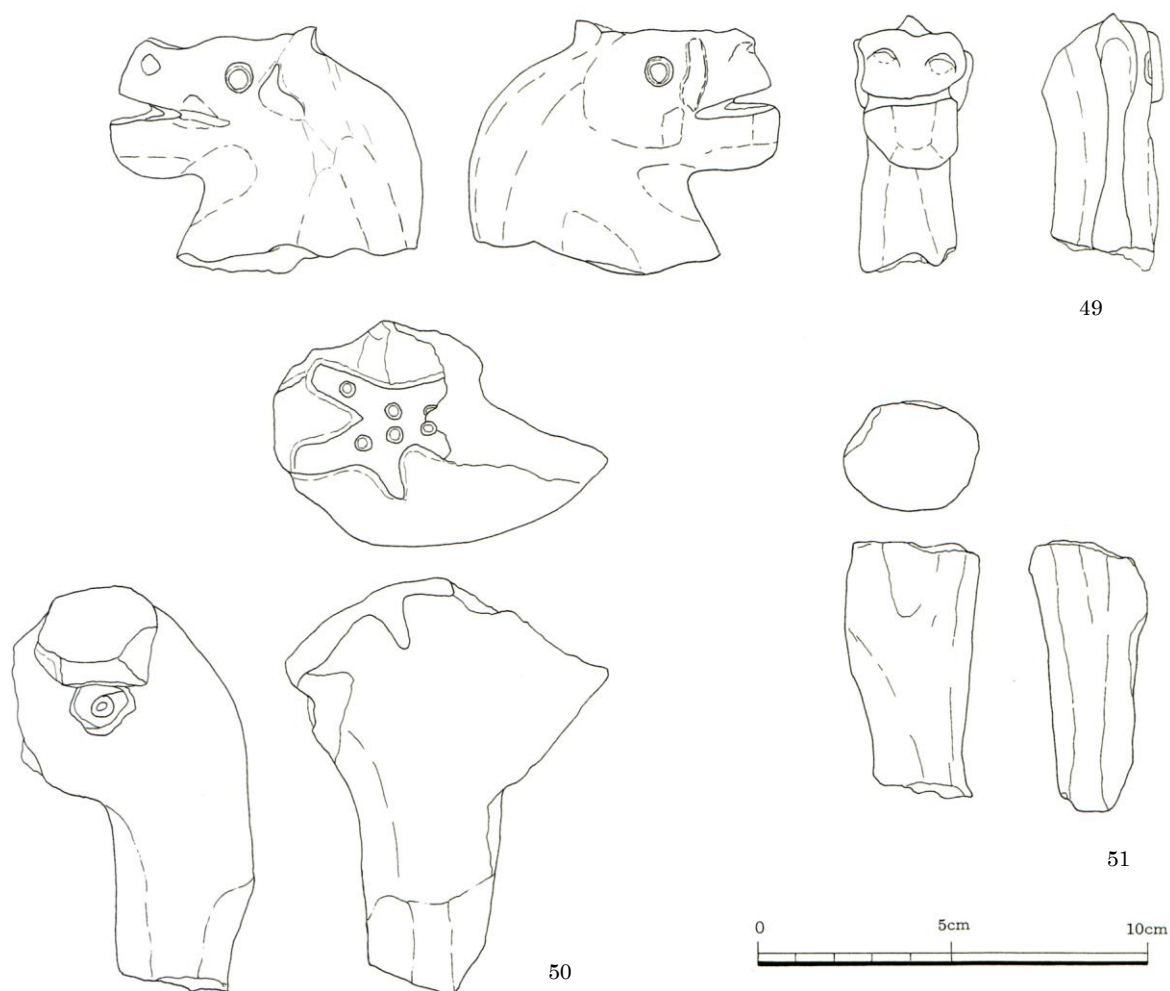
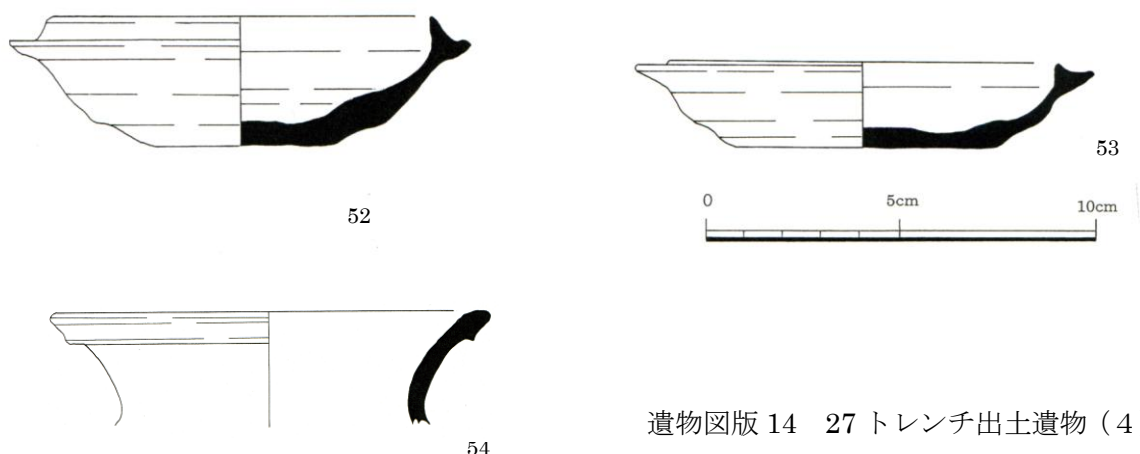


図 52 から図 54 は暗赤褐色砂質土からの検出である。

図 52 は須恵器坏身である。口径 9.8 cm、最大径 12 cm、器高 3.5 cm を測る。受け部は水平につまみ出し、立ち上がりは内傾につまみ出し、ナデ調整が施されている。胴部の膨らみは退化しながらもふっくらとした高さを持つ。外面は胴部にヘラ削りを施している。底部はヘラ切り後未調整である。内面はナデ調整のみである。色調は外面は白色化があるものの内外面とも青灰色を呈し焼成も良好である。胎土は小礫、粗砂を含むが比較的精緻である。中村編年Ⅱ型式 5 段階に位置づける。

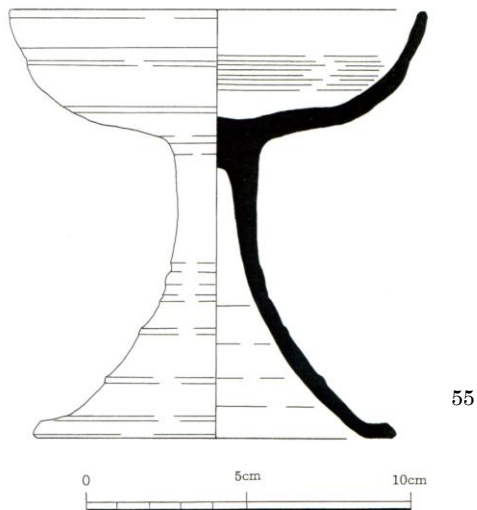
図 53 は須恵器坏身である。口径 9.8 cm、最大径 11.8 cm、器高 2.4 cm を測る。受け部は水平につまみ出し、立ち上がりは内傾しながらもほぼ直立に弱くつまみ出し、ナデ調整が施されている。外面は胴部に雑であるがヘラ削りが施されている。底部はヘラ切り後未調整である。内面はナデ調整であるが上部のみで底部は丁寧にナデ消されていない。色調は青みを帯びるが、概して灰白色で焼成も悪い。図 52 とは口径も同じく、最大径もほぼ同一であるが、受け部の作りや胴部の膨らみが異なる。また焼成が悪く仕上げにも粗雑さが残る。中村編年Ⅱ型式 6 段階に位置づけるが、在地性を考慮すればほぼ同年代と思われる。

図 54 は須恵器の口縁部である。口径 12.4 cm、最大径 13.0 cm、残高は 4.8 cm を測る。口縁部は丸みを帯びるが側面部に比較的しっかりとした平坦面を残す。上端及び内外面とも丁寧なナデ調整が施されている。色調は黒みを帯びた青灰色で焼成は極めて良好である。胎土粗砂を含むが精緻である。



遺物図版 14 27 トレンチ出土遺物（4）

図 55 は褐灰色砂質土より出土した須恵器高坏である。口径及び最大径は 12.8 cm、底部径は 11.2 cm、器高は 13.4 cm を測る。外面脚部にはナデ調整を施す。脚部中位に 2 条の凹線を巡らす。坏部胴部にも 1 条の凹線を巡らす。口縁部は強くナデ調整を施している。坏部内面は上端部は丁寧にナデられているが、底部は粗雑なナデしか施していない。色調は灰白色で焼成は不良である。胎土は礫・小礫・粗砂を含み精緻ではない。この土器は暗赤褐色砂質土下層の褐灰色砂質土に食い込んでいたもので、上層と時期差がある可能性を考慮したが、脚部を含め全体的な粗雑な作りや坏部の器壁の外向きの傾斜傾向などから、図 53、54 に近い年代である中村編年Ⅱ型式 5 段階に位置づける。



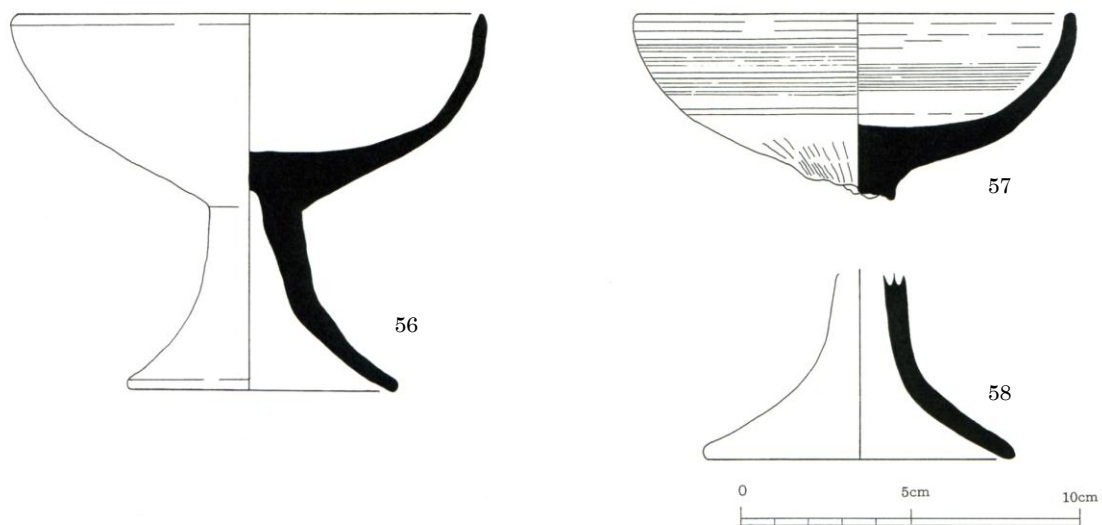
遺物図版 15 27 トレンチ出土遺物 (5)

図 56 から図 60 はNo.2 井戸内から出土した遺物である。

図 56 は土師器の高坏である。口径 13.6 cm、最大径 14.2 cm、底部径 8 cm、器高 11.3 cmを測る。内外面全面に磨滅が激しく調整は確認できない。しかしヘラ磨き及びヘラ削り調整は見られず、おそらくナデ調整のみであろう。また器形も坏底部から内湾して立ち上がる口縁部を持つ。脚部も細くなだらかに裾へ開く。これらの状況から布留式期の終わり (IV～V期) に出現する小型化した後期型高坏と思われる。色調は赤褐色である。胎土は礫・小礫・粗砂を含み粗雑である。

図 57 は土師器の高坏身である。口径 12.8 cm、最大径 13.2 cm、残存高 5.6 cmを測る。内外面とも比較的良好にハケ目を残す。器形も坏底部から内湾して立ち上がる口縁部を持つ。色調は赤橙色ながら焼成は良好である。胎土には粗砂は含むが図 56 と違い、極めて精緻である。布留式期の終わり (IV～V期) に出現する小型化した後期型高坏と思われる。

図 58 は土師器の高坏脚部である。底部径は 9 cm、残存高は 5.5 cmを測る。色調、胎土、焼成は図 56 に類似する。



遺物図版 16 27 トレンチ出土遺物 (6)

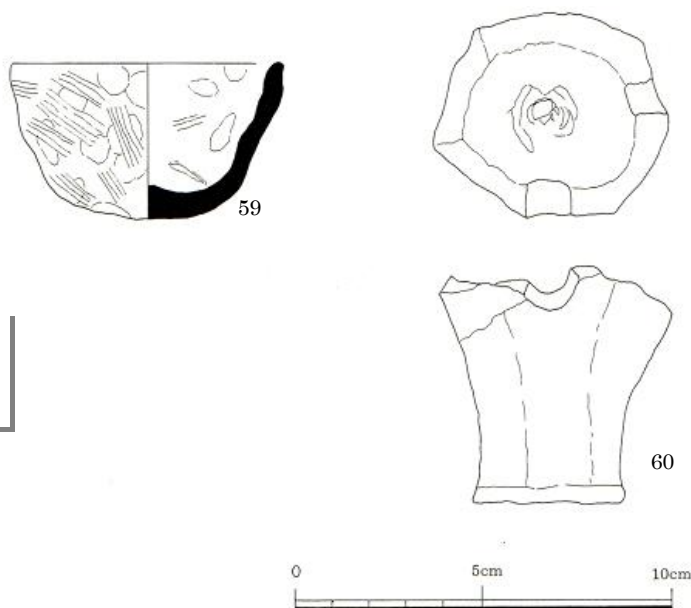
図 59 は土師器の小型鉢である。口径 7.2 cm、器高 4.3 cm、厚さ 5 mm から 1 cm を測る。指オサエを数多くかつ明瞭に残す。この指オサエを消すためにハケ目が施されるが規則性はない。手捻りで調整も粗雑な小型品である。色調は褐灰色で焼成も悪い。しかしミニチュア土器の側面もあり、留意しておく必要がある。

図 60 は土師器の支脚のような遺物である。底部として設置すれば残存高は 6.5 cm 程度である。半円ほど丸く穿孔している面が残る。残存しているのは 2 方向であるが、本来は 3 方向に穿孔していたようである。内面は粘土を絞ったような痕跡を残すが、製作当時の面を持つ。色調は赤橙色で焼成は悪い。器種や用途は不明である。

この No. 2 井戸から出土した多くは土師器である。しかし比較的大きい須恵器甕の体部が 4 点、出土している。4 点のうち 3 点は外面は、並行なタタキの跡だが、1 点に各格子目文様を持つものがある。また内面は 4 点とも内面の当て具をナデ消している。破片で図化はできなかったが、図 57・58 高坏の時期を所作している可能性があ

遺物図版 17

27 トレンチ出土遺物 (7)



## トレンチ 28

上端で 6.2m × 6m を測り面積は 37.2 m<sup>2</sup>。下端で 4.8m × 4.5m を測り面積は 21.6 m<sup>2</sup>。現状地盤は T P + 10.63m。

## 基本層序

整地層 T P + 10.63m から 9.72m で厚さ 91 cm。旧耕作土 T P + 9.72m から 9.59m で厚さ 13 cm。オリーブ灰色砂質土 (10Y 5/2) T P + 9.59m から 9.34m で厚さ 25 cm。明赤褐色砂質土 (2.5Y R 5/6) T P + 9.34m から 9.05m で厚さ 29 cm。にぶい赤褐色砂質土 (2.5Y R 4/3) T P + 9.05m から 8.89m で厚さ 16 cm。黄褐色砂質土 (2.5Y 5/4) T P + 8.89m から。

## 検出された遺構

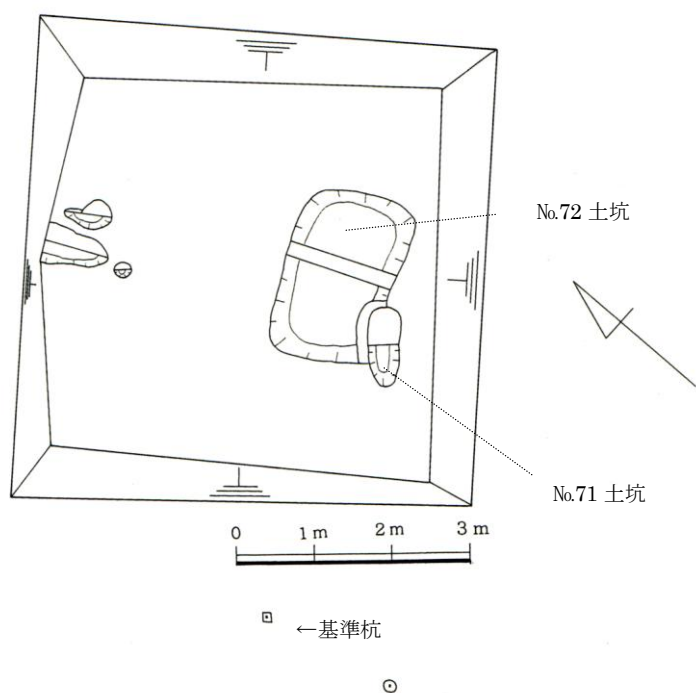
1 次遺構面としてオリーブ灰色砂質土上面で精査を行った。結果、土坑 5 が検出された。トレン



チ東半で2つの土坑が切り合った形で検出された。No.71 土坑は北東から南西に1 mの長さを測る。上場でTP+9.42mからの検出で深さは30 cmである。堀肩はほぼ直に落ちてしっかりしているが、埋土に黄色粘土ブロックを含む堆積である。この土坑に切られる形で比較的大きなNo.72 土坑が検出された。N65° Eの角度で検出された。高さはTP+9.49mからで深さは18 cm程度である。形状は長方形で2.25m×1.3mを測る。埋土は、ベースはオリーブ灰色であるが、礫や黄灰色粘土ブロックを含んでいる。遺構の性格は不明だが、中世耕作土で埋め戻されたものであろうと思われる。

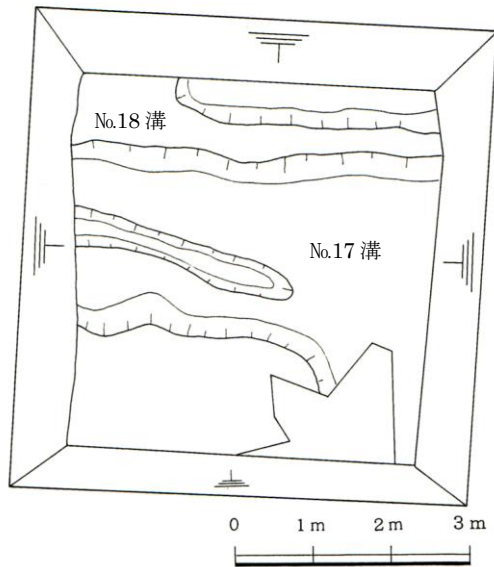
2次遺構面として明赤褐色砂質土上面で精査を行った。結果、溝2を検出した。N37° Wの角度で2条の溝が確認された。No.17 溝は最大幅で2 m54 cmをはかりトレンチ内で長さ4.75mまで検出された。埋土は黄褐色砂質土で、礫や小礫、粗砂を含む。高さはTP+9.22mからで深さは12 cmである。溝中央で一部深くなる部分がある。No.18 溝はトレンチ内北側から始まり長さ3.3mまで確認された。南端及び東端は今回のトレンチ内では確認できない。西肩のみの検出である。埋土は青灰褐色砂質土で礫や小礫、粗砂を含む。高さはTP+9.14mからで深さは14 cm程度である。

3次遺構面として、にぶい赤褐色砂質土上面で精査を行った。結果、土坑18を検出した。その内8つの土坑は直径や深さ、埋土も同じで直線及び直角に位置するため、柱穴として遺構番号を付けた。No.8 からNo.13 柱穴の並びはN38° Wの角度の軸に5つが並ぶ。柱穴の間隔は中心で75 cmを基本とし一部狭い所があり60 cm程度となる。深さも上層の溝の関係もあり堀肩の残存は悪く、深くて10 cmで浅いところでは5 cm程度しかない。この5つの並びの北端と南端のNo.8 柱穴及びNo.12 柱穴から直角に2 m25 cmの距離にそれぞれNo.14・15 柱穴が位置する。その間には等間隔に並ぶ柱穴はない。削平されており、掘立柱建物の間数は不明だが、簡易な建物が建っていた可能性がある。埋土はいずれも灰黄褐色砂質土である。



遺構図版 54 1次遺構面 平面図





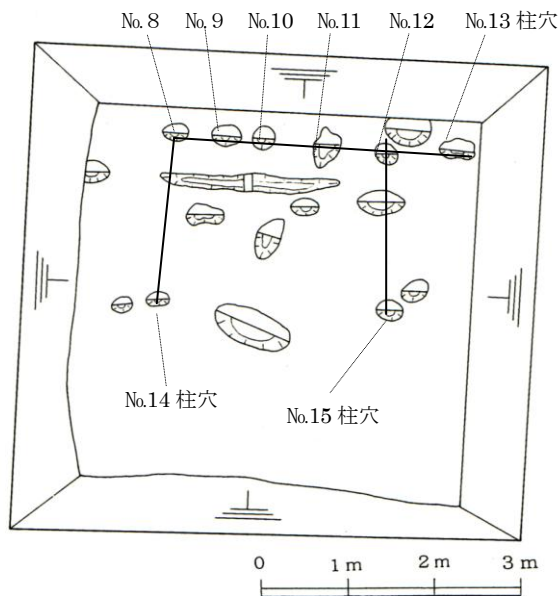
□ ←基準杭

○

遺構図版 55 2次遺構面 平面図

4次遺構面として、黄褐色砂質土上面で精査を行った。結果、落ち込み1、土坑5を検出した。

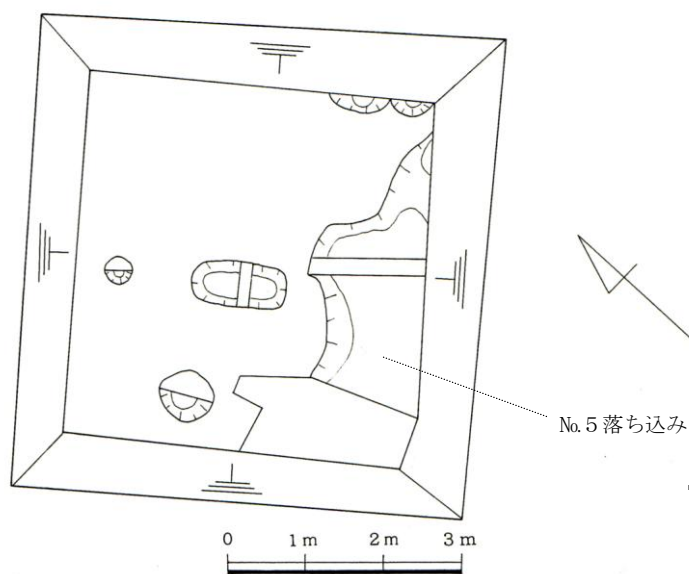
No.5 落ち込みは東壁に切られて、北側は攪乱されており全容はつかめないが、ほぼ東西に3.7m確認できた。すり鉢状に傾斜がついており、溝ではなく落ち込みとして、遺構番号を付けた。上場はTP+8.79m、中段で8.52m、下場で8.35mを測り最深部で44cmの落ち込みとなっている。埋土については、東壁断面図及び南北あぜの断面図にて報告とする。



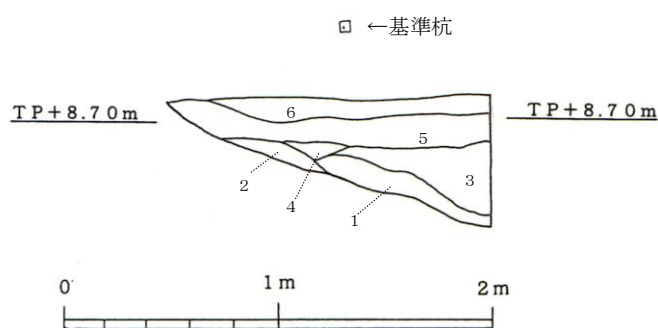
□ ←基準杭

○

遺構図版 56 3次遺構面 平面図

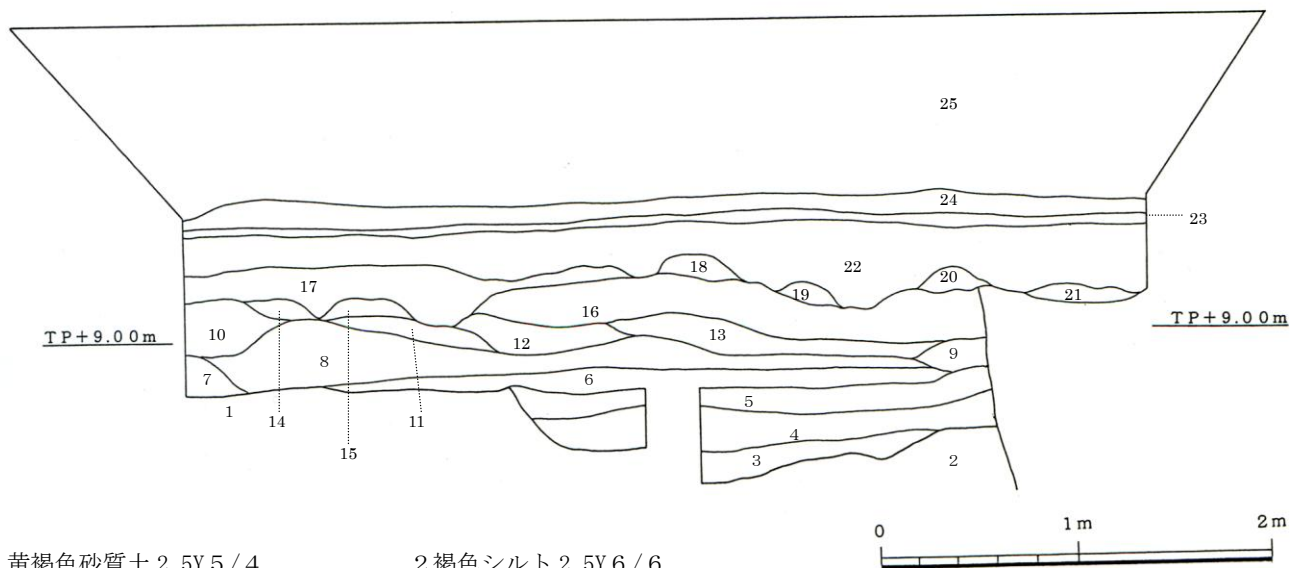


遺構図版 57 4次遺構面 平面図



- 1 青灰色砂礫
- 2 黄褐色砂質土
- 3 青灰色砂
- 4 明黄褐色砂質土
- 5 黄褐色砂礫
- 6 褐灰色砂礫

図版 58 No.5 落ち込み内  
南北あぜ断面図



- |                       |                      |
|-----------------------|----------------------|
| 1 黄褐色砂質土 2.5Y 5/4     | 2 褐色シルト 2.5Y 6/6     |
| 3 灰黄色砂礫 2.5Y 6/2      | 4 黄灰色砂礫 2.5Y 6/1     |
| 5 褐灰色砂礫 10Y 6/1       | 6 にぶい黄褐色砂質土 10YR 5/3 |
| 7 にぶい赤褐色砂質土 2.5YR 4/3 | 8 褐灰色砂質土 7.5YR 5/1   |
| 9 にぶい褐色シルト            | 10 灰褐色砂礫 7.5YR 6/2   |
| 11 褐灰色砂質土 7.5YR 5/2   | 12 灰オリーブ砂質土 5Y 5/2   |
| 13 灰オリーブ砂質土 5Y 5/3    | 14 灰黄色砂質土 2.5Y 6/2   |
| 15 灰黄色砂質土 2.5Y 6/2    | 16 黄灰色砂質土 2.5Y 4/1   |
| 17 にぶい黄色砂質土 2.5Y 6/4  | 18 にぶい黄色砂質土 2.5Y 6/4 |
| 19 にぶい黄色砂質土 2.5Y 6/4  | 20 にぶい黄色砂質土 2.5Y 6/4 |
| 21 にぶい黄色砂質土 2.5Y 6/4  | 22 オリーブ灰色砂質土 10Y 6/7 |
| 23 灰色砂質土 10Y 6/1      | 24 旧耕作土              |
|                       | 25 整地層               |

遺構図版 59

28 トレンチ東壁断面図

## 検出された遺物

明赤褐色砂質土、にぶい赤褐色砂質土、黄褐色砂質土の各堆積から、須恵器や土師器などの破片は出土したが、図化できる遺物はなかった。

## トレンチ 29

上端で 6.9m×4.4mを測り面積は 30.36 m<sup>2</sup>。下端で 4.0m×3.0mを測り面積は 12 m<sup>2</sup>。現状地盤は T P +10.8m。

## 基本層序

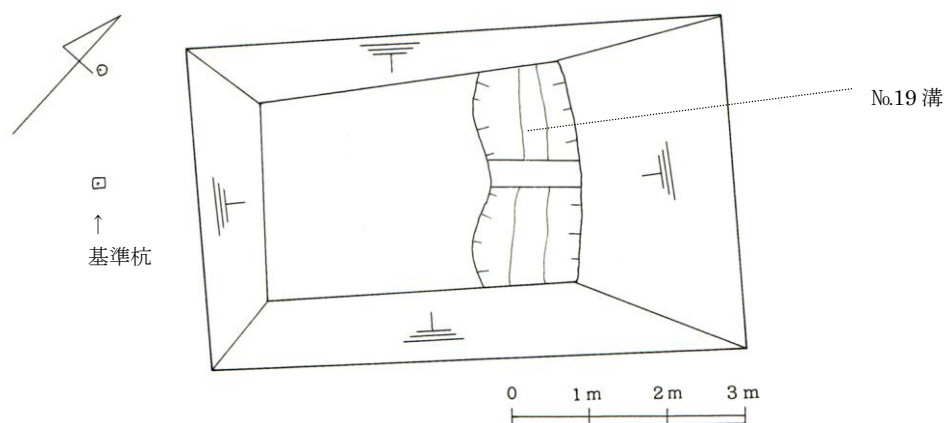
整地層 T P +10.8mから 9.15mで厚さ 165 cm。旧耕作土 T P +9.15mから 8.99mで厚さ 16 cm。オリーブ灰色砂質土（10 Y 6 / 2） T P +8.99mから 8.59mで厚さ 40 cm。明赤褐色砂質土（10 Y R 6 / 8） T P +8.59mから 8.33mで厚さ 26 cm。暗赤褐色粘質土（5 Y R 3 / 4） T P +8.33mから。

## 検出された遺構

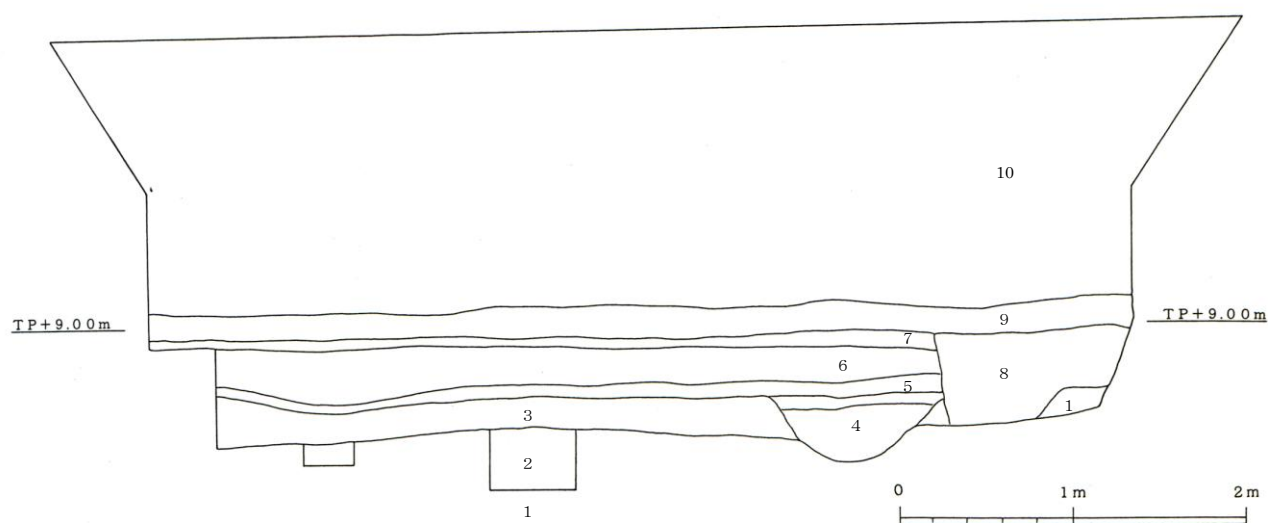
1 次遺構面として、オリーブ灰色砂質土上面で精査を行ったが遺構は検出されなかった。

2 次遺構面として、明赤褐色砂質土上面で精査を行った。結果、溝 1 が検出された。No.19 溝は北西から南東へ N44° W の傾きを持つ。上場は T P +8.54m で深さは 34 cm 程度である。溝の底は丸みを帯びているが、堀肩は比較的しっかりしており V 字状を呈する。またトレンチ内で確認できた範囲では、かなり直線を意識してしっかりと掘削されている。埋土は上部は上層からの影響か酸化を帯びた堆積が乗るが、基本は褐灰色砂礫の単一の堆積であった。

3 次遺構面として暗赤褐色粘質土上面で精査を行ったが、遺構は検出されなかった。



遺構図版 60 2 次遺構面平面図



- 1 黄褐色粘質土 10Y R 5 / 8
- 2 暗赤褐色粘質土 5 Y R 3 / 4
- 3 明黄褐色砂質土 10Y R 6 / 8
- 4 褐灰色砂礫 10Y R 6 / 1
- 5 オリーブ黄色砂質土 7.5Y 6 / 3
- 6 オリーブ灰色砂質土 10Y 6 / 2
- 7 灰色砂質土 7.5Y 6 / 1
- 8 オリーブ灰色砂質土 0Y R 6 / 2
- 9 旧耕作土
- 10 整地層

遺構図版 61 29 トレンチ西壁断面図

## トレンチ 30

上端で 6.2m×5.9m を測り面積は 36.58 m<sup>2</sup>。下端で 5.4m×4.3m を測り面積は 23.22 m<sup>2</sup>。現状地盤は TP +10.29m。

### 基本層序

整地層 TP +10.29m から 9.22m で厚さ 107 cm。灰黄色砂質土 TP +9.22m から 8.88m で厚さ 34 cm。黒褐色粘質土 (7.5Y R 3 / 2) 及び赤褐色粘質土 (7.5R 4 / 2) TP +8.88m から 8.7m で厚さ 18 cm。青灰色砂質土 (5 B 5 / 1) TP +8.7m から 7.82m で厚さ 88 cm。黄灰色砂 (5 Y 7 / 2) TP +7.82m から。土器溜まり 1・2 は黒褐色粘質土及び赤褐色粘質土中に包含。土器溜まり 3 は青灰色砂質土中に包含。

### 検出された遺構

1 次遺構面として、灰黄色砂質土上面で精査を行った。結果、落ち込み 1 を検出した。No.6 落ち込みは N23° W の角度を持つ。上場で TP +9.16m で深さは 51 cm を測る。堀肩はなだらかに傾斜し

最下層で湧水がある。No.6 落ち込みはトレンチ内で南端が検出されている。今回は落ち込みとしたが、北側を延長して掘削すると、溝として機能していたものかも知れない。埋土は比較的精緻な灰黄色砂である。このトレンチは唯一近世・近代の旧耕作土が検出されなかった。また下層にも他のトレンチで見られるオリーブ灰色の中世相当の耕作土も検出されなかった。この1次遺構面は比較的精緻かつ堅緻な水平堆積であったので精査を行った。

2次遺構面として、黒褐色粘質土及び赤褐色粘質土上面で精査を行った。結果、溝2を検出した。

No.20 溝は調査区東半からの検出でN52° Wの角度を持つ。最大幅1 m75 cmで北端はやや狭くなり1 m15 cm程度となる南端も同様に1 m20 cm程度で狭くなる。黒褐色粘質土をベース土として、西壁断面に明確に確認できる小礫、粗砂を多く含む灰黄白色砂質土が埋土である。堀肩は緩やかな傾斜を持ち、北側の上場でT P +8.72m、中央でT P +8.68m、南側で8.77mを測りトレンチ内で確認できる4 m75 cmの範囲で北から南へ5 cmの緩やかな勾配を持つ。下場はほぼ同一のレベルであるが、勾配の関係もあり、層厚は北側で12 cm、南側では6 cm程度の堆積しか残さない。この溝のベースとなる北側の堆積の黒褐色粘質土に包含される形で土器溜まり2が検出された。平面上に土坑などの検出は見られなかったが、

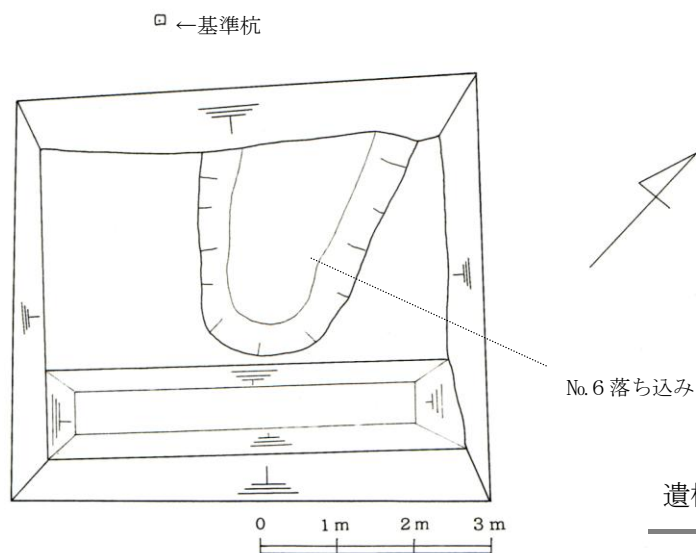
北側の比較的小さいNo.2 土器溜まりは明確に黒褐色粘質土の範囲内で収まる。それに対して南側のNo.3 土器溜まりは一部、No.20 溝に掛かるがベースとなる黒褐色粘質土にくいこんでいる状況でNo.20 溝内の遺物ではないものと思われる。よってNo.2 土器溜まりとNo.3 土器溜まりは同一面の一括資料として判断する。土器の詳細は遺物編にて報告する。

No.21 溝はNo.20 溝と北側では1 m55 cm、南側で60 cmの狭い範囲で並んで検出された。No.20 溝が52 b度の角度を有するのに対して、No.21 溝はN48° Wの角度を持つ。この溝にはトレンチ北隅で東東西溝が合流している。上場のレベルは北側でT P +8.63m、南側で8.55m、東へ屈曲する所で8.53 m、下場はほぼ均一で8.38 から8.41mを測る。これらのレベルからこのNo.21 溝はトレンチ内で確認できる4.75mの範囲で、北東から南西へ8 cmの緩やかな勾配を持ち、トレンチ内で東へ10 cmの勾配を持ち流下していた状況が想定される。北側の東へ屈曲する北側では最大2.5mで南へ行くほど狭くなり1 m20 cmの幅となる。埋土は上層には灰黄色砂、下層は褐灰色礫で絶えず下場で湧水している状況であった。ベースとなる土は東肩には黒褐色粘質土であるが、西側は赤褐色粘質土で溝を隔て堆積が異なる。この溝の埋土より須恵器坏身の完形品が出土しており、時代の特定が可能な状況である。詳細は遺物編にて報告する。

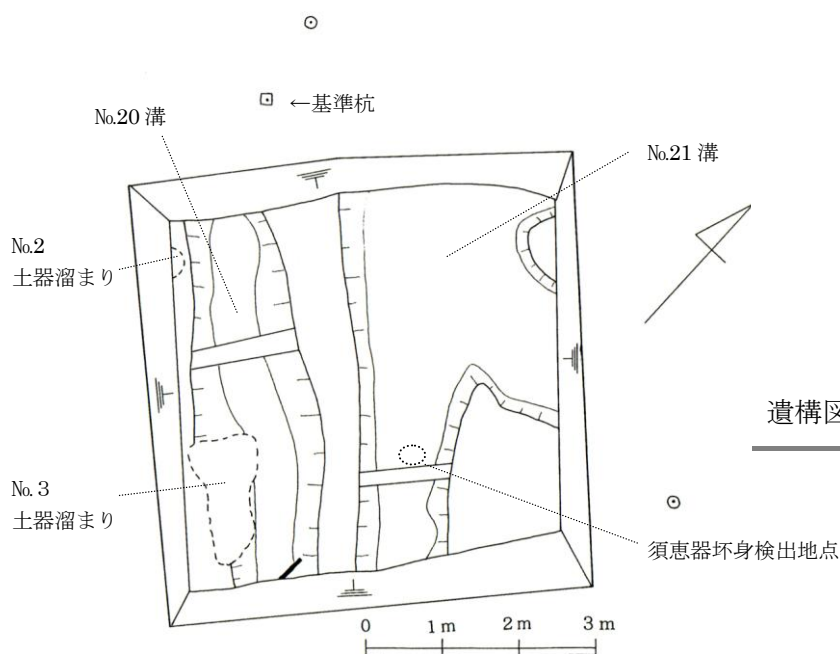
No.20 溝とNo.21 溝は同一面の検出であるが、堀肩はNo.20 が緩やかで浅く、No.21 溝は比較的直に落ち深く、明確に異なり、時期差を考慮する可能性を残す状況であった。なおNo.21 溝は堀肩もしっかりしており、時期を特定できる須恵器の完形品も出土しており、下層は掘削しないで現状保存する事とした。調査は土器溜まりが検出された西半を対象として実施する事とした。

No.2・3 土器溜まりの土器を取り上げるため、黒褐色粘質土を人力掘削しながら、中層の土器溜まりの上面で3次遺構面を設定した。結果的にはこのトレンチには3層の土器溜まりが検出された事となり、当該面は中層に位置する。またこの面からは土坑1が検出した。それぞれNo.4 土器溜まり及びNo.92 土坑の遺構番号を付与した。

黒褐色粘質土を除去するといずれも粘質の強い精緻で堅緻な粘質土が展開していた。トレンチ西側と東側では黄褐色、中央部に褐灰色、青灰色と色調が異なる。これらの粘質土は色調が異なるが、同一レベルで堀肩もなく粘質土が互層に被さっている状況と判断し、土器溜まりと認識した。



遺構図版 62 1次遺構面平面図



遺構図版 63 2次遺構面平面図

この段階で平面上にほぼ完形品の壺1、甕6、多量の破片が検出された。詳細は遺物編で報告するが、弥生土器及び古式土師器の一括資料である。平面は若干の起伏があり、一番高い南側でT P +8.6m、北側に下がりT P +8.38m、西側でT P +8.48m、東側ではT P +8.28mで全体的には南西から北東への高低差がある。もっとも残りのよい北壁に食い込む形で検出された弥生土器壺の胴部でT P +8.53mを測る。

No.92 土坑は直径 66 cmで埋土は黒色砂質土が上面で検出された、土師器甕の下層にも重層的に重なり最終的には3個体の土器が良好に残存していた。こちらも詳細は遺物編にて報告する。

No.4 土器溜まりを取り上げるため、黄褐色、褐灰色、青灰色粘質土を人力により掘削を行った。最下層は黄灰色砂が検出された。この上面に土器溜まりが検出された。3層のうち最下層に位置するもので、このレベルで精査を行い4次遺構面と設定した。

この土器溜まりは遺構番号No.5 土器溜まりとなる。No.4 土器溜まりと異なり、ほぼ完形品は数的

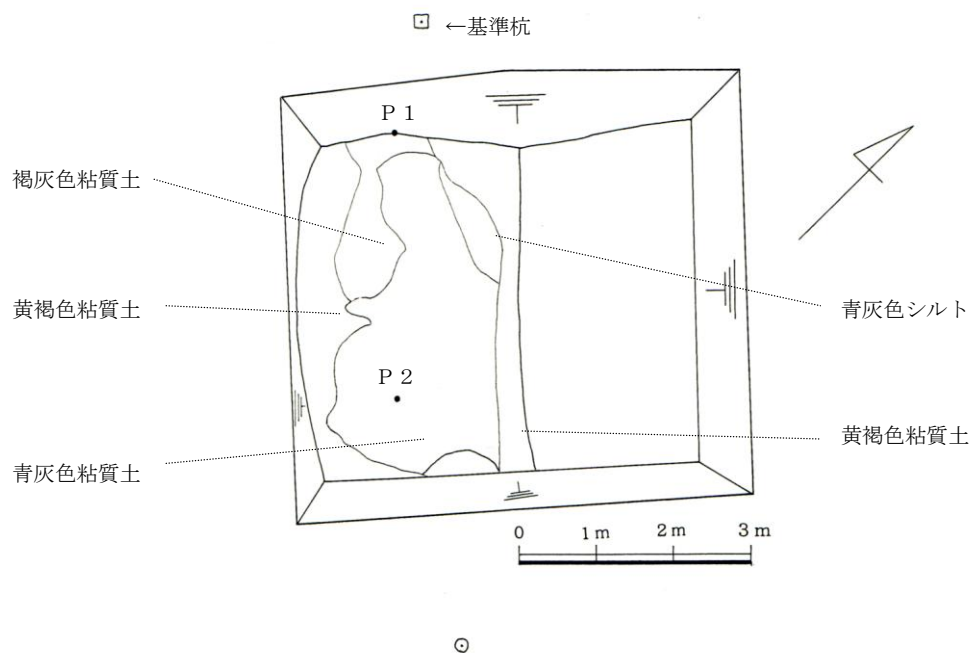


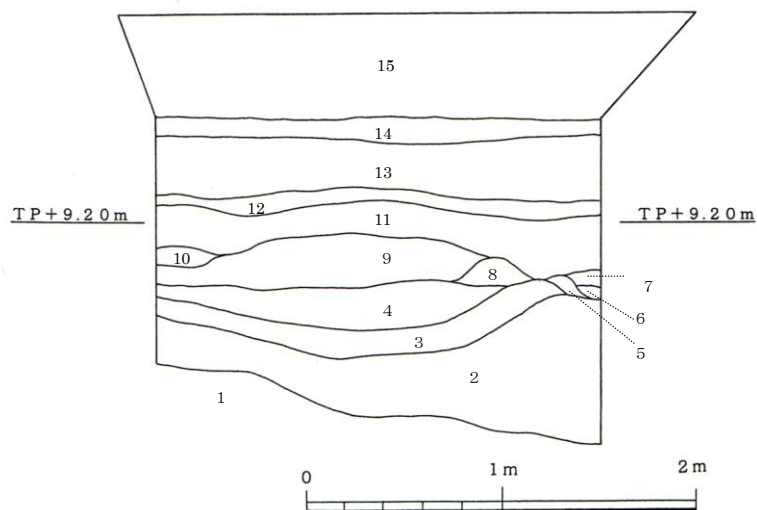
には少ないが、二重口縁壺の口縁部や高坏身など年代を特定しやすい破片が多く、非常に良好な一括資料となった。詳細は遺物編にて報告する。

No.5 土器溜まりのレベルは南側でT P+8.42m、北側でT P+8.3m、東側でT P+8.18mとなりNo.4 土器溜まりと同様に南西から北東への高低差がある。

今回 30 トレンチの土器溜まりで、図化した資料は、壺 1、小型丸底壺 1、甕 12、高坏 1、有孔鉢 2、鉢 1 となった。弥生時代から古墳時代にかけての土器の変遷を示す良好な一括資料となった。今後も遺物整理を継続して行い、3層に分けて検出及び取り上げを行った土器群の編年私案を検討していかなければならない。

今回このような土器溜まりが検出された背景には、当該地の立地条件が大きく影響しているものと思われる。当該地は吹田市の千里丘陵の蓮間池を源流とする山田川の形成する扇状地内に位置する。当時から集落を営むには、恵まれた立地環境であったであろうと思われる。今回の一括資料は上流から流されてきた土器溜まりと判断した。現在の山田川はこのトレンチの上流で鍵状にほぼ直角に流れを変える。その直角に曲がる際、土砂が押し出されてきた可能性がある。摂津市における吹田操車場周辺ではこれまで大規模な発掘調査は行われてこなかった。今回トレンチ調査ながら、大規模な発掘調査を実施することで、山田川が形成する扇状地内に弥生時代後期から古墳時代にかけての集落の存在が予見される一括資料なのかもしれない。



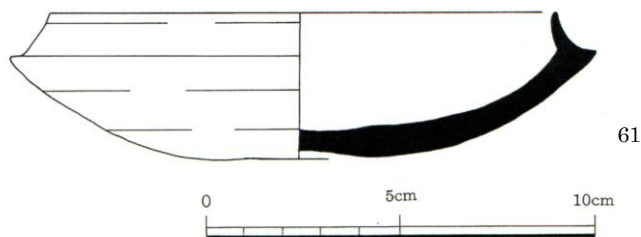


- |                        |                         |                        |
|------------------------|-------------------------|------------------------|
| 1 黄灰色砂 5 Y 7 / 2       | 2 青灰色砂質土 5 B 5 / 1      | 3 黒褐色粘質土 7.5 Y R 3 / 2 |
| 4 灰黄白色砂質土 2.5 Y 7 / 2  | 5 灰色シルト 5 Y 7 / 2       | 6 青灰色砂 5 B G 6 / 1     |
| 7 灰白色砂質土 7.5 Y 7 / 2   | 8 褐色砂質土 10 Y R 4 / 4    | 9 灰黄白色シルト 2.5 Y 7 / 2  |
| 10 褐色砂質土 10 Y R 4 / 4  | 11 灰黄色砂質土 2.5 Y 7 / 2   | 12 灰白色砂礫 2.5 Y 8 / 2   |
| 13 明茶褐色砂質土 2.5 Y 3 / 6 | 14 黄橙色砂質土 7.5 Y R 7 / 8 | 15 整地層                 |

遺構図版 65 30 トレンチ西壁断面図

## 検出された遺物

図 61 はNo.21 溝から出土した須恵器の坏身である。口径 12.8 cm、最大径 15.2 cm、器高 3.9 cmを測る完形品である。受け部はほぼ水平に弱くつまみ出している。立ち上がりは内傾し弱くつまみ出されている。外面は粗雑であるが、ヘラ削りが施されている。底部はヘラ切り後未調整である。内面はナデが施されているが、雑で指オサエが残る。色調は灰黄色で焼成は不良品と判断されるほど悪い。胎土も礫・小礫・粗砂を含み精緻ではない。小型化し受け部及び立ち上がりも弱く、中村編年Ⅱ型式5段階に位置づける。



遺物図版 18

30 トレンチ出土遺物 (1)

図 62 はNo.3 土器溜まりより出土した古式土師器の高坏である。口径 19.2 cm、底部径 12.6 cm、器高 15.8 cmを測る。坏部下にナデてつまみ出した有稜を呈する段がつく。全体的に磨滅が激しく内外面とも調整が確認できない。脚部は中実で比較的丁寧に仕上げられている。色調は黄橙色で胎土は礫・小礫・粗砂を含む。

図 63 はNo.2 土器溜まりより出土した古式土師器の小型の丸底壺である。口径 12.2 cm、器高 7.5 cm厚さ 2～5 mmを測る。口縁部をナデている以外は全体的に磨滅が激しく、内外面とも調整が確認

できない。色調は黄橙色で胎土は礫・小礫・粗砂を多く含む。布留式期に成立するいわゆる「小型精製三種土器」の小型丸底壺であろう。

図 64 は古式土師器の小型の鉢である。口径 9.2 cm、器高 5.9 cm、厚さ 2～15 mmを測る。体的に磨減が激しく内外面とも調整が確認できない。色調は黄橙色で胎土は礫・小礫・粗砂を含む。

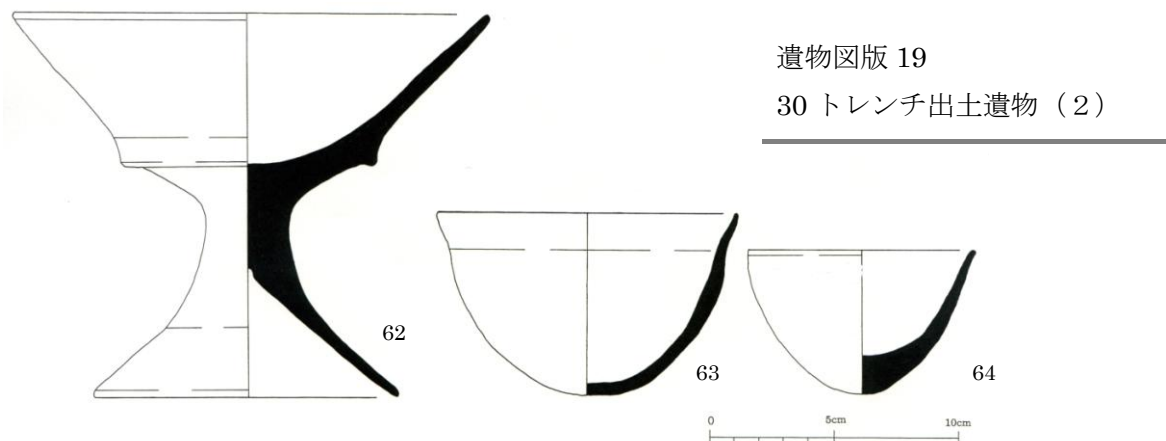


図 65～67 はNo. 4 土器溜まり面で検出されたNo.92 土坑内から出土した古式土師器の甕である。

図 65 は口径 16.6 cm、最大胴部径 20.8 cm、残高 19 cm、厚さ 3～5 mmを測る。口縁部外面は斜めに比較的明瞭な面を持つ。口縁部は直線的にツマミ上げられた結果、口縁部内面に凹線が明瞭に残る。内外面頸部はナデられた面を持つがケズられていない。ハケ目は胴部上段のみで、頸部付近及び胴部下側までは施されていない。内面のケズリ調整も確認できない。色調はベースは黄白色であるが、胴部は黒色化しており強い 2 次焼成を受けている。胎土は礫・小礫を含まず精緻である。

図 66 は口径 14.6 cm、最大径 17.2 cm、器高 16.7 cmを測る。ほぼ完形品である。口縁部外面に平坦面を持つ。内面は肥厚し最端部で内湾させている。頸部内面は鋭角にケズられており、断面は三角を呈する。胴部は球形で上部を中心に多くのハケ目が残る。ハケ目は頸部下まで丁寧に施されている。内面のケズリ調整は明確には確認できない。色調は 2 次焼成のためか黒色化が激しいが、一部が生駒山地西麓から産出されるいわゆる「チョコレート色」を呈する。

図 67 は口径 15.6 cm、残高 5 cm、厚さ 3～4 mmを測る。口縁部外面に弱い平坦面を持つ。口縁部は直線的に少し内湾して開く。頸部内面は鋭角にケズられており、断面は三角を呈する。胴部は残存は良くないがタタキ調整が頸部及び口縁部下まで施されている。内面のケズリは明確には確認できない。色調は図 66 と同様である。

図 68 から 73 はNo. 4 土器溜まりから出土した古式土師器である。

図 68 は口径 13.2 cm、最大胴部径 23.4 cm、器高 26 cm、底部径 3.8 cm、厚さ 6～14 mmを測る、ほぼ完形品の甕である。口縁部は外反し外端部がつまみ上げられている。胴部には上半及び最大径下部まで密にタタキ目が施されている。内面はナデのみでケズリ調整は見られない。底部は平底だが、安定が悪く、尖底への傾向が見られる。色調は黄灰色で焼成は良好である。胎土は礫・小礫・粗砂を多く含み精緻ではない。

図 69 は口径 14.2 cm、最大胴部径 17 cm、器高 18.8 cm、底部径 3.4 cm、厚さ 5～13 mmを測るほぼ完形品の甕である。口縁部は直線的に開き若干外反する。端部はナデ調整のみである。胴部には頸部から底部にかけて多くのタタキ目を明瞭に残す。底部は平底だが、安定が悪く尖底への傾向が見

られる。色調及び胎土図 68 と類似する。

図 70 は口径 12.8 cm、最大胴部径 15.6 cm、器高 18.1 cm、底部径 2.6 cm 厚さ 5～16 mm を測るほぼ完形品の甕である。口縁部は直線的に開き若干内湾する。端部外面はナデによる弱い面を持つ。胴部には頸部から最大径付近までタタキ目が施される。内面はナデのみでケズリ調整は見られない。底部は平底だが、安定が悪く尖底への傾向が見られる。色調及び胎土図 68・69 と類似する。

図 71 は口径 8.4 cm、最大径 12.6 cm、器高 14 cm、底部径 2 cm、厚さ 5～10 mm を測るほぼ完形品の小型の壺である。口縁部は直線的に外反しながら、端部はつまみ上げられている。内外面とも磨滅が激しく調整は確認できない。色調は黄灰色で焼成は良好である。胎土は礫・小礫・粗砂を多く含み精緻ではない。

図 72 は口径 14.2 cm、器高 9.8 cm、底部径 3 cm を測る有孔の鉢である。外面斜め方向のタタキ目が残る。底部は平底だが、安定が悪く尖底への傾向が見られる。色調は黄灰色で焼成は良好である。胎土は礫・小礫・粗砂を多く含み精緻ではない。

図 73 は口径 13.5 cm、器高 9 cm、底部径 4.2 cm、厚さ 5～8 mm を測る有孔の鉢である。図 72 とは異なり水平方向にタタキ目を残す。底部の接地面も多く安定している。色調は外面は黄灰色だが内面は黄橙色を呈し焼成は良好である。胎土は図 72 と異なり粗砂は含むが、精緻である。

図 74～79 は No. 5 土器溜まりから出土した古式土師器である。

図 74 は口径 14.2 cm、最大径 18 cm、器高 18.8 cm、厚さ 3～13 mm を測るほぼ完形品の甕である。口縁部は直線的に開く。胴部の頸部周辺は水平に胴部の最大径付近までは、比較的強く斜め方向に底部付近は水平に近い斜め方向にと 3 段階のタタキ目調整が施されている。内面はナデのみでケズリ調整は見られない。底部は極めて丸底に近い尖底である。色調は黄灰色で焼成は良好である。胎土は粗砂は含むが、精緻である。

図 75 は口径 15 cm を測る甕の口縁部を中心に残存していた破片である。口縁部は直線的に開き端部で強く外反させている。頸部内面はケズリとは断定できないが、比較的鋭意な断面三角を呈する。色調は黄灰色で焼成は良好である。胎土は粗砂は含むが、精緻である。

図 76 は口径 11.8 cm、最大径 12.2 cm、器高 12 cm、底部径 3.6 cm を測る小型の甕である。口縁部はなだらかに外反している。胴部上部に磨滅しながらもタタキ目を残す。色調は黄灰色で焼成は良好である。胎土は礫・小礫・粗砂を多く含み精緻ではない。

図 77 は口径 8.6 cm、最大径 9.6 cm、器高 9.9 cm、底部径 3.6 cm を測る小型の甕である。口縁部は短く直立ぎみ外反して開く。底部から胴部最大径付近にタタキ調整を施す。底部の接地面は多く安定している。色調及び胎土は図 76 に類似する。

図 78 は残存最大径 11.6 cm、残存器高 9.2 cm、底部径 3.6 cm を測る小型の甕である。内外面とも磨滅が激しく調整は確認できない。底部はしっかりとした平坦面を持ち安定している。色調及び胎土は図 76・77 に類似する。

図 79 は口径 18.2 cm、残高 6.5 cm を測る二重口縁壺の破片である。外面口縁部の上部平坦面に列点文及び中央平坦面に三角状の連続した文様を持つ。色調は黄灰色で焼成は良好である。胎土は粗砂は含むが、精緻である。

No. 2～5 土器溜まりから出土した土器については古式土師器と位置づけた。古式土師器については古墳時代初頭から前期を代表する土器様式として、「庄内式土器」とそれに続く「布留式土器」が該当する。また細分については「古式土師器の年代学撰津地域 森岡秀人・竹村忠洋 2006 (財)

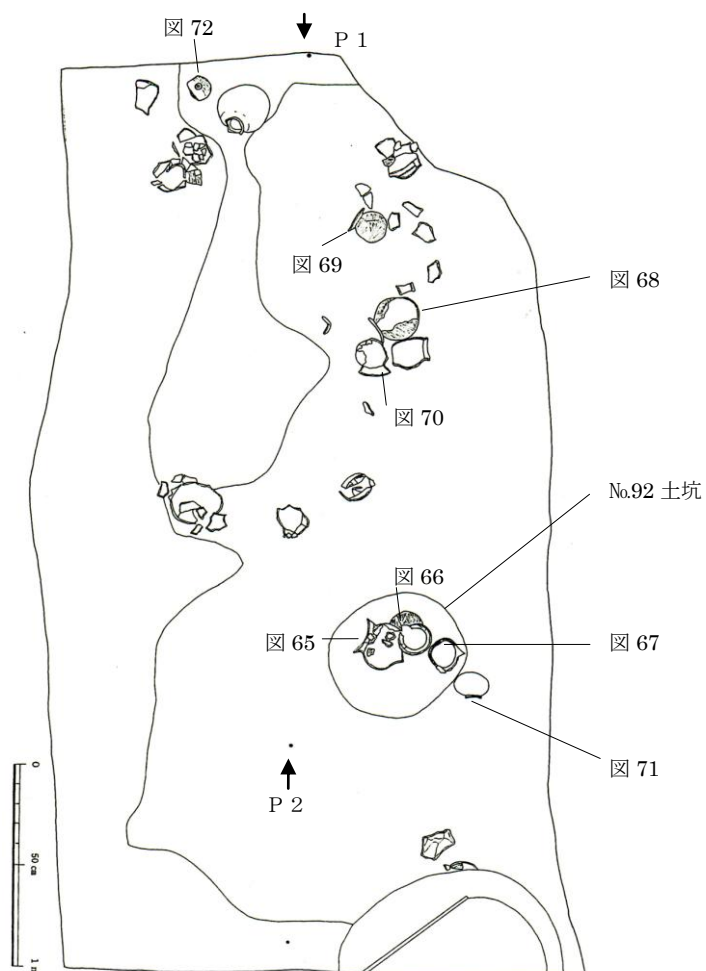
大阪府文化財センター」における西摂1～7様式に準拠する。上記研究では、1～3様式が畿内第Ⅴ様式後半段階、4～6様式が庄内式様式併行期、7様式が布留式様式成立期と位置づけられている。

図62は庄内系有段高坏で西摂5～6様式に位置づける。図63については、小型精製三種土器であろうが有段口縁鉢や小型器台とのセット関係は不明なので、年代の特定は難しい。図64も年代の特定は難しい。図65は外面のハケ目は布留式期の特徴を残し、口縁部の仕上げは庄内式期の特徴を残し、西摂6～7様式であろうか。図66は外面のハケ目及び口縁部が肥厚し、内湾する体部が球形の形状から布留式成立期の西摂7様式以降に位置づける。図67は胴部のタタキ目庄内式期の特徴を残し、口縁部の特徴や内面のハケ目に布留式期の特徴を残す。西摂5～7様式であろうか。図68～70については、胴部タタキ目や底部平底の状況から弥生土器Ⅴ様式の特徴を残す。西摂1～3様式であろうか。図72・73のような有孔鉢は西摂1～5様式に多く見られるようである。図74はタタキ目は庄内式期の特徴を残し、底部の丸底化に布留式期の特徴を残す。図76・77の小型の甕はタタキ目及び安定した平底の底部に弥生土器Ⅴ様式の特徴を残す。西摂1～3様式であろうか。図78は口縁部を79は体部が欠損しており時代の特定は困難である。

古墳時代以前の土器である弥生土器がそれぞれの地域ごとの特徴を持つのに比べて、土師器は近畿地方を中心として広がった共通した特徴をもつ土器様式である。土師器のはじまりを考える議論は古墳時代を特徴づける前方後円墳の初源の問題も内包した大きな研究課題である。また摂津地域は弥生時代の畿内Ⅴ様式から古墳時代にかけての土器の移り変わりを検討する上で学史上でも著名な豊中市所在庄内遺跡が位置する重要な地域である。しかし、庄内式併行期の土器の研究は、河内、大和、和泉地域などでは、詳細な編年研究が進んでいるのに比べ、摂津地域は立ち遅れているという印象がある。今回トレンチ30から出土した当該時期の土器群は、摂津地域庄内式併行期の土師器研究及び編年研究の推進につながる資料になるものと思われる。

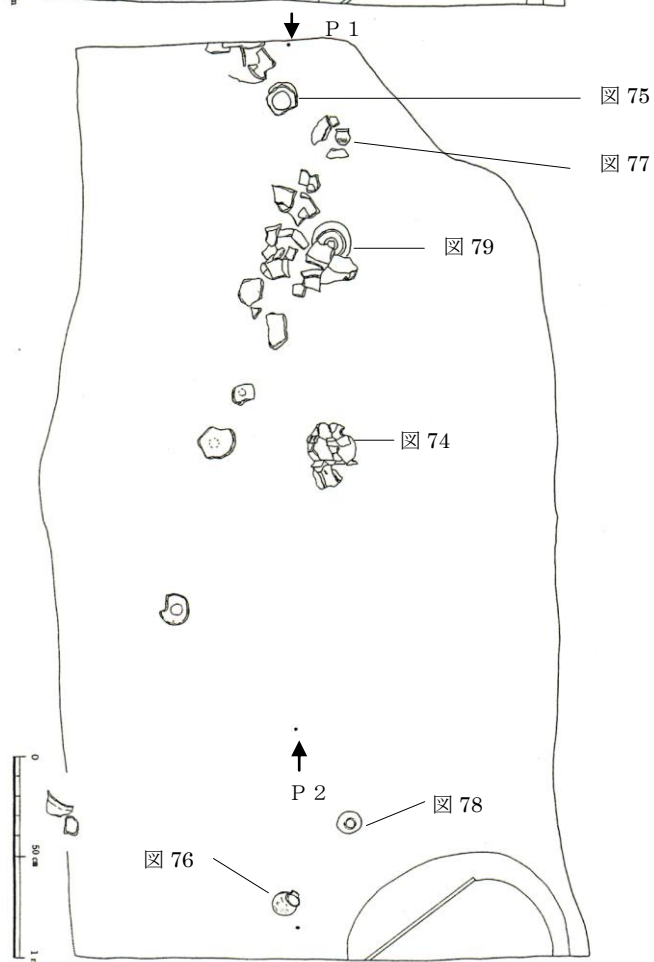
本報告書作成の段階で図化しきれていない破片が多々ある。今回の報告では、完形品を中心に行っている。まだ接合する土器も多々ある。

今回の調査ではNo.2・3土器溜まり、No.4土器溜まり、No.5土器溜まりと大まかに3層に分けて平面図作成及び遺物取り上げを行った。現段階では、No.4土器溜まりに切り込むNo.92土坑については、時期差が見られるが、これから継続して内業作業を進めていく中で、より正確かつ詳細な本遺跡内での編年作業を構築していかなければならない。



遺構図版 66

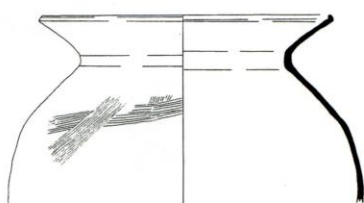
No. 4 土器溜まり検出状況



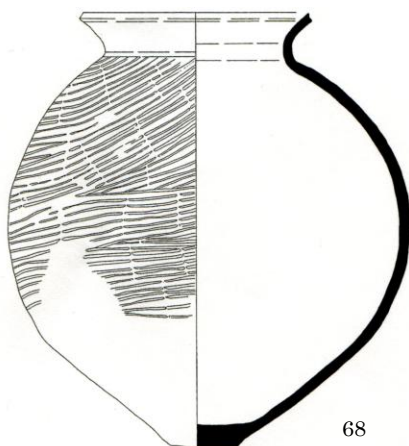
遺構図版 67

No. 5 土器溜まり検出状況

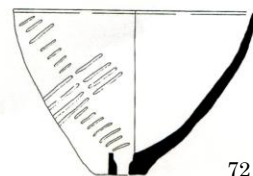




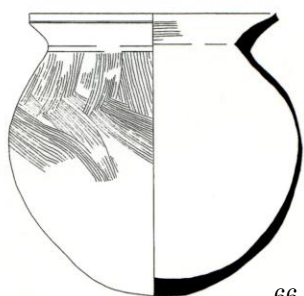
65



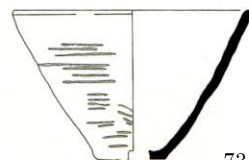
68



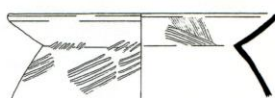
72



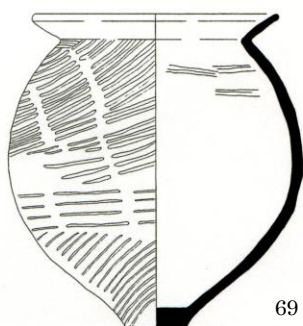
66



73



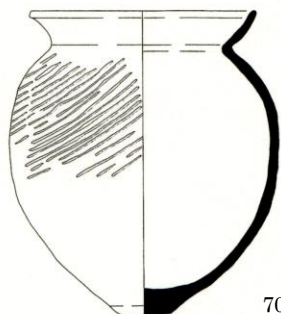
67



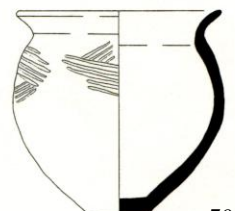
69



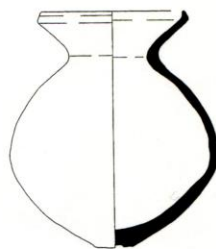
75



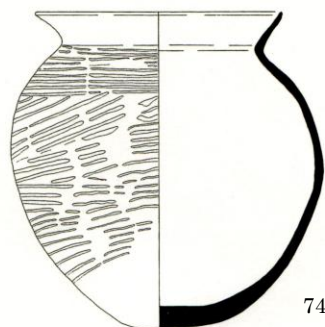
70



76



71



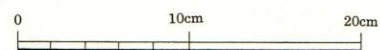
74



77



79



## トレンチ 31

---

上端で6 m×6 mでトレンチを設定した。G L—約 1m程度で大規模なコンクリート基礎が全面に広がっていた。一部西側が直に落ち約G L—2.5mで平坦面を持つ構造であった。結果、基礎は大規模で撤去する事は困難と判断し重機による掘削で調査を終了した。

## トレンチ 32

---

上端で6.7m×6.6mを測り面積は44.22 m<sup>2</sup>。下端で5.6m×4.7mを測り面積は26.32 m<sup>2</sup>。現状地盤はT P+10.77m。

### 基本層序

---

整地層T P+10.77mから9.68mで厚さ109 cm。旧耕作土T P+9.68mから9.5mで厚さ18 cm。灰オリーブ色シルト（5 Y 6/2）T P+9.5mから9.3mで厚さ20 cm。灰黄褐色砂質土（10 Y R 6/5）T P+9.3mから9.03mで厚さ27 cm。青灰色砂質土（10 B G 6/1）T P+9.03mから。

### 検出された遺構

---

1次遺構面として、灰オリーブ色シルト上面で精査を行った。結果、溝1、野井戸1、落ち込み1、土坑1を検出した。

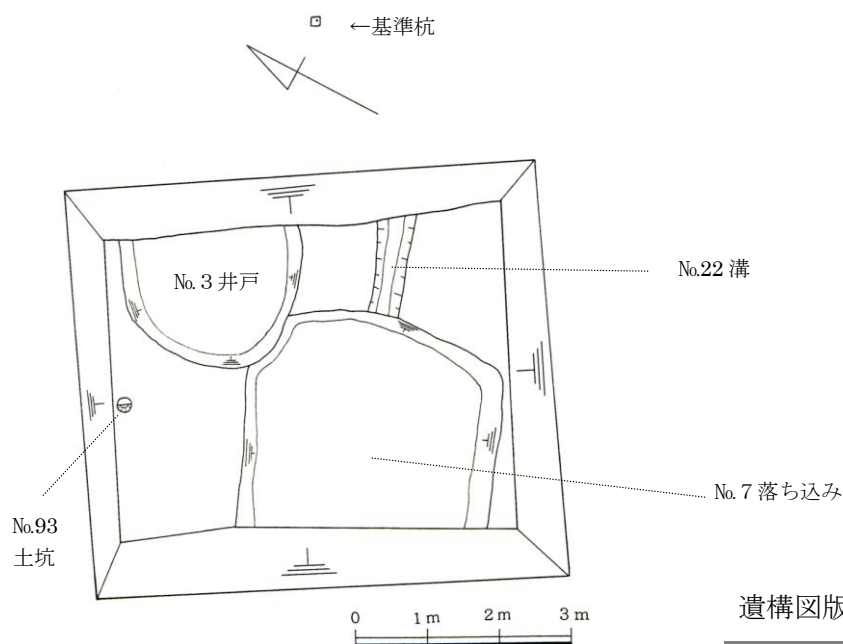
No.22 溝は、No.7 落ち込みに切られている。No.7 落ち込みはNo.3 井戸に切られている。これらの平面の切り合い関係から、No.22 溝が一番古く、次にNo.7 落ち込みが古く、No.3 井戸はこの面では一番新しい遺構となる。

No.22 溝は、N72° Eの角度を持つ。残存している部分は、1 m45 cm程度であるが、かなり直線を意識した掘削である。堀肩はなだらかながら、南北肩で同一の傾斜で意図的に規格を合わせて掘削している可能性が高い。上場はT P+9.41mで深さは8 cm程度である。

No.7 落ち込みは、表面精査時に青灰色砂質土をベースに黄色、褐色粘土ブロックが混在する状況で検出された。攪乱と判断し汚れた土を除去すると、比較的整った形となった。旧耕作土下からの検出であるが、中世以降の比較的新しい時代の遺構だと判断される。

No.7 落ち込みを切る形で井戸が検出された。堀肩は北壁断面に明瞭に残る。旧耕作土下からの掘削は明確である。埋土は落ち込みと同様に灰色砂質土をベースに黄色、褐色粘土ブロックが混在する礫や小礫も含み、極めてゆるい堆積である。この遺構も落ち込み同様に中世以降の比較的新しい時代のものと思われる。最大径の228 cmから下部ほど140 cm程度に狭くなって掘られている。確認できた範囲はT P+8.1mまでで、一部重機で掘削して下げても堆積に変化はなかった。

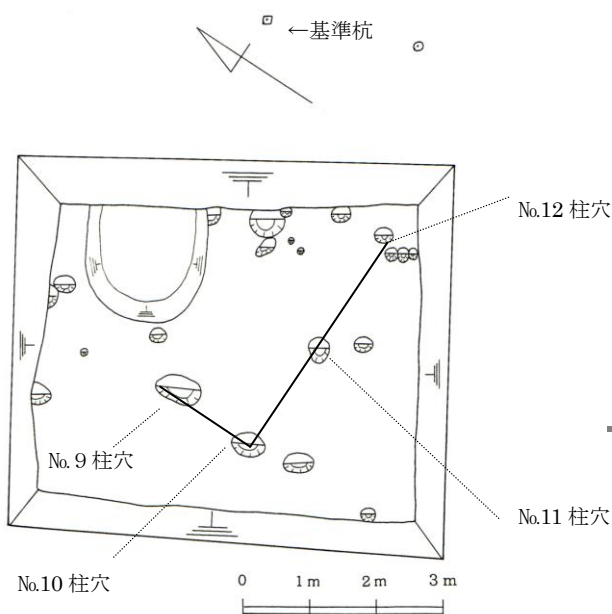
No.93 土坑は北西壁際に単独で検出された。直径25 cm程度の小さなものであった。埋土は灰褐色砂質土である。



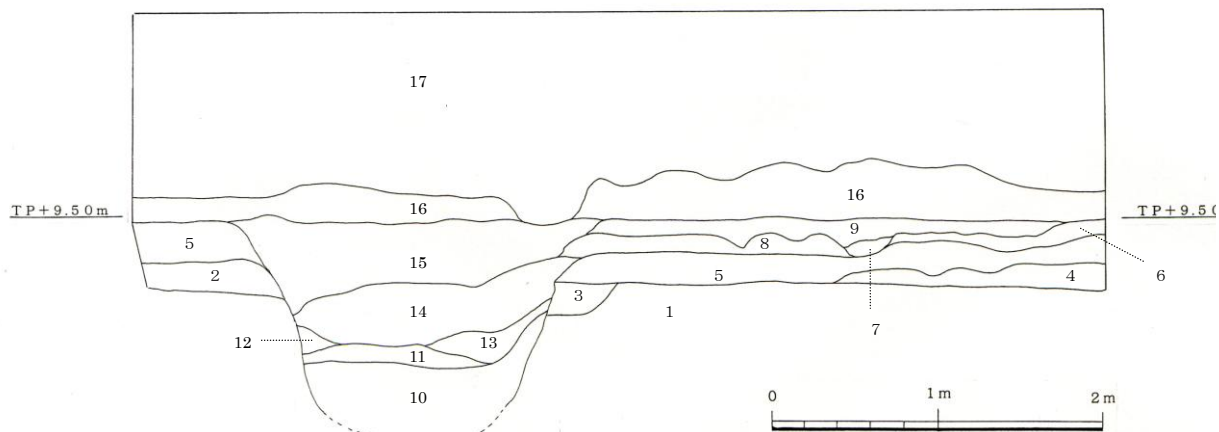
遺構図版 68 1次遺構面平面図

2次遺構面として、灰黄褐色砂質土上面で精査を行ったが、遺構は検出されなかった。

3次遺構面として、青灰色砂質土及び黄褐色砂質土上面で精査を行った。結果土坑 22 が検出された。そのうち 4 つの土坑は規則的に配置されており柱穴 No. 9 ~ 12 と遺構番号を付与した。No. 10 ~ 12 柱穴が東西に 3 つ並ぶ角度はほぼ 90 度で、柱穴の中心の誤差を考慮するとほぼ正東西に並ぶ。柱間は 180 cm である。この 3 本の並びに直交する位置に No. 9 柱穴が位置する。柱間は 150 cm である。No. 9 柱穴は T P + 8.96m からの検出で深さ 24 cm。No. 10 柱穴は T P + 8.94m からで深さ 17 cm。No. 11 柱穴は T P + 8.97m からの検出で深さ 39 cm。No. 12 柱穴は T P + 9.03m からの検出で深さ 15 cm である。上場のレベルはほぼ同一で下場には若干の高低差がある。規格から見ると No. 9 及び No. 10 柱穴は楕円形長辺で 65 cm で比較的大型である。No. 11 柱穴及び No. 12 柱穴は、直径 35 cm 程度でサイズが異なる。大型の柱穴は柱の抜き取りを考慮する必要がある。埋土はいずれも褐色砂質土である。



遺構図版 69 3次遺構面平面図



- |                        |                       |
|------------------------|-----------------------|
| 1 青灰色砂質土 10B G 6 / 1   | 2 暗赤褐色粘質土 5 Y R 3 / 4 |
| 3 褐色粘質土 10 Y R 4 / 6   | 4 オリーブ黄砂質土 5 Y 5 / 4  |
| 5 灰黄褐色砂質土 10 Y R 5 / 2 | 6 灰オリーブシルト 5 Y 6 / 2  |
| 7 オリーブ黄シルト 5 Y 6 / 3   | 8 暗灰黄砂質土 2.5 Y 5 / 2  |
| 9 灰オリーブシルト 5 Y 6 / 2   | 10 青灰色砂礫 10 B G 6 / 1 |
| 11 灰色粘土 N 6 / 1        | 12 灰色砂礫 5 Y 6 / 1     |
| 13 灰色砂礫 5 Y 5 / 1      | 14 灰色粘質土 5 Y 6 / 1    |
| 15 オリーブ色砂質土 5 Y 5 / 6  | 16 旧耕作土               |
|                        | 17 整地層                |

#### 遺構図版 70

#### 32 トレンチ北壁断面図

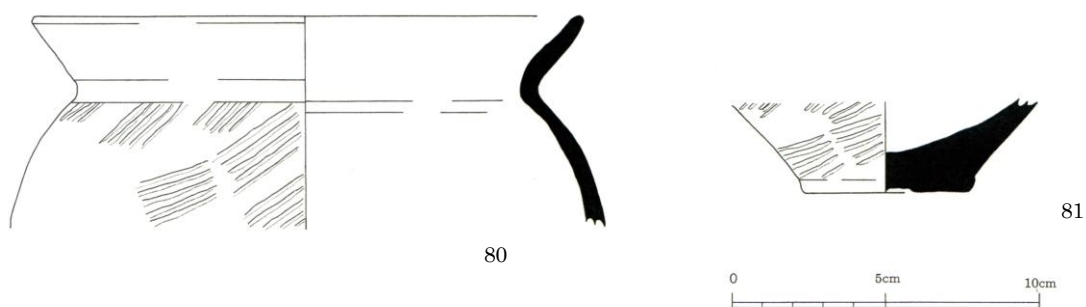
### 検出された遺物

3次遺構面である青灰色砂質土及び黄褐色砂質土から土器片が検出された。図化したのは弥生土器甕1、底部2である。

図80は口径18cm、残存最大径19.6cm、残高7cmを測る。頸部下までタタキ目を残す。口縁部は肥厚傾向があるが、外反に直線的に伸びる。色調は黄灰色で焼成は良好である。胎土は礫・小礫を含まず精緻である。

図81は底部径5.4cm、残高3cmを測る。底部まで斜め上方へのタタキ目が残る。色調及び胎土は図80に類似する。図80・81ともに胴部タタキ目や底部平底の状況から、弥生土器V様式の特徴を残す。西撰1～3様式であろうか。

No.9柱穴からは土師器碎片、No.11柱穴からは須恵器碎片、No.12柱穴からは土師器碎片が出土したが図化できる破片ではなかった。破片であるが建物跡が想定される柱穴とベースとなる堆積とでは須恵器を含むという点から時期差が想定できる。



#### 遺物図版 21 32 トレンチ出土遺物

## トレンチ 33

上端で 6.4m×5.6m を測り面積は 35.84 m<sup>2</sup>。下端で 3.4m×3.1m を測り面積は 10.54 m<sup>2</sup>。現状地盤は T P +11.09m。

### 基本層序

整地層 T P +11.09m から 9.24m で厚さ 185 cm。旧耕作土 T P +9.24m から 8.82m で厚さ 42 cm。オリーブ灰色砂質土 (10Y 5/2) T P +8.82m から 8.5m で厚さ 32 cm。明赤褐色砂質土 (5YR 5/6) T P +8.5m から 8.03m で厚さ 47 cm。明黄褐色砂質土 (10YR 6/6) T P +8.03m から 7.9m で厚さ 13 cm。

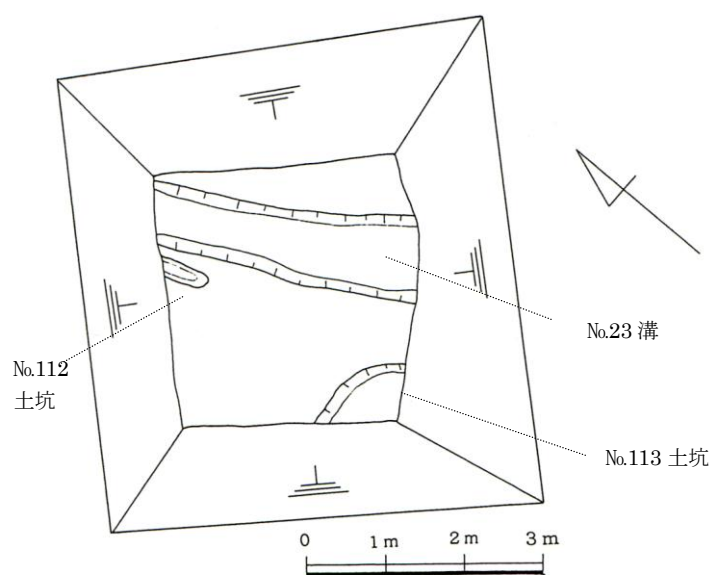
### 検出された遺構

1 次遺構面として、オリーブ灰色砂質土上面で精査を行った。結果、溝 1、土坑 2 を検出した。

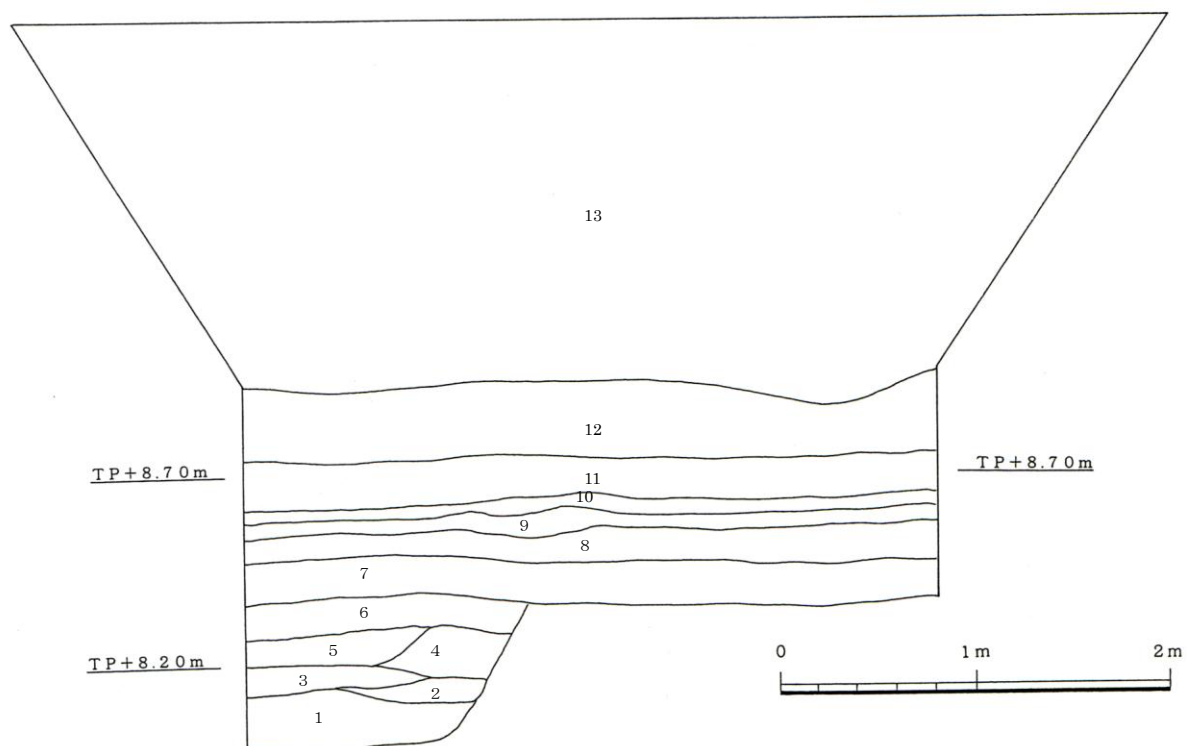
No.23 溝は N33° W の角度も持つ。T P +8.76m からの検出で深さは下場で 8.71m で 5 cm しか残存していない。ラインは直線を意識しているが、堀肩はほとんど残っていなかった。おそらく上層の旧耕作土に伴う開発の際に削平されてしまった可能性が高い。埋土は青灰褐色砂質土である。No. 112・113 土坑も青灰色褐色砂質土で厚さ 5 cm 程度の埋土しか残存していなかった。

### 検出された遺物

1 次遺構面のオリーブ灰色砂質土より土師器、須恵器の破片が少量出土したが、図化できる破片はなかった。



遺構図版 71 1 次遺構面平面図



- |                     |                      |                    |
|---------------------|----------------------|--------------------|
| 1 明黄褐色砂礫 10YR 6/6   | 2 明黄褐色砂 10YR 6/6     | 3 明黄褐色砂礫 10YR 7/6  |
| 4 褐灰色シルト 10YR 5/1   | 5 にぶい黄橙色シルト 10YR 5/4 | 6 明黄褐色シルト 10YR 6/6 |
| 7 赤褐色粘質土 10R 4/4    | 8 明橙色粘質土 10YR 6/5    | 9 明赤褐色砂質土 5YR 5/6  |
| 10 オリーブ黄色砂質土 5Y 6/4 | 11 オリーブ灰色砂質土 10Y 5/2 | 12 旧耕作土 13 整地層     |

遺構図版 72 33 トレンチ西壁断面図



# 第5章 まとめ

## 調査の成果

---

今回の発掘調査では、遺構としては、落ち込み7、土坑113、杭列3、溝23、野井戸3、鋤溝群8、柱穴12、土器溜まり4などが検出された。遺物としては、古代から近世の土器を中心に遺物収蔵コンテナに換算して30箱の出土があった。結果的には、調査区内で遺構遺物の検出にはばらつきがあった。海水準がより低い時期に形成された原地形の谷が、淀川の沖積作用で埋没する過程で凹地として残された谷や弥生時代前期に形成され古墳時代後期ごろまでに埋没していった谷など、現地地形では読み取れない起伏があったようである。詳細は参考文献に掲載している『吹田操車場遺跡・吹田操車場遺跡B地点』の中で阪田育功氏が報告されている。このような微地形により、谷堆積で残る遺構・遺物と、中世段階の耕作化の中で削平されてしまった遺構・遺物とがあったようである。今後の開発工事に伴う全面発掘を計画する上での意義のある結果が得られたものと思われる。以下、調査の中で、主な成果を報告する。

トレンチ2からは、北西に33度振る当該地の中世段階に見られる条里制を踏襲した地割に影響を受けた溝が検出された。その下層からは北西に5度ふる南北を意識した溝や土坑の並びがあった。溝からは6世紀後半の須恵器が出土している。

トレンチ3からは、吹田操車場操業時の転車台が想定されるコンクリート構造物が検出された。近現代の遺産として、現状保存した。

トレンチ5からは、中世段階に見られる条里制を踏襲した地割に影響を受けた隆起した落ち込みが検出された。5次遺構面から北東に45度振る溝が検出された。6次遺構面からは北西に64度振る溝が検出された。遺物としては5次遺構面から弥生時代が想定される土師質の底部が多数出土した。

トレンチ6からは、2次遺構面から後期弥生土器の破片が出土した。4次遺構面からは弥生時代以前の北西に33度振る溝が検出された。

トレンチ14からは、3次遺構面から北東へ62度振る溝が検出された。溝内から須恵器・土師器の破片が出土したが、時代の特定は困難である。中世耕作土の下層であり古代期に位置づける。

トレンチ17からは、3次遺構面から南西から北上し東へ屈曲する溝が検出された。溝の肩部にI型式3段階のほぼ完形品の須恵器壺が出土した。人為的に設置した可能性がある。

トレンチ18からは、摂津VI様式の弥生時代後期の小型甕が出土した。

トレンチ26からは、近現代ではあるが、畠跡である耕作土の畝の隆起を検出した。3次遺構面から井戸を検出した。木桶を井戸枠に転用しており、3段まで確認できた。室町時代以降のものと思われる。4次遺構面からは、ほぼ正南北東西に並ぶ柱穴が検出された。中世以前の地割を考察する上で、重要であろう。

トレンチ27からは、2次遺構面である明赤褐色砂質土上面から土馬の頭部、同堆積中から胴部及び脚部が想定される破片が出土した。7世紀半ばに位置づけられる古相を呈する土馬である。4次遺構面からは井戸が出土した。井戸内からは古墳時代布留式期の土師器及び須恵器が出土した。須恵器は甕の胴部の破片であるが、いずれも内面の当て具の跡をナデ消している。

トレンチ28からは、2次遺構面から溝2条が検出された。いずれも北西から37度の角度である。

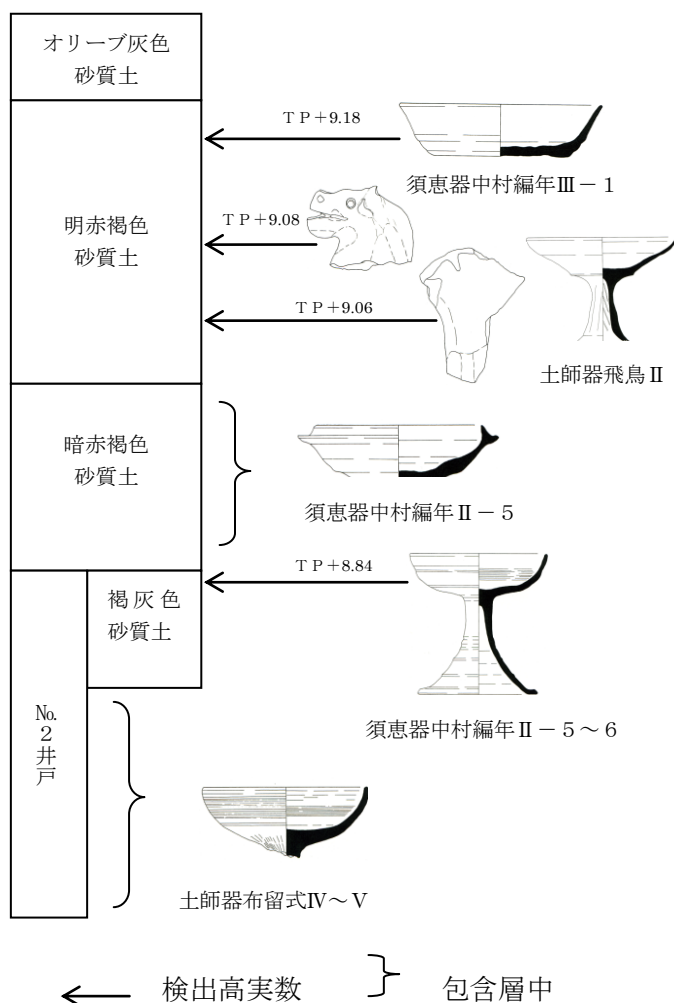
3次遺構面から北西から38度の角度で南北に4つ並ぶ柱穴及び東西に2つ並ぶ柱穴が検出された。

トレンチ30からは、2次遺構面から北西に52度振る緩やかな肩を持ち灰黄白色砂質土を埋土とする溝と北西48度振る比較的直立する肩を持ち灰黄色砂を埋土とする溝が検出された。後者の溝からは古墳時代Ⅱ型式5段階の須恵器が出土した。3次遺構面から3層に分かれる土器溜まりが検出された。弥生時代後期のV様式から古墳時代の庄内式・布留式期の土師器の一括資料を検出した。今回の報告では「古式土師器の年代学摂津地域 森岡秀人・竹村忠洋 2006 (財)大阪府文化財センター」における西摂1～7様式に準拠する。現在も継続して、これらの土器について内業調査を実施している。より詳細な編年作業を行っていく必要がある。

トレンチ33からは、3次遺構面から東西に3つ南北に1つほぼ正方位に並ぶ柱穴が検出された。3次遺構面から弥生土器後期の土器が出土している。

以上、今回の調査について得られた所見の概要をまとめた。トレンチによるポイントとしての調査であり、遺構・遺物の全容までは把握することはできなかった。しかし限られた面積の調査であったが、比較的多数の遺構・遺物が調査区全域で検出された。本市の埋もれた古代の歴史を解明する資料として、また今後、当該地の開発行為に係る文化財保護の資料として大きな成果があったと言える。

## トレンチ27から検出された土馬について



土馬の型式分類及び性格については、参考文献に掲載されている以外に多数あり比較的研究が進んでいる遺物である。今回の報告では、型式分類及び性格についての言及は、今後の課題とし、堆積及び年代について報告する。

今回の調査では、土馬の頭部及び胴部、同一層の須恵器、下層の須恵器を原位置を保って検出できた。左図はその柱状図である。また褐灰色砂質土に切り込む井戸が検出され時代差が確認できた。須恵器では同一層にⅢ型式1段階、土師器では飛鳥Ⅱ型式を含み下層には、Ⅱ型式の須恵器が出土している。これらの土器の検出状況からこの土馬は7世紀中ごろの年代が想定される。この時代は前期難波宮造営の時代で、本市には調査地の北東に古代の屯倉に関係していたと言われる三宅という旧小字があり、難波宮造営に関係した官人と関わりがある遺物であった可能性がある。今後の調査での土馬の出土に期待したい。

実測遺物一覧表（1）

| No | 調査区   | 層位・遺構     | 種 類      | 時 期  | 口 径  | 最 大<br>(残)径 | 底部径  | 器<br>(残)高 | 色 調  | 焼<br>成 | 胎<br>土 | 備 考      |
|----|-------|-----------|----------|------|------|-------------|------|-----------|------|--------|--------|----------|
| 1  | No.1  | にぶい赤褐色砂質土 | 弥生土器底部破片 | 弥生   | —    | —           | 4.2  | 1.4       | 黄灰色  |        |        |          |
| 2  | No.1  | にぶい赤褐色砂質土 | 須恵器坏身    | 古墳   | 13.8 | 15.8        | —    | 3.2       | 灰白色  | ×      | ×      | Ⅱ型式5段階   |
| 3  | No.2  | No.3溝     | 須恵器坏身    | 古墳   | 13.2 | 15.8        | —    | 5.0       | 灰白色  | ×      | ×      | Ⅱ型式4～5   |
| 4  | No.2  | 暗赤灰色砂質土   | 弥生土器甕    | 弥生   | 12.6 | 15.65       | —    | 7.25      | 黄橙色  | ×      |        | 弥生Ⅵ様式    |
| 5  | No.2  | 暗赤灰色砂質土   | 脚台？      | —    | 4.0  | —           | —    | 5.1       | 黄橙色  |        |        |          |
| 6  | No.2  | 暗赤灰色砂質土   | 弥生土器有孔鉢  | 弥生   | —    | —           | 4.2  | 6.0       | 黄橙色  |        |        |          |
| 7  | No.2  | 暗赤灰色砂質土   | 底部破片     | 弥生   | —    | —           | 4.0  | 1.8       | 黄橙色  |        |        |          |
| 8  | No.2  | 黒褐色砂質土    | 底部破片     | 弥生   | —    | —           | 4.6  | 3.1       | 黄橙色  |        |        | 一部黒班     |
| 9  | No.5  | 黒褐色粘質土    | 底部破片     | 弥生   | —    | 6.2         | 4.6  | 2.4       | 黄橙色  |        | ×      |          |
| 10 | No.5  | 黒褐色粘質土    | 底部破片     | 弥生   | —    | 7.9         | 4.9  | 3.2       | 淡赤橙色 |        | ○      |          |
| 11 | No.5  | 黒褐色粘質土    | 底部破片     | 弥生   | —    | 6.4         | 4.6  | 2.0       | 灰黄色  |        | ○      | 一部黒班     |
| 12 | No.5  | 黒褐色粘質土    | 底部破片     | 弥生   | —    | 12.5        | 3.6  | 5.9       | 灰黄色  |        |        |          |
| 13 | No.5  | 黒褐色粘質土    | 小型鉢      | 弥生   | —    | 7.6         | 4.0  | 3.9       | 明赤褐色 |        | ×      | 手づくね     |
| 14 | No.5  | 黒褐色粘質土    | 底部破片     | 弥生   | —    | 5.2         | 4.0  | 2.2       | 灰黄色  | ○      | ○      |          |
| 15 | No.5  | 黒褐色粘質土    | 底部破片     | 弥生   | —    | 4.7         | 3.8  | 1.8       | 黄灰色  |        |        |          |
| 16 | No.5  | 黒褐色粘質土    | 底部破片     | 弥生   | —    | 6.5         | 4.8  | 2.0       | 黄灰色  |        | ×      |          |
| 17 | No.5  | 黒褐色粘質土    | 底部破片     | 弥生   | —    | 6.0         | 4.0  | 2.1       | 褐灰色  |        |        | 一部黒班     |
| 18 | No.5  | 黒褐色粘質土    | 底部破片     | 弥生   | —    | 6.8         | 3.6  | 2.6       | 黄灰色  |        | ×      |          |
| 19 | No.6  | 暗赤褐色砂質土   | 弥生土器壺    | 弥生   | 12.2 | 12.8        | —    | 4.4       | 灰黄色  | ×      | ×      | 円形浮文     |
| 20 | No.6  | 暗赤褐色砂質土   | 弥生土器甕    | 弥生   | 15.8 | 16.0        | —    | 4.8       | 灰黄色  |        |        | タタキ目     |
| 21 | No.6  | 暗赤褐色砂質土   | 高坏脚部     | —    | —    | —           | —    | 9.8       | 黄橙色  | ○      | ○      | 差し込み法    |
| 22 | No.6  | 暗赤褐色砂質土   | 高坏脚部     | —    | —    | —           | —    | 7.5       | 黄橙色  |        |        | 貼り付け法    |
| 23 | No.6  | 暗赤褐色砂質土   | 底部破片     | 弥生   | —    | 8.0         | 4.4  | 1.9       | 灰褐色  |        |        | 全面黒班     |
| 24 | No.6  | 暗赤褐色砂質土   | 底部破片     | 弥生   | —    | 6.8         | 4.0  | 1.9       | 灰黄色  |        |        |          |
| 25 | No.6  | 暗赤褐色砂質土   | 底部破片     | 弥生   | —    | 7.2         | 4.2  | 2.4       | 灰黄色  |        |        |          |
| 26 | No.6  | 暗赤褐色砂質土   | 弥生土器手焙り？ | 弥生   | —    | 18.8        | —    | —         | 黄灰色  |        | ○      | 刻み目文様    |
| 27 | No.17 | にぶい赤褐色砂質土 | 須恵器壺     | 古墳   | 20.0 | 21.2        | —    | 4.9       | 黄橙色  | ×      | ○      | ハケ目調整    |
| 28 | No.17 | No.14溝    | 土師器鉢     | —    | 12.8 | 13.2        | 7.1  | 5.7       | 浅黄橙色 |        | ×      | 指オサエ調整   |
| 29 | No.17 | にぶい黄褐色砂質土 | 須恵器坏蓋    | 古墳   | 13.2 | 13.2        | —    | 4.8       | 青灰色  | ○      | ○      | Ⅰ型式4段階   |
| 30 | No.17 | にぶい黄褐色砂質土 | 須恵器坏蓋    | 古墳   | 12.8 | 12.8        | —    | 4.6       | 灰白色  | ×      | ×      | Ⅰ型式4段階   |
| 31 | No.17 | にぶい黄褐色砂質土 | 須恵器坏蓋    | 古墳   | 13.2 | 13.2        | —    | 3.9       | 青灰色  | ○      | ○      | Ⅰ型式4段階   |
| 32 | No.17 | にぶい黄褐色砂質土 | 須恵器坏身    | 古墳   | 12.6 | 15.8        | —    | 4.6       | 黄灰色  | ×      |        | Ⅰ型式4段階   |
| 33 | No.17 | にぶい黄褐色砂質土 | 須恵器坏蓋    | 古墳   | 9.8  | 11・6        | —    | 5.3       | 青灰色  | ×      |        | Ⅰ型式4段階   |
| 34 | No.17 | にぶい黄褐色砂質土 | 須恵器坏蓋    | 古墳   | 12.9 | 16.2        | —    | 3.7       | 黄灰色  | ×      |        | Ⅰ型式4段階   |
| 35 | No.17 | にぶい黄褐色砂質土 | 土師器底部    | —    | —    | 12.2        | 2.8  | 3.7       | 黄灰色  |        |        |          |
| 36 | No.17 | No.14溝    | 須恵器壺     | 古墳   | 15.2 | 24.2        | —    | 24.4      | 青灰白色 | ×      | ×      | Ⅰ型式3段階   |
| 37 | No.18 | 暗赤褐色砂質土   | 弥生土器小型甕  | 弥生   | 12.4 | 12.4        | 3.6  | 11.3      | 黄橙色  |        |        | 弥生Ⅵ様式    |
| 38 | No.18 | 暗赤褐色砂質土   | 底部破片     | 弥生   | —    | 9.6         | 4.8  | 2.1       | 黄灰色  |        |        |          |
| 39 | No.18 | 暗赤褐色砂質土   | 底部破片     | 弥生   | —    | 12.2        | 3.8  | 3.5       | 黄灰色  |        |        |          |
| 40 | No.18 | 暗赤褐色砂質土   | 底部破片     | 弥生   | —    | 6.4         | 3.6  | 1.8       | 黄灰色  |        |        |          |
| 41 | No.26 | 明赤褐色砂質土   | 須恵器坏身    | 古墳   | 10.0 | 11.6        | 5.9  | 3.0       | 青灰白色 |        |        | Ⅱ型式5～6段階 |
| 42 | No.27 | 明赤褐色砂質土   | 須恵器坏蓋    | 古墳   | 12.2 | 12.2        | —    | 4.0       | 灰白色  | ×      | ×      | Ⅱ型式6段階   |
| 43 | No.27 | 明赤褐色砂質土   | 須恵器坏身    | 飛鳥   | 13.8 | 13.8        | 9.2  | 3.5       | 灰白色  | ×      | ×      | Ⅲ型式1～2段階 |
| 44 | No.27 | 明赤褐色砂質土   | 須恵器底部    | —    | —    | 13.6        | 10.4 | 5.0       | 灰白色  | ×      |        |          |
| 45 | No.27 | 明赤褐色砂質土   | 須恵器口縁部   | —    | 18.2 | 18.2        | —    | 5.5       | 青灰色  | ○      | ×      |          |
| 46 | No.27 | 明赤褐色砂質土   | 須恵器口縁部   | —    | 27.4 | 28.8        | —    | 4.5       | 青灰色  | ○      | ○      |          |
| 47 | No.27 | 明赤褐色砂質土   | 土師器高坏    | 飛鳥   | 16.2 | 16.6        | —    | 11.4      | 赤褐色  | ○      | ○      | 飛鳥Ⅱ型式    |
| 48 | No.27 | 明赤褐色砂質土   | 土師器高坏    | —    | —    | —           | —    | 4.5       | 赤褐色  | ○      | ○      | 面取り      |
| 49 | No.27 | 明赤褐色砂質土   | 土馬頭部     | 飛鳥   | —    | —           | —    | —         | 黄灰色  | ○      |        | 粘土紐の馬具表現 |
| 50 | No.27 | 明赤褐色砂質土   | 土馬胴部     | 飛鳥   | —    | —           | —    | —         | 黄灰色  | ○      |        | 粘土紐の馬具表現 |
| 51 | No.27 | 明赤褐色砂質土   | 土馬脚部     | 飛鳥   | —    | —           | —    | —         | 黄灰色  | ○      |        |          |
| 52 | No.27 | 暗赤褐色砂質土   | 須恵器坏身    | 古墳   | 9.8  | 12.0        | 6.0  | 3.5       | 青灰色  | ○      | ○      | Ⅱ型式5段階   |
| 53 | No.27 | 暗赤褐色砂質土   | 須恵器坏身    | 古墳   | 9.8  | 11.8        | 9.0  | 2.4       | 灰白色  | ×      |        | Ⅱ型式6段階   |
| 54 | No.27 | 暗赤褐色砂質土   | 須恵器口縁部   | —    | 12.4 | 13.0        | —    | 4.8       | 青灰色  | ○      | ○      |          |
| 55 | No.27 | 褐灰色砂質土    | 須恵器高坏    | 古墳   | 12.8 | 12.8        | 11.2 | 13.4      | 灰白色  | ×      | ×      | Ⅱ型式5～6段階 |
| 56 | No.27 | No.2井戸    | 土師器高坏    | 古墳   | 13.6 | 14.2        | 8.0  | 11.3      | 赤褐色  |        | ×      | 布留式Ⅳ～Ⅴ期  |
| 57 | No.27 | No.2井戸    | 土師器高坏    | 古墳   | 12.8 | 13.2        | —    | 5.6       | 赤褐色  | ○      | ○      | 布留式Ⅳ～Ⅴ期  |
| 58 | No.27 | No.2井戸    | 土師器高坏    | 古墳   | —    | 9.0         | 9.0  | 5.5       | 赤褐色  |        | ×      |          |
| 59 | No.27 | No.2井戸    | 土師器小型鉢   | —    | 7.2  | 7.2         | 4.0  | 4.3       | 褐灰色  | ×      | ×      | 手づくね     |
| 60 | No.27 | No.2井戸    | 土師器支脚？   | —    | —    | —           | —    | 5.7       | 赤褐色  | ×      |        | 穿孔あり     |
| 61 | No.30 | No.21溝    | 須恵器坏身    | 古墳   | 12.8 | 15.2        | —    | 3.9       | 灰黄色  | ×      | ×      | Ⅱ型式5段階   |
| 62 | No.30 | No.3土器溜まり | 土師器高坏    | 庄内併行 | 19.2 | 19.2        | 12.6 | 15.8      | 黄橙色  |        | ×      | 西摂5～6様式  |
| 63 | No.30 | No.2土器溜まり | 土師器小型丸底壺 | —    | 12.2 | 12.2        | —    | 7.5       | 黄橙色  |        | ×      | 小型精製三種   |

## 実測遺物一覧表（２）

| No | 調査区   | 層位・遺構      | 種 類     | 時 期  | 口 径  | 最 大<br>(残)径 | 底部径 | 器<br>(残)高 | 色 調 | 焼<br>成 | 胎<br>土 | 備 考      |
|----|-------|------------|---------|------|------|-------------|-----|-----------|-----|--------|--------|----------|
| 64 | No.30 | No.3 土器溜まり | 土師器小型鉢  | —    | 9.2  | 9.2         | —   | 5.9       | 黄橙色 |        | ×      |          |
| 65 | No.30 | No.92 土坑   | 土師器甕    | 布留式期 | 16.6 | 20.8        | —   | 19        | 黄灰色 |        | ○      | 外面ハケ目    |
| 66 | No.30 | No.92 土坑   | 土師器甕    | 布留式期 | 14.6 | 17.2        | —   | 16.7      | 褐灰色 |        |        | 生駒西麓搬入品？ |
| 67 | No.30 | No.92 土坑   | 土師器甕    | 布留式期 | 15.6 | 15.6        | —   | 5.0       | 褐灰色 |        |        |          |
| 68 | No.30 | No.4 土器溜まり | 弥生土器甕   | 弥生Ⅵ  | 13.2 | 23.4        | 3.8 | 26        | 黄灰色 | ○      | ×      | 西摂1～3様式  |
| 69 | No.30 | No.4 土器溜まり | 弥生土器甕   | 弥生Ⅵ  | 14.2 | 17.0        | 3.4 | 18.8      | 黄灰色 | ○      | ×      | 西摂1～3様式  |
| 70 | No.30 | No.4 土器溜まり | 弥生土器甕   | 弥生Ⅵ  | 12.8 | 15.6        | 2.6 | 18.1      | 黄灰色 | ○      | ×      | 西摂1～3様式  |
| 71 | No.30 | No.4 土器溜まり | 弥生土器壺   | 弥生Ⅵ  | 8.4  | 12.6        | 2.0 | 14.0      | 黄灰色 | ○      |        |          |
| 72 | No.30 | No.4 土器溜まり | 弥生土器有孔鉢 | 弥生Ⅵ  | 14.2 | 14.2        | 3.0 | 9.8       | 黄灰色 | ○      |        | 西摂1～5様式  |
| 73 | No.30 | No.4 土器溜まり | 弥生土器有孔鉢 | 弥生Ⅵ  | 13.5 | 13.5        | 4.2 | 9.0       | 黄灰色 | ○      | ○      | 西摂1～5様式  |
| 74 | No.30 | No.5 土器溜まり | 弥生土器甕   | 弥生Ⅵ  | 14.2 | 18.0        | 3.0 | 18.8      | 黄灰色 | ○      | ○      | 西摂6～7様式  |
| 75 | No.30 | No.5 土器溜まり | 弥生土器甕   | 弥生Ⅵ  | 15.0 | —           | —   | 4.5       | 黄灰色 | ○      | ○      |          |
| 76 | No.30 | No.5 土器溜まり | 弥生土器小型甕 | 弥生Ⅵ  | 11.8 | 12.2        | 3.6 | 12.0      | 黄灰色 | ○      |        | 西摂1～3様式  |
| 77 | No.30 | No.5 土器溜まり | 弥生土器小型甕 | 弥生Ⅵ  | 8.6  | 9.6         | 3.6 | 9.2       | 黄灰色 | ○      |        | 西摂1～3様式  |
| 78 | No.30 | No.5 土器溜まり | 弥生土器小型甕 | 弥生Ⅵ  | —    | 11.6        | 3.6 | 9.2       | 黄灰色 | ○      |        |          |
| 79 | No.30 | No.5 土器溜まり | 二重口縁壺   | —    | 18.2 | —           | —   | 6.5       | 黄灰色 | ○      | ○      |          |
| 80 | No.32 | 黄褐色砂質土     | 弥生土器甕   | 弥生Ⅵ  | 18.0 | 19.6        | —   | 7.0       | 黄灰色 | ○      | ○      | 西摂1～3様式  |
| 81 | No.32 | 黄褐色砂質土     | 弥生土器底部  | 弥生Ⅵ  | —    | —           | 5.4 | 3.0       | 黄灰色 | ○      | ○      | 西摂1～3様式  |

## トレンチ一覧表

| No | トレンチ<br>大きさ (m) | 現地<br>表面 (m) | 遺・包<br>上面 (m) | 包含層有無・<br>層厚 (cm) | 時 代   | おもな検出遺構      | おもな出土遺物      | 備 考         |
|----|-----------------|--------------|---------------|-------------------|-------|--------------|--------------|-------------|
| 1  | 6.7×6.7         | 11.27        | 9.02          | ○ 110             | 古墳    | 溝、落ち込み、土坑、杭列 | 弥生土器、土師器、須恵器 |             |
| 2  | 9.4×5.6         | 11.30        | 9.10          | ○ 127             | 弥生～古墳 | 溝、土坑         | 弥生土器、土師器、須恵器 |             |
| 3  | 7.0×4.8         | 11.25        | —             | — —               | 近代    | (操車場操業時の転車台) | —            | コンクリート構造物   |
| 4  | 6.5×3.1         | 11.52        | 8.51          | ○ 119             | 中世    | 耕作土          | 須恵器          |             |
| 5  | 6.7×6.3         | 10.44        | 9.30          | ○ 144             | 弥生～中世 | 井戸、土坑、杭列、土器溜 | 弥生土器、土師器、須恵器 | 弥生土器底部多数    |
| 6  | 6.3×6.2         | 10.32        | 8.75          | ○ 157             | 弥生～中世 | 土坑、鋤溝、溝      | 弥生土器、土師器、須恵器 |             |
| 7  | 6.2×6.2         | 10.06        | 8.50          | ○ 47              | 中世    | 耕作土          | —            |             |
| 8  | 6.4×6.1         | 09.91        | 8.50          | ○ 76              | 中世    | 溝、土坑、杭、足跡    | 土師器、須恵器、瓦器   |             |
| 9  | 6.0×5.6         | 10.00        | 8.41          | ○ 51              | 中世    | 鋤溝           | —            |             |
| 10 | 6.4×6.2         | 10.67        | 8.63          | ○ 30              | 中世    | 土坑、杭         | 土師器          |             |
| 11 | 7.1×4.0         | 10.40        | 8.42          | ○ 62              | 中世    | 溝            | —            |             |
| 12 | 6.0×6.0         | 09.95        | —             | — —               | —     | —            | —            | 整地層のみ人力不可   |
| 13 | 6.0×6.0         | 11.42        | —             | — —               | —     | —            | —            | 整地層のみ人力不可   |
| 14 | 8.1×4.4         | 11.47        | 9.08          | ○ 98              | 中世    | 土坑、溝         | 土師器、須恵器      |             |
| 15 | 6.0×6.0         | 11.45        | —             | — —               | —     | —            | —            | 整地層のみ人力不可   |
| 16 | 7.2×5.2         | 11.42        | 8.98          | ○ 23              | 中世    | 畠跡           | —            | 隆起した畠堆積     |
| 17 | 7.1×5.5         | 11.35        | 9.48          | ○ 121             | 古墳～中世 | 溝            | 土師器、須恵器、瓦器   | 須恵器壺完形品     |
| 18 | 7.7×4.9         | 11.53        | 9.28          | ○ 83              | 弥生～中世 | 鋤溝、足跡、土坑、落込み | 弥生土器、土師器、須恵器 |             |
| 19 | 6.0×6.0         | 11.45        | —             | — —               | —     | —            | —            | 湧水激しく人力不可   |
| 20 | 6.8×6.2         | 11.40        | 8.45          | ○ 50              | 中世    | 鋤溝、          | —            |             |
| 21 | 6.0×6.0         | 11.54        | —             | — —               | —     | —            | —            | 湧水激しく人力不可   |
| 22 | 6.4×5.9         | 11.54        | 8.41          | ○ 31              | 中世    | 耕作土          | —            |             |
| 23 | 6.0×6.0         | 11.83        | —             | — —               | —     | —            | —            | 整地層のみ人力不可   |
| 24 | 6.4×6.2         | 11.61        | 8.35          | ○ 48              | 中世    | 耕作土、野井戸      | 土師器、須恵器      | 包蔵地外        |
| 25 | 8.5×4.1         | 10.10        | 8.62          | ○ 74              | 中世    | 土坑、溝         | —            |             |
| 26 | 6.6×6.0         | 10.55        | 9.30          | ○ 58              | 古代～中世 | 畠堆積、井戸、柱穴、土坑 | 土師器、須恵器、瓦器   | 桶転用井戸、掘立柱建物 |
| 27 | 9.2×6.9         | 10.54        | 9.48          | ○ 70              | 古墳～中世 | 井戸、溝、土坑      | 土師器、須恵器、土馬   | 布留期井戸       |
| 28 | 6.2×6.0         | 10.63        | 9.59          | ○ 70              | 古代～中世 | 土坑、柱穴、溝、落込み  | 土師器、須恵器、瓦器   | 掘立柱建物       |
| 29 | 6.9×4.4         | 10.80        | 8.99          | ○ 66              | 中世以前  | 溝            | —            |             |
| 30 | 6.2×5.9         | 10.29        | 9.22          | ○ 140             | 弥生～古墳 | 溝、落込み、土器溜まり  | 弥生土器、土師器、須恵器 | Ⅵ様式から布留一括   |
| 31 | 6.0×6.0         | 10.71        | —             | — —               | —     | —            | —            | コンクリート構造物   |
| 32 | 6.7×6.6         | 10.77        | 9.50          | ○ 47              | 弥生～中世 | 溝、野井戸、柱穴     | 弥生土器、土師器、須恵器 | 掘立柱建物       |
| 33 | 6.4×5.6         | 11.09        | 8.82          | ○ 92              | 中世    | 溝、土坑         | 土師器、須恵器、瓦器   |             |

## 参考文献

- 摂津市 『摂津市史』 1977
- 摂津市 『摂津市史 資料編一』 1984
- 摂津市 『摂津市史 別巻』 1997
- (財)大阪府文化財調査研究センター 『吹田操車場遺跡』 1999
- (財)大阪府文化財調査研究センター 『吹田操車場遺跡・吹田操車場遺跡 B 地点』 2001
- (財)大阪府文化財センター 『吹田操車場遺跡Ⅲ』 2008
- 鉄道建設・運輸施設整備支援機構 吹田市教育委員会『吹田操車場遺跡確認調査報告書』 2008
- (財)大阪府文化財調査研究センター 『吹田操車場遺跡現地説明会資料 1』 2000. 8. 26
- (財)大阪府文化財センター 『吹田(信)基盤整備工事に伴う発掘調査(その 6)』 2007. 1. 25
- (財)大阪府文化財センター 『吹田操車場遺跡 06-1 の調査』 2007. 3. 25
- (財)大阪府文化財センター 『吹田操車場遺跡現地説明会資料 2』 2007. 6. 24
- (財)大阪府文化財センター 『吹田操車場遺跡現地説明会資料 3』 2008. 2. 17
- (財)大阪府文化財センター 『吹田操車場遺跡現地説明会資料 4』 2008. 7. 6
- (財)大阪府文化財センター 『吹田操車場遺跡現地説明会資料 5』 2008. 10. 12
- 吹田市立博物館 『吹田市立博物館とその周辺』 2001
- (株)クボタ 『アーバンクボタ No. 16』 1978
- (株)クボタ 『アーバンクボタ No. 23』 1984
- (財)大阪府文化財センター 『片山荒池遺跡』 2006
- 寺沢薫・森岡秀人編 『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』 木耳社 1990
- 佐原真編 『弥生土器Ⅰ』 1983
- 東奈良遺跡調査会 『東奈良(大阪府茨木市) 発掘調査概報Ⅰ』 1979
- 東奈良遺跡調査会 『東奈良(大阪府茨木市) 発掘調査概報Ⅱ』 1981
- 金関恕・佐原真 編 『弥生文化の研究 3. 弥生土器Ⅰ』 雄山閣出版(株) 1997
- 金関恕・佐原真 編 『弥生文化の研究 4. 弥生土器Ⅱ』 雄山閣出版(株) 1997
- 大阪府教育委員会 『東奈良遺跡発掘調査概要—茨木市東奈良・沢良宜町所在—』 1976
- 茨木市教育委員会 『東奈良—東奈良土地地区画整理事業に伴う発掘調査概要報告—』 2003
- 豊中市教育委員会 『勝部遺跡』 1972
- (財)大阪府文化財センター 『古式土師器の年代学』 2006
- (財)大阪府文化財センター 『古墳出現期の土師器と実年代 シンポジウム資料集』 2003
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 『大和考古資料目録 纏向遺跡資料(1)第 18 集』 1990
- 庄内式土器研究会 『庄内式土器研究Ⅻ—庄内式併行期の土器生産とその動き—「摂津地域」』 1996
- 庄内式土器研究会 『庄内式土器研究Ⅹ・Ⅸ—庄内式併行期の土器生産とその動き—』 1999
- 石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編 『古墳時代の研究 6 土師器と須恵器』 雄山閣出版(株) 1998
- 八尾市立埋蔵文化財調査センター 『やおの古墳時代—古式土師器のうつりかわり—』 2006
- 八尾市立埋蔵文化財調査センター 『やおの古墳時代Ⅱ 5・6 世紀の土器のうつりかわりと集落』 2007
- (財)和歌山県文化財センター 『田屋遺跡発掘調査報告書』 1990

- 中村浩 『和泉陶邑窯 出土須恵器の型式編年』 (株)芙蓉書房出版 2001
- 中村浩 『和泉陶邑窯の歴史的研究』 (株)芙蓉書房出版 2001
- 山中一郎・狩野久 編 『新版「古代の日本」第5巻近畿Ⅰ』 (株)角川書店 1992
- 鍋島敏也・藤原学 著 『千里古窯跡群』 1974
- 大阪府教育委員会 『陶邑Ⅲ—本文編一』 1978
- 大阪府教育委員会 『国重要文化財指定記念 須恵村・窯・須恵器』 2005
- 菱田哲郎 『歴史発掘 10 須恵器の系譜』 (株)講談社 1996
- 西 弘海 『西弘海論文集 土器様式の成立とその背景』
- 古代の土器研究会 『古代の土器 2 都城の土器集成Ⅱ』 1993
- 古代の土器研究会 『古代の土器 3 都城の土器集成Ⅲ』 1994
- 独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所 『古代の官衙遺跡 I 遺構編』 2003
- 独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所 『古代の官衙遺跡 II 遺物・遺跡編』 2004
- 中世土器研究会 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社 1995
- 小笠原好彦 『物質文化 土馬考』 物質文化研究会 1975
- 土井實 『古代学 大和土製馬考』 古代学協会
- 金子裕之 『律令制祭祀論考 律令期祭祀遺物集成』 塙書房
- 金子裕之 『日本考古学事典 土馬』 三省堂
- 高橋克壽 『歴史発掘 9 埴輪の世界』 講談社
- 狩野久 『新版古代の日本 5 近畿 1 畿内の渡来人』 1992
- 奥野義雄 『新版古代の日本 6 近畿Ⅱ 都市と村の祭りごと』 1991
- 日本考古学協会三重県実行委員会 『日本考古学協会三重大会 シンポジウム水辺の祭祀』 1996
- 松井章・神谷正弘 『考古学雑誌 古代の朝鮮半島および日本列島における馬の殉殺について』 1993
- (財)大阪府文化財センター 『大阪文化財論集Ⅱ 茨木市宿久庄西遺跡出土土馬について』 2002
- 木村泰彦 『長岡京古代文化論叢 乙訓出土の土馬集成』
- 前田豊邦 『古代学研九 53 土製馬に関する試論』 1968
- 西中島駿 『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』 1990
- 金子裕之 『国立歴史民俗博物館研究報告第7集 平城京と祭場』 1985
- 小田富士雄 『九州考古学研究古墳時代編 古代形代馬考』 1976
- 泉森皎 『橿原考古学研究所創立三十五周年記念論集 大和の土馬』 1975
- 斎藤香織 『国家形成期の考古学 馬形埴輪における製作技法の変遷と地域性』 1999
- 水野正好 『文化財学報第二集 馬・馬・馬—その語りの考古学』
- 桜井市文化財協会 『桜井公園遺跡群 双葉古墳群と安倍山遺跡の発掘調査』 2007
- 森浩一 『古代文化の研究 考古学と馬』
- 豊中市 『豊中市史第1巻』 1961
- 東大阪市遺跡保護調査会 『調査会ニュース 若江遺跡出土の土馬』 1980
- 京田辺市教育委員会 『門田遺跡発掘調査概報』 2005
- (財)大阪府文化財センター 『はざみ山遺跡 2 土馬について～府内集成結果の概要』 2006



# 報告書抄録

|        |                                              |
|--------|----------------------------------------------|
| ふりがな   | めいわいけいせきかくにんちょうさほうこくしょ                       |
| 書名     | 明和池遺跡確認調査報告書                                 |
| 副書名    | 吹田操車場跡地地区（仮称）の整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査               |
| シリーズ名  |                                              |
| シリーズ番号 |                                              |
| 編著者名   | 伊部貴雄                                         |
| 編集機関   | 摂津市教育委員会                                     |
| 所在地    | 〒566-8555 大阪府摂津市三島一丁目1番1号 Tel (06) 6383-1111 |
| 発行年月日  | 西暦 2009 年 2 月 4 日                            |

| ふりがな<br>所収遺跡名     | ふりがな<br>所在地               | コード     |          | 北緯                | 東経                 | 調査<br>期間              | 調査<br>面積 | 調査原因                       |
|-------------------|---------------------------|---------|----------|-------------------|--------------------|-----------------------|----------|----------------------------|
|                   |                           | 市町<br>村 | 遺跡<br>番号 |                   |                    |                       |          |                            |
| めいわいけいせき<br>明和池遺跡 | おおさかふ                     |         |          |                   |                    |                       |          |                            |
|                   | 大阪府                       |         |          |                   |                    |                       |          |                            |
|                   | せつつし                      |         |          |                   |                    |                       |          |                            |
|                   | 摂津市                       | 27224   | 2        | 34°<br>46′<br>55″ | 135°<br>32′<br>36″ | 20071226～<br>20080625 | 1252     | 吹田操車場跡<br>地地区（仮称）<br>の整備事業 |
|                   | せんりおか<br>千里丘<br>7丁目<br>地先 |         |          |                   |                    |                       |          |                            |

| 所収遺跡名 | 種別   | 主な時代                                                              | 主な遺構                                                     | 主な遺物                                                                             | 特記事項                        |
|-------|------|-------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------|
| 明和池遺跡 | 集落遺跡 | 旧石器時代<br>縄文時代<br>弥生時代<br>古墳時代<br><br>飛鳥時代<br>平安時代<br>中世<br><br>近世 | なし<br>なし<br>土器溜まり<br>土器溜まり<br>井戸、溝<br><br><br>井戸、畠跡<br>溝 | なし<br>なし<br>弥生土器<br>須恵器、土師器<br><br>須恵器、土師器<br>土師器、須恵器<br>土師器、須恵器、瓦器<br>陶器<br>陶磁器 | 古式土師器<br><br><br><br><br>土馬 |